

成川式土器ってなんだ?

—鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器—

成川



鹿児島大学総合研究博物館

2015

目次

成川式土器ってなんぞ？—鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器—	1	
1. 尤れがみつけた？—「成川式」の発見、研究史—		
成川式土器の研究の道	橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）	20
2. それっていつ？—成川式土器の時代—		
成川式土器の時代	中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）	25
3. どこにある？—成川式土器のひろがり—		
南西諸島の土器と成川式土器	新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）	31
成川式土器の北のひろがり	甲斐康大（延岡市教育委員会文化課）	39
やってきた土器・出て行った成川式土器	橋本達也	43
4. どうやってつくった？—成川式土器をつくる—		
土と砂—成川式土器を作る素材—	篠藤マリア（ハイデルベルク大学院古代学センター）	46
須恵器を模倣してつくった成川式土器	橋本達也	53
5. どのように使うの？—成川式土器を使った人びと—		
鹿児島大学構内に眠る遺跡	寒川朋枝（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）	54
祭祀と成川式土器	中村直子	59
墳墓と成川式土器	橋本達也	65
6. どんな意味がある？—成川式土器をめぐる研究の現在—		
「土師器」の中の「成川式」土器—中津野式から辻堂原式にかけて—		
久住猛雄（福岡市経済観光文化局文化財部）	67	
成川式土器と東北の弥生土器、土師器	辻 秀人（東北学院大学文学部）	85
成川式土器と前方後円墳	広瀬和雄（国立歴史民俗博物館名譽教授）	87
成川式土器と鹿児島の古墳時代研究	橋本達也	96

成川式土器 写真

鹿児島大学構内遺跡（都元団地）	2～9
芝原遺跡	10～11
中津野遺跡	12
清水前遺跡	13
吹上小中原遺跡	14
尾ヶ原遺跡	15
中尾遺跡	16
安良遺跡	17
上苑A遺跡	17
宮脇遺跡	18
大島遺跡	18～19
敷領遺跡	19
横牟礼川遺跡	24
輪之尾遺跡	38
スセン富貝塚	38
天神免遺跡	41～42
広田遺跡	45
成川遺跡	66
神領10号墳	95
成川遺跡（土器）	102
成川遺跡（遺跡）	103

凡例

- ・本書は2015年9月30日～10月27日に開催する鹿児島大学総合研究博物館第15回特別展「成川式土器ってなんぞ？—鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器—」の展示解説として作成した。
- ・展示には出品していない資料についても掲載しているものがあり、また展示品のすべてを掲載しているわけではない。
- ・本書の編集は橋本達也が行った。
- ・各執筆者原稿以外の、提供記載のない写真的なうち鹿児島大学構内遺跡の集合写真は鹿児島県立埋蔵文化財センター撮影協力、それ以外は橋本撮影。記名のない写真解説は橋本が記載した。
- ・原稿を執筆いただいた各氏に、展示を含めて多くの御教示をいただき、ご協力をいただいた。記して謝意を申し上げます。

協力

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター　鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県歴史資料センター黎明館　指宿市教育委員会　えびの市教育委員会
志布志市教育委員会　南さつま市教育委員会　南種子町教育委員会
池畠耕一　松崎大嗣



なりかわしきどき 成川式土器ってなんだ？

—鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器—

この記事も
郡元キャンバスの地下でみかける土器たち　いま、われわれが日々を過ごしている鹿児島大学の郡元キャンバスは、古く縄文時代から近現代に至るまで人との生活の場として利用されてきた「遺跡」です。

この遺跡ではさまざまな痕跡やモノが地中に眠っていますが、なかでも、およそ西暦3世紀半ば頃からはじまり、7世紀初頭までつづく古墳時代の資料がもっとも多く出土します。ここは古墳時代の大規模集落なのです。現在、鹿児島県下で確認されている古墳時代の集落として、もっとも規模の大きな遺跡といって過言ではないでしょう。

そのため、鹿児島大学郡元キャンバスでは、地中を掘るような工事の際には文化財保護法の手続きに則って発掘調査が必要です。その結果、これまでの発掘調査では、古墳時代の堅穴住居や水田などの生活・生業に関わる遺構のほか、さまざまな土器や金属器、玉などの装身具といった遺物が見つかっています。そして、ここで生活した古墳時代の人びとが日常道具として使用し、発掘調査でもっと多く出土するのは成川式土器よばれる土器です。この遺跡で出土した成川式土器は、その出土量や状態の良さでは県下随一といえるものです。

このことを踏まえて、ここでは、そもそも成川式土器とはいつたいうどういう土器なのか？この土器からどんなことが分かるのか？をあらためて考えてみることにしました。

土器は、モノ資料から歴史を考察する考古学においてもっとも使い勝手のいい基準資料です。土器は加工しやすく壊れやすい、しかも腐らないという特徴があります。発想や技術が反映されやすく、また頻繁に取り換えるために、各時代ごとの特徴が表れやすく、その差異から時間軸や地域相を明らかにしやすいからです。

成川式土器も当然そういう側面をもっているのですが、ところが、どうも日本列島に拡がる古墳時代の土器のなかでは、かなり独自の変遷過程や地域性をもっており、とても個性的な強い土器として知られています。そのため、成川式土器にはそのものの分析とともに、古墳時代土器のなかでどう評価できるのかという点も大きな研究テーマです。

成川式土器に関する研究は長い歴史を持っていますが、しかしながらまだ多くの研究課題があります。その中で、鹿児島大学郡元キャンバス出土の資料が果たす役割はけっして少なくないでしょう。この展示解説が成川式土器の重要性を広く知っていただくための一つのきっかけになればと考えています。

(橋本達也)



鹿児島大学構内遺跡郡元団地 稲盛アカデミー地点
発掘調査風景

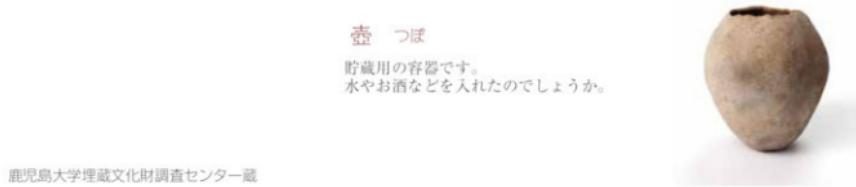


鹿児島大学構内遺跡郡元団地 理学部2号館地点
河川内土器出土状況
(写真提供：鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)



古墳時代土器 集合

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター蔵



壺 つぼ

貯蔵用の容器です。
水やお酒などを入れたのでしょうか。

郡元キャンパスの成川式土器



壺　かめ



台付鉢　だいつきはち

壺は煮炊き用の土器、お鍋です。
台付鉢は壺と形が似ていますがボウルのような
調理具ではないでしょうか。

郡元キャンバスの成川式土器



甑 こしき

平底鉢 ひらぞこはち

鉢はどんぶりのような食器か、調理具としてのボウルでしょうか。甑は蒸し器です。小型のものは手持ちの食器としても用いられたでしょう。

郡元キャンパスの成川式土器



高杯 太がつき

置いて使う食器です。成川式土器のなかでも丁寧に作られたものが多くみられます。



埴 かん



小型丸底壺 こが丸まるぞこつぼ (埴 かん)



翫 はそう

小型壺のながま

飲用器、水やお酒などを飲むための土器だと考えられます。翫は穴に竹筒を通して注ぎ口にします。

郡元キャンパスの成川式土器



勾玉 まがたま

丸玉 まるだま



ミニチュア土器

壺、壺、鉢などを小さくつくりています。
お祭りの道具で、実用品ではありません。

まつりの土器・土製品

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター蔵

郡元キャンバスの成川式土器



須恵器



須恵器模倣高杯蓋



杯 つき



変わった壺



脚？



輪の羽口 ふいごのはぐち

須恵器は5世紀前半に朝鮮半島から渡ってきた技術で、登り窯を使い高温で焼かれた土器です。ここでは5世紀後半から6世紀後半のものが出土しています。

ほか、ここには少し変わった土器を並べてみました。輪の羽口は鉄製品をつくる鍛冶にもちいたものです。高杯の脚部を転用して送風管として使います。

須恵器 すえき
その他の土器



土器集中 4



土器集中 3

南薩、^{まなづ}万之瀬川河口近くに位置する九州西岸ルートの拠点港とみられる遺跡です。河川改修に伴う発掘調査で‘水辺の祭祀’に伴う大量の遺物が出土しました。弥生時代終末～古墳時代前期の松木巣式から中津野式、東原式までの成川式土器のか、布留系甕や肥後系土器、小型瓶製鏡や被鏡も出土しています。

鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

芝原遺跡

南さつま市金峰町



土器集中1



住居7

溝状遺構



遺構外

ながつの中津野遺跡

南さつま市金峰町



写真提供：鹿児島県歴史
資料センター黎明館
写真撮影協力：小学館



河口貞徳氏が、1950(昭和25)年に発掘調査した成川式土器の最古段階、「中津野式」の標識資料です。弥生時代終末～古墳時代前期にかけての土器です。

鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵

しみずまち
清水前遺跡

ぼうのつちょう
南さつま市坊津町



布留系壺



奄美諸島系土器



薩摩半島南端の港町、坊津で出土した古墳時代前期、中津野式から東原式の土器です。土器は布留系壺や奄美諸島の土器も出土しています。

南さつま市埋蔵文化財センター蔵

ふきあげ 川なかば3
吹上小中原遺跡 4号住居

ひあきし ふきあげちょう
日置市吹上町



古墳時代中期、5世紀半ば頃の土器です。甕には台付甕と丸底甕がみられます。またこの頃から赤彩した小型器種がひろがります。

鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

おがはら
尾ヶ原遺跡 4号住居

南さつま市金峰町



古墳時代後期前葉、6世紀前葉の土器です。

南薩西部では熊本からの影響を受け、丸底甌や須恵器も少量ながら出土します。

鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

ささぬき
笠貫遺跡

鹿児島市

成川式土器の新相、笠貫式の標識資料です。
河口貞徳氏を中心として1949(昭和24)年に
発掘調査されました。



鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵



古墳時代後期末、7世紀に入る頃の資料です。須恵器とともに、黒色処理をした須恵器
模倣土器や成川式土器では数が少ない瓶が出土しているのが特徴です。

鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

やすら
安良遺跡 竪穴建物1・2号

しづしつ
志布志市



古墳時代後期後半、6世紀後半の資料です。底部に木葉痕のある壺は奄美諸島の兼久式土器との関係も指摘されています。宮崎平野系の壺も出土しています。
志布志市教育委員会蔵

うえんせん
上苑A遺跡 竪穴住居3・5・6・7号

志布志市



古墳時代後期末、7世紀に入る頃の土器です。

志布志市教育委員会蔵

みやづき
宮脇遺跡

志布志市



鹿児島では少ない飛鳥～奈良時代（7～8世紀）の土器です。新しいスタイルの食器が入ってくる一方で、煮沸用には成川式土器の甕を受け継いだ土器が用いられています。木葉痕のある土器、縦突帯を付けた土器は奄美諸島の兼久式土器との関係も指摘されています。

志布志市教育委員会蔵

おしま
大島遺跡 大型建物ほかさつませんぞいし
薩摩川内市

これのみ包含層資料

8世紀前葉の土器で、薩摩国分寺に隣接地から出土しています。基本的に成川式土器ではなく、律令的土器様式の影響を受けたもので締められますが、なかには突帯をもつ壺か瓶も出土しています。

鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

大島遺跡 6号住居

薩摩川内市



9世紀初頭頃の土器です。薩摩国府・国分寺に関連する資料とみられ、成川式土器とは直接的な系譜関係のうかがえない土器様式になっています。

須恵器を転用した硯が出土しており、文書を扱う役人や僧侶がいたと考えられます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

下二つの須恵器は硯に転用したもの

竈 かまび

敷領遺跡 平地建物遺構

いぶすきし
指宿市

墨書土器「建」

874年の開聞岳の爆発にともなう噴出物で埋没した住居内からの出土資料です。ほとんどが成川式土器と異なる土師器・須恵器で締められていますが、煮沸用の壺だけは、成川式の系譜に達なる台付壺をこの時期でも用いています。土師器杯には「建」の墨書きがあります。

指宿市教育委員会



1. だれがみつけた？—「成川式」の発見、研究史—



成川式土器の研究の道

橋本達也



図1 E. S. モース(明治7年)



図2 ボストン美術館モースコレクションの成川式土器

1 日本考古学のはじまりと「成川式土器」の発見

成川式土器とは1957・58（昭和32・33）年に発掘調査された成川遺跡から出土した土器を標識として名付けられた土器である。現在、おおむね古墳時代の土器と知られるこの土器は、ながく弥生土器として理解されてきた。ここでは、この土器に関する研究の歴史をみよう。

いま成川式土器とよぶこの土器を、最初に学術資料として見出したのは、明治初期にやってきたアメリカ人学者、大森貝塚の発掘で知られるエドワード・シルベスター・モースである。モースは1879（明治12）年5月、鹿児島に調査にやってきた。その際に、垂水で東京大学の「大学博物館のためとて、変わった形をした卵形の壺を貰った。これは高さ14インチで、最大直径の部分に粘土のヒモがついている。いうまでもないが赤い粘土厚くて重く」と日記に記している（石川訳1970）。成川式土器の壺を東京大学の大学博物館の資料として収集したのである¹⁾。

また、モースはアメリカに帰国後、自らのやきものコレクションをボストン美術館に寄贈しているが、その中には成川式土器も含まれている。周到に配置された棚の位置からみて古代の土器として収集されたことがわかる²⁾。

つづいて、スコットランド出身の医師で考古学の研究にも取り組んだN.G. マンローが、1914（大正3）年10月から鹿児島に滞在し、いくつかの遺跡の調査を行った。

その一つ、大隅のクスギノハラでは貝塚を発見し、「中間土器」の発見を報告している（マンロー1915）。これは現在の垂水市終原の地であるが、現地に関しては詳しく述べていてない。なお、「中間土器」とは弥生土器であり、またそれに



図3 鹿児島で調査中のN. G. マンロー



図4 マンロー調査による垂水市森平及びサコノヒラ出土遺物

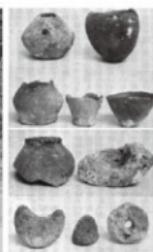


図5 マンローがケンブリッジ大学に寄贈した垂水市浜平出土資料、芹沢長介調査

「齋瓶の破片」、すなわち須恵器と一緒に出土することも記録している。また同じく森平村字浜平の貝塚から、「中間土器」と石器などを発見した。これは垂水市浜平であるが、この際に発見した遺物の写真が、図4であり、その一部はケンブリッジ大学に寄贈されている³⁾(図5・芹沢 1977)。

図4を一見して、大量の成川式土器が並べられている様子がうかがえるが、モースの調査も垂水港から終原の字軽砂あたりまで行われたと考えられ、森平もその範囲に入っている。また、この付近で大量の成川式土器を出土した遺跡としては後ヶ迫A遺跡が現在知られているが、マンローが土器を並べているのは、切目王子神社であるとみられており、そうであれば軽砂、後ヶ迫A遺跡はまさに至近の場所である。モース、マンローが成川式土器を得たのはこの遺跡ないしはその近辺であろう。



図6 橋牟礼川遺跡 浜田耕作の発掘調査(上)とその現況(下)

2 縄文-弥生論争、黎明期弥生土器研究と「指宿上層式土器」

1919(大正8)年刊行の『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第3冊』には「弥生式土器形式分類聚成図録」という附録がある。全国各地の弥生土器が収載されているが、その中に薩摩・大隅地域の土器もあり、そのほとんどが「成川式土器」である。これが鹿児島の弥生土器研究のはじまりであり、またこの後、長く弥生土器として認識される道を歩んだ「成川式土器」の出発点であった(浜田 1919)。

同じ1919年の4月、京都帝国大学教授の浜田耕作は指宿市橋牟礼川遺跡を発掘した。ここでは、開闢岳の噴出物をはさんで縄文土器が下の地層、弥生土器が上の地層から出土し、当時まだ存在していた縄文土器と弥生土器の違いは使用者・人種の違いであるという仮説を否定し、縄文土器と弥生土器は時期差であることを証明する学史的・画期的な成果となった。それは1921(大正10)年に報告されている(浜田 1921)。

...のであるが、ところが当時、弥生土器と認識されていたこの上層土器は、いまになってみれば「成川式土器」であった。学史上の縄文土器と弥生土器の評価に関する重要性は変わることはないが、結果としては縄文時代と古墳時代の土器、なかでも古墳時代後期の土器を比較していたのである。成川式土器が、形態的特徴から大正時代において弥生土器と認識されたのはむしろ当然のことであった。この土器が古墳時代の土器と認識されるのは1980年代を待たなければならず、その弥生土器以来の伝統的な形態こそが成川式土器の特徴とも言えよう。

その後、1939(昭和14)年の東京考古學會の「弥生式土器聚成図録 正編」では南九州の弥生土器の集成もなされており、また資料が少なく暫定的なものとしながらも、それらにA・D・C・Eの順に変遷する4様式が設定された。そのうちC様式が、橋牟礼川遺跡の資料を基準とした後の「成川式土器」であった。主として実測を担当した小林行雄や藤森栄一の目にも「成川式土器」は弥生土器として映っていたのである(小林編 1939)。

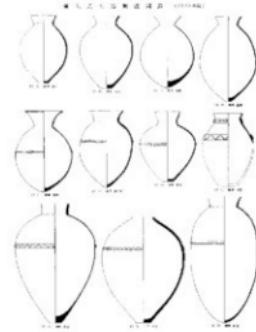


図7 「成川式土器」を中心とする
「弥生式土器聚成図録 正編」
南九州地方の壺

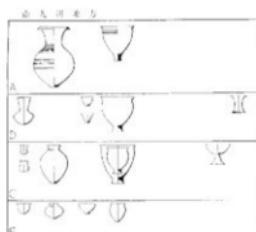


図8 南九州の弥生土器についての
はじめての編年(「弥生式土器聚成図録
正編」)、C様式は「成川式土器」

3 戦後の弥生土器研究、「薩摩式土器」の時代

戦後、1950・52(昭和25・27)年に鹿児島県の弥生土器分類を発表した寺師見国は今日の成川式土器を「薩摩式土器」として把握し、それ以降、各遺跡報告等においてもますます弥生土器としての認識が固定されていくこととなった(寺師 1950・1952)。

河口貞徳が1952(昭和27)年に発表した「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」では(河口 1952)、鹿児島市

筆者注 筆貫遺跡において「齊発土器」が包含層中の上層部で出土すること、鹿児島市の鹿児島大学遺構内遺跡郡元団地でも弥生式土器に少量の「齊発」が出土すること、南大隅町千足遺跡でも「齊発の蓋形土器」と弥生土器の鉢形土器が並んで出土し、また弥生土器大壺の側から鉄製刀子が出土したことを報告している。河口による意欲的な調査・研究の蓄積のなかで、弥生土器に「齊発土器」すなわち須恵器が伴うことが頻度高く観察されているのだけ、弥生土器という認識に変わりはなかった。むしろ、当時はまだ古墳時代土器としての土師器研究が十分進んでいなかったことや、時代区分と土器型式の関係があいまいな認識であったため、鹿児島では須恵器を使う時代=古墳時代まで、弥生土器が存続するという考えを生み出すに至った。

またこの論文では、河口も弥生土器の分類を行っており、「成川式土器」に相当する土器を3様式と4様式に二分している。この細分は、中津野遺跡の発掘調査を受けた画期的な成果であった。ただ、この段階では中津野出土土器を含む様式を筆貫遺跡出土土器よりも後出するものと位置づけていた。これは後に前後逆であったことが理解されるようになる。



図9 森貞次郎が示した東・南九州の
弥生後期土器、最下段は「成川式土器」

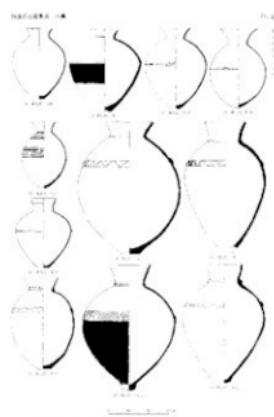


図10 成川式土器を中心とする
河口1968「弥生式土器集成 本編1」
南九州の壺

4 成川遺跡の発掘調査報告書と成川式土器

1957・58(昭和32・33)年、指宿市山川町成川遺跡の発掘調査が行われる。これによって大量の土器が出土し、その後の研究に大きな影響を与えることとなった。「成川式土器」はこの遺跡の名称から採られた名である。ただし、1974年刊行の報告書で言及はあるものの、まだその名称は一般化しておらず、それは1980年代に入っていることである。

森貞次郎は、1966年に九州の弥生土器を総覧するなかで(森1966)、薩摩式は、弥生終末から関東の和泉式に相当するものを含み、5世紀末を中心とする鉄器も存在することから、弥生の下限を超え、長期存続する土器であることを指摘した。そして、この段階でも「成川式」の壺が弥生前期の壺が弥生後期の壺としてとして図示されている。

同時に、薩摩式段階は、装飾文様が地域的特色を濃厚にあらわし、他の地域からは隔離された生活環境にあるとし、「薩摩式土器の文化圏は隼人の地域と一致する後進地域である。熊襲・隼人の伝承はこの地域の古墳文化浸透時に成立したものであるに相違ないが、弥生後期終末以降の後進的な地域性がその背景をなしている」として成川式土器と隼人を結びつけるような言説が現れた。九州南部の考古資料にみられる地域性を熊襲・隼人と結びつけ、また社会の停滞などとして理解する動向は、古墳時代の墓制研究とともにものとして、成川遺跡の発掘調査後、とくに昭和40年代以降に拡がる認識である。

この時期、河口貞徳は1968年の「弥生式土器集成」において、弥生土器をI~V様式に分類し、その第V様式に「成川式土器」をあて、成川遺跡出土土器実測図も多く収載した(河口1968)。また1971年の「土師式土器集成」では、「成川式土器」の名称を用い、この土器を弥生終末に位置づけつつも、土師器に属するものを含むことを指摘している⁴⁾。成川遺跡の発掘調査以来、成川式土器という名称も使われるようになっていたようだが、公に「成川式土器」の語が使用されたのは、これが初出であろう。

1974年、成川遺跡の報告書が刊行された。大量に出土した土器の中には、土師器として認識されるものが含まれており、そのため成川遺跡は弥生時代終末を中心するものの、中央では古墳時代に入っていた、すなわちこの遺跡、あるいは鹿児島では、中央=近畿よりも文化が遅れて伝存していたと指摘している。「当地方においては、在來の弥生式土器の文化から新しい土師器文化への転換がきわめて緩慢で、両者併存の期間もまた長

かった」という鹿児島の特殊性、停滞性を強調するような指摘が行われている(田村編 1974)。このような鹿児島の古代に対する辺境史觀は、とくに 1970 年以降の主流となるが、今日では受け入れることのできない學説である。

5 成川式土器研究の展開

1970年代後半からは鹿児島県下でも文化財保護行政が整備されはじめ大規模な調査が行われるようになり、資料数が増加はじめたこともある、あらたな展開が生じる。1980年には池畠耕一（池畠1980）、1981年には多々良友博（多々良1981）が、弥生後期から古墳時代土器としての成川式土器の細分と編年体系の構築を目指した意欲的な論考を相次いで発表した。この段階になってようやく成川式土器は弥生土器という枠組みから本格的に抜け出し、その大部分が九州南部独自の古墳時代土器であることを評価できるようになった。須恵器と共にすることも正当に評価されるようになった。

これらを受けて、その総合的な編年研究の総括として登場し、今日も影響力を維持し続いているのが、中村直子の1987年の「成川式土器再考」である（中村1987）。中村は成川式土器として、中津野式土器から東原式、辻堂原式、笠貫式という変遷を構築し、それが弥生終末から古墳時代後期まで該当するとした。その後、その終末が7～8世紀にもおよぶことがあらためて視点として加えられているが、本論考で示された成川式土器の分類、変遷觀はおおむね現在の研究でも踏襲されており、それを基軸として、さらに詳細な編年、小地域性、使用形態などの研究が進んでいる。

今後とも、鹿児島の古代史をあきらかにする上で成川式土器の詳細な研究の進展が期待されるが、近年の発掘調査によってあらたに良好な資料も増加しており、編年や分布などの基礎的な研究の再検証も必要な段階となってきている。とくに、古墳時代土器の研究は、他地域で一層精緻な分析が進んできており、それらとの併行関係を再検討した上で、弥生・古墳・古代各時代の社会的な動向のなかで成川式土器とは何かを位置づけるような研究が必要になってきているといえるであろう。

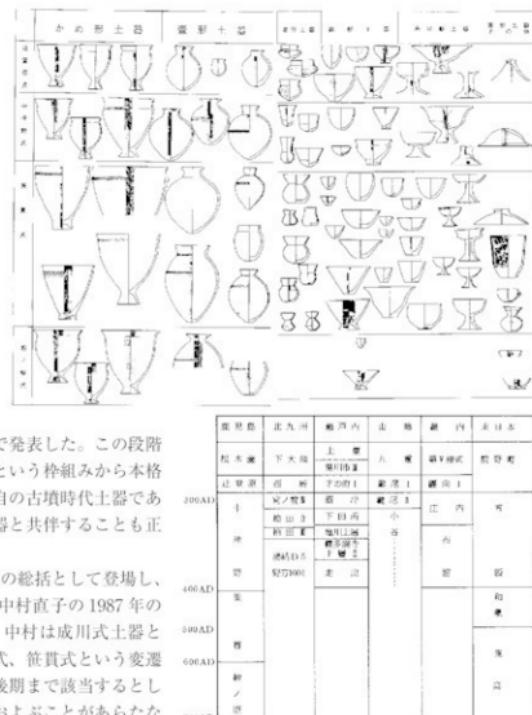


図 11 池田 1980 の成川式土器編年

第1表 成川式土壤鑑定比較表
（農業技術士は森林1966）氏による

第2表 成田式土壤通气方案



註

- また、東京帝国大学、明治31年刊行の「日本石器時代人民遺物発見地名表」には、「大隅国肝属郡垂水郷終原貝塚 土器、石器 人類学教室収品」がある。あるいはこれはモースの調査によるもの可能性はあろうか。
- 堀以外にも、その上段の棚の壺やさらにその上の高杯など小型器種にも成川式土器が含まれているようにも見えるが、写真だけでは判断できない。
- ほか同志社大学にもマンローの成川式土器が所蔵されている（岡本2013）。
- このほか河口貞徳は1981年の編年提示において、中津野遺跡出土土器を標識として弥生第Ⅲ様式を弥生時代後期後葉に位置づけている。1980年代前半はまだ土器様式とその帰属時期はかなり不安定であった。

引用文献

- 池畠耕一 1980 「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会
- 岡本孝之 2013 「鹿児島のマンロー」[N.G. マンローと日本考古学—横浜を掘った英国人学者] 横浜市歴史博物館
- 河口貞徳 1952 「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳 1968 「南九州地方」「弥生式土器集成」本編1 東京堂出版
- 河口貞徳 1971 「鹿児島県」「土師式土器集成」本編1 東京堂出版
- 河口貞徳 1981 「新南九州弥生式土器集成」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 小林行雄編 1939 「弥生式土器聚成図録」正編 東京考古學會学報第1冊 文星堂
- 芹沢長介 1977 「マンローがケンブリッジ大学に寄贈した日本の資料その他について」『考古学研究』第24卷第3・4号 考古学研究会
- 多々良友博 1981 「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 田村晃一編 1974 「成川遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告第7 文化庁
- 寺師見国 1950 「鹿児島県の弥生式土器」『考古学雑誌』第36卷第1号 日本考古學會
- 寺師見国 1955 「鹿児島県の弥生式土器」「鹿児島県考古学会紀要」第1号 鹿児島県考古学会
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」「鹿大考古」第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 浜田耕作 1919 「弥生式土器形式分類聚成図録」「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第3冊 京都帝国大学
- 浜田耕作 1921 「薩摩國掛宿村土器包含層調査報告」「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第6冊 京都帝国大学
- 森直次郎 1966 「九州」「日本の考古学」III 弥生時代 河出書房新社
- E. S. モース (石川欣一訳) 1970 「日本その日その日」東洋文庫172 平凡社
- Edward S. Morse, Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery, Cambridge, Printed at the Riverside Press, 1901
- N.G. マンロー 1915 「太古の大和民族と土蜘蛛」「考古学雑誌」第6卷第4号 考古學會

はしむれがわ
橋牟礼川遺跡いまときし
指宿市

左4つの写真はいずれも弥生土器と認識された成川式土器。右端写真は須恵器。この調査の際にも成川式土器とともに須恵器が出土している。

浜田耕作 1921 より転載

京都大学総合博物館蔵



2. それっていつ？—成川式土器の時代—



成川式土器の時代

中村直子

成川式土器の誕生—南九州における弥生～古墳へ—

「成川式土器」と呼称されてきた土器群を現在の編年観にてらすと、弥生時代後期から古代（9世紀）にまで及ぶが、様々な編年案を経て（池畠 1980・鎌田 2006・2014、河口・乙益 1973、相美 2014・2015、多々良 1981、中村 1987・2009、森 1966）、現在は弥生時代終末期以降の南九州在地土器を「成川式土器」と呼称するのが一般的である。中村（1987）による編年（図1）では中津野式から笠貫式にあたる¹⁾。

成川式土器は、広口で脚台付きの壺や装飾性の強い大壺を保有し続けるなど、弥生土器的な様相を強く残し、古墳時代に普及する土師器と比較すると地域色が強い土器として知られている。南九州と壇島を中心に分布している。大隅諸島以南の土器は、広口で脚台を持つ壺など成川式土器と類似する点もあるが、器種組成・型式差から成川式土器とは区別できる。

成川式土器は、地域差を内包しつつも南九州を包括する分布図を形成しているが、この前段階には、系統の異なる二つの土器様式が南九州に分布していた（図2）。大隅半島を中心に分布する山ノ口式は、暗褐色の色調を基調とし、口縁部や突帯の端部をM字状に仕上げ、多条突帶で壺や壺を装飾する特徴（図2-23・24）など、もともと弥生時代中期前半段階に南九州全域に分布していた入来式の特徴をよく残している²⁾。

一方、薩摩半島西部地域に分布する黒髪式は、肥後地域を中心に分布するもので、例えば壺口縁端部を丸く仕上げる特徴（図2-3）や灰白色を基調とした色調など、山ノ口式とは異なる製作技法を持つ土器様式である。薩摩半島西部地域では、在地土器の新しい製作技法として黒髪式土器の技法を導入し、それが後期には在地化し松木蘭式となった。

弥生時代後期段階には、山ノ口式の系譜を引く高付式が大隅半島に、黒髪式土器の系譜を引く松木蘭式が薩摩半島西部に分布するが、時期が下るにしたがって、高付式の壺に無文・中空脚台の壺が増加し（図2-26）、松木蘭式・高付式に類似する形式が増加するなど、これらの様式は類似度を増していく。弥生時代終末期の中津野式になると、高杯の存否や壺に地域差が見られるものの、壺は南九州で一的な様相となる（図2-7・8・16・27）。成川式土器は、東西の様式差が解消されるとともに、南九州独自の様式へと変化した結果、誕生した土器様式だと言つて良い。

この土器様式の動態を、外来系土器の流入と合わせてみてみると、黒髪式土器が薩摩半島西部に導入

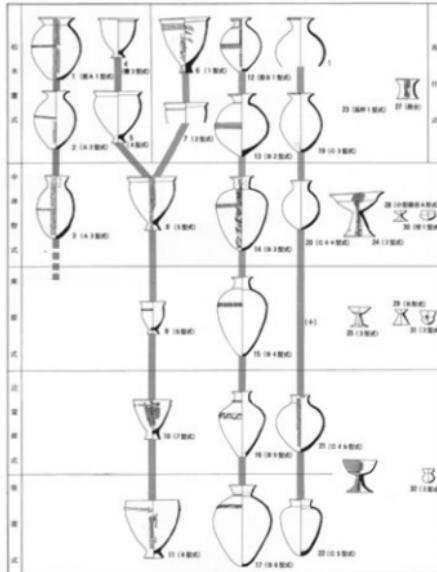


図1 成川式土器編年表
(中村 1987) より転載

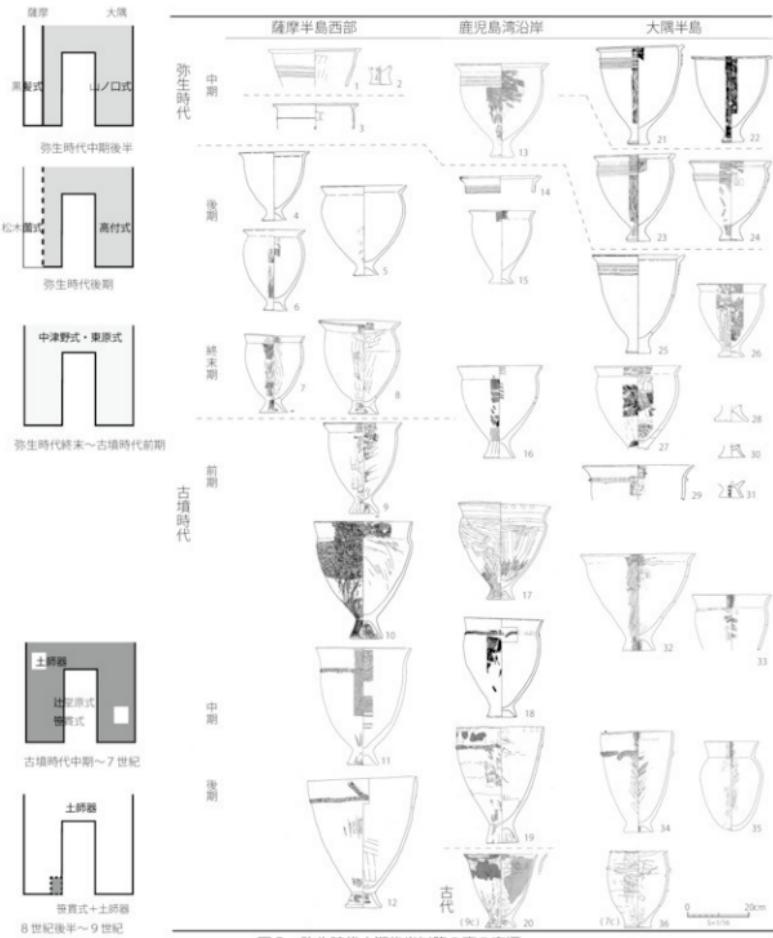


図2 弥生時代中期後半以降の壺の変遷
中村・吉本(2015)より転載、一部改変

されたのは、ちょうど九州西部をルートとする「南海産貝交易」(木下 1996)がピークを迎えた時期であり、薩摩半島西部地域の集団もこの交易に携わっていたと考えられる。また同時期の大隅半島には、その契機はまだ不明だが、多くの瀬戸内系土器が搬入され(河野 2011)、薩摩半島も大隅半島も遠隔地との交易が活発な時期であった。一方、弥生時代後期以降には、在地土器様式の東西差が解消されるとともに、肥後・日向地域の土器様式との差が大きくなり、中期後半に取り入れられた外来系土器の在地化がすむ傾向にある。同時に外来土器の搬入量も南九州の土器の搬出量も減少しており、土器から見ると、遠隔地とのダイナミックな交流は減少しているよう見える。このような社会状況が地域色の強い成川式土器を誕生させた背景だったのではないかと推定される。

成川式土器の変遷

1) 壺の型式変化

成川式土器には煮沸用の壺、貯蔵用の壺・大壺、食器用の高杯・小型丸底壺・埴・鉢などの器種が存在している。壺や高杯など成川式土器内で共通する形式がある一方、壺や鉢などの中には地域によって異なる形式が複数存在する場合もあり、多種多様な形式が存在しているといってよい。その中で、成川式土器の変遷をみるのに有効な部分が、壺の口縁部形態である。壺は各遺跡でおおよそ共通した形態を呈し、また量も多いという利点がある。

弥生時代後期以降の壺口縁部は、口縁部の肥厚部分が伸びていくとともに立ち上がり、屈曲がゆるやかになり、最後は直立もしくは内湾気味の形態へと変化する（図3）。古墳時代に全国的に普及する土師器壺のくの字状に屈曲する口縁部とは対照的な変化である。

おおよその目安として、内外面ともに屈曲部の稜線が残るもののが中津野式段階（弥生時代終末期、図2-7・8）、屈曲部分がゆるやかになるのが東原式段階（古墳時代前期、図2-9～10・16～18）、直立に近いが端部がゆるく外反、もしくは短く外反するものが辻堂原式段階（古墳時代中期、図2-11）、口縁部が直立もしくは内湾気味になるものが笹貫式段階（古墳時代後期、図2-12・19・34・36）である³⁾。ただし、辻堂原式段階のもので、完全に直立・内湾しているものも見られることから、口縁部の直立化の過程やスピードは、遺跡によって異なるようである。なお全体的な傾向として、東原式の段階には口唇部や突帯の角などをきっちり仕上げる一方、笹貫式段階になると端部の仕上げが甘く丸みを帯び、粘土を押されたユビオサエ痕が残っているものが多く、器面調整や仕上げ方は粗雑化の傾向がうかがえる。

以上のように口縁部形態は時期を把握するには有効ではあるが、壺には様々なサイズがあり、そのどれもが時間的変遷を把握するのに適した口縁部形態を呈しているわけではない。上記の口縁部変化は、中型の口径30～40cm、器高40～50cmのサイズ壺に見られるもので、小型の壺には古手のものでも屈曲部がゆるやかなものや、反対に新しい段階のものでもきつく屈曲するものなど、時間的経過を示す型式変化に当てはまらない形態のものが多く存在する。器高50cmを超える大型品もまた同様である。

2) 器種組成の変化

成川式土器の器種を系譜で分けると⁴⁾、南九州弥生土器の系譜を引く大壺・壺・大壺・鉢類と南九州以外の九州弥生土器の系譜を引く高杯、土師器系の小型丸底壺・埴・高杯、須恵器の影響を受けた陶模倣品に分ける事ができる。またその他、小型丸底壺を大型化した壺など外来系土器を変容し、在地化した形式も多く存在する。一般的に他の土器様式とは排他的な関係にあるとされている成川式土器だが、食器を中心として外来系の器種を導入しており（中村1999、甲斐2015）、その変遷を追うことで食器組成の変化も見えてくる。

時期別に器種組成を見ると、大きく2段階に分けることができる（図4）。弥生時代終末期から古墳時代前期の中津野式・東原式の特徴としては、大型の高杯が安定的に出土するようになり、同時に小型丸底壺や鉢類などの食器類の器種が充実する。食器類が増加するのは、弥生時代中期後半の大隅半島に分布する山ノ口式や弥生時代後期の川内川下流域の松木蘭式に見られたが、それが全域に普及するのは東原式段階である。食器組成として見ると、少量の大型高杯と多量の小型鉢類が多いことから、共用器である置食器と鎗々器の手持食器を中心として構成されていることがわかる⁵⁾。

古墳時代中期以降の辻堂原式・笹貫式を見ると、薩摩半島から鹿児島湾岸地域は東原式段階の機種組成をほとんど引き継いでいるが、高杯は土師器系高杯へと変化し、小型化・多量化する。小型の鉢類も多く、また、須恵

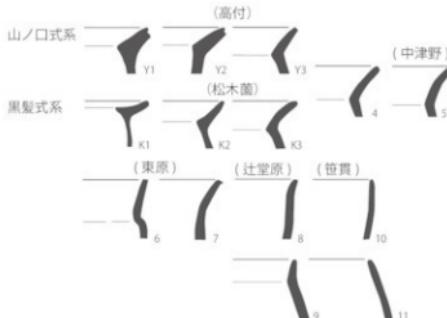


図3 壺口縁部形態の変化

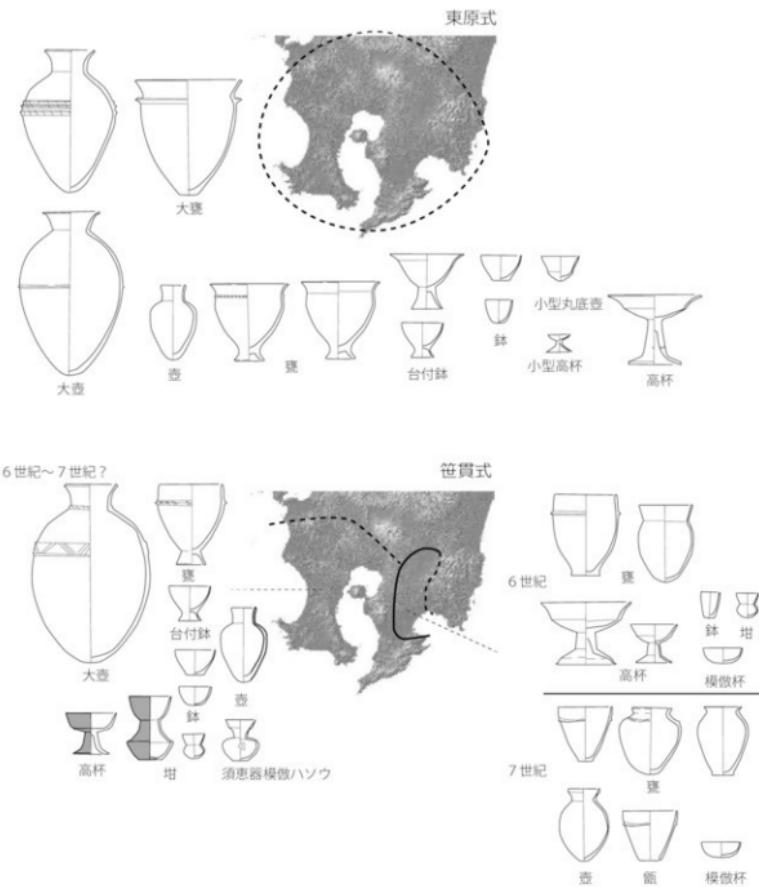


図4 器種組成の変化

器籠模倣品や在地的な壺など、飲用器の発達がみられる。壺には大型のものと小型品2種類が認められる。したがって、共用器である大型飲用器と銘々器である置食器と飲用器、および手持食器がセットとなっている。この様相は、少なくとも7世紀まで続くと考えられる。また、後述する指宿地方の古代の例を見ると、高杯と壺が8世紀初頭段階の遺構から出土しており、この時期まで在地的な置食器と飲用器が残っていることがわかる。

一方、志布志湾沿岸地域から都城盆地では、平底の壺や土師器系丸底壺、模倣杯など、土師器的な様相が強く（相美2004・2015、中村2004）、日向地域との類似点も多く見られる。食器組成で見ると、大型で共用の置食器が残っており、それに加えて銘々器の置食器と手持食器で構成されている。7世紀段階では、高杯が消失し、模倣杯が増加、壺が安定的に出土する。置食器がなくなり、銘々器である手持食器中心の食器組成となっている。他地域では古墳時代中期以降に高杯が減少し、杯中心の食器組成に変化するが（内山1996）、南九州でそれが定着し始めるのが7世紀ということになる。さらに指宿地域では、手持食器中心の食器組成が認められるのが9世紀段階

であり、南九州内でもその定着には、かなりの時期差がある。

成川式土器の終焉

成川式土器の終焉の様相は不明確な部分が多いが、唯一、指宿地方において、成川式土器の最終段階の様相がよくわかる遺構が確認されている。指宿市周辺の遺跡には、開聞岳の火山噴出物が複数層発見されているが、成川式土器に関連するものとしては、7世紀末ごろの青コラ層と874年の開聞岳噴火噴出物とされる紫コラ層がある。成川式土器の最終段階は、その青コラ層と紫コラ層の間で確認されており、特に紫コラ層直下出土のものは、貞觀年間火山噴火で被災したもので、9世紀後半の様相を示すものである。

下山（1995）は、橋牟礼川遺跡の事例をもとに、指宿地方では8世紀から9世紀にまで成川式が煮沸具として残り、食膳具を中心とする土器化が進んだと指摘した。さらに近年、敷領遺跡において竈を作った建物跡から、成川式土器を含む共伴資料が検出された（中摩・恵島2015）。成川式土器甕（図2-20）と土師器甕・皿・須恵器横瓶などが良好な残存状況で出土しており、当時の様子を生きしく伝えている。

釜貫式段階の土器相の変遷を數個遺跡や橋牟礼川遺跡の事例を参考にまとめると（図5）、8世紀段階では大甕が消失する一方、須恵器などの食膳具が安定的に加っている。9世紀段階になると土師器食膳具の他、土師器煮沸具も加わって、成川式土器としては竈だけが残る。

紫コラ層直下から出土する成川式甕には、2タイプがある。体部がバケツ形の直立した口縁部で脚台を持つタイプと、口縁部をくの字状に外反するタイプである。前者は釜貫式甕の典型的なものであり、後者は土師器甕との「折衷型」（松崎2014）である。土師器と比べると粗雑な作りで、口縁部を上面から見ても梢円状を呈し、ゆがみも大きいが、古墳時代の釜貫式の甕に比べると器壁が薄く、内面ヘラケズリを行うなど土師器の製作技法を取り入れていることがうかがえる。

もともと成川式土器の甕底部は脚台か平底を呈し、補助具なしに自立できる事が特徴だが、最終段階の甕にもその特徴は残っている。紫コラ層直下から検出される建物には竈が確認されているが、同時にかのみの建物も検出されており、炉で使用する煮沸具として残った可能性が高い。

指宿地方の成川式土器終焉までの過程をたどってみると、徐々に古代土師器や須恵器が取り入れられるとともに、成川式土器を使用していた人々の生活が変わっていく様子を垣間見ることができる。

註

- 1) 中村（1987）編年には、特に中津野式土器の時期的位置付けと細分について再検討する必要がある（中村2013）が、本稿では便宜的に編年設定時の時期区分を使用する。
- 2) 弘生土器の編年観は中國（1997）による。
- 3) 釜貫式段階には、「くの字に屈曲する口縁部をもつ丸底甕も含まれるが、本稿ではその型式変化は割愛する。
- 4) 系譜の分類については、一部、垣（2011）を参考にした。
- 5) 食器の分類は、内山（1996）による。

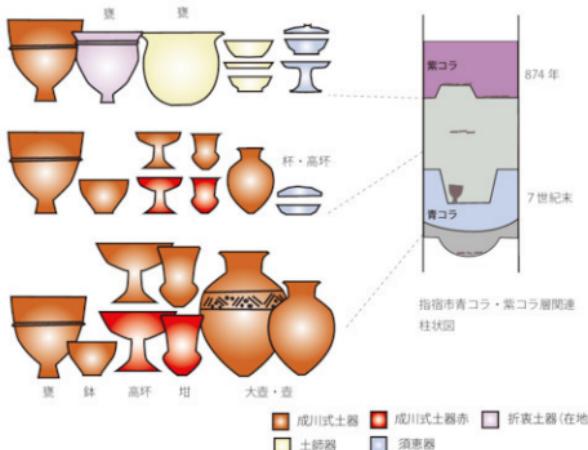


図5 成川式土器最終段階の土器相（指宿地域）

文献

- 池畠耕一 1980「成川式土器の細分編年試案」「鹿児島考古」第14号 pp.1～41 鹿児島県考古学会
- 内山敏行 1996「手持食器考—日本の食器使用法の成立—」[Hominids] 1 pp.21～47 CRA
- 甲斐康大 2015「九州南部の古墳時代食膳具の変化・精製赤彩土器の出現-」『Archaeology from the South』3 pp. 195～205
- 本田道輝先生追職記念事業会
- 鎌田浩平 2006「古墳時代指宿地方における土器の様相」「Archaeology from the South」pp. 135～150 鹿児島大学考古学研究室 25周年記念論集刊行会
- 鎌田浩平 2014「薩摩半島西海岸側の地域編年に向けての基礎作業—壺・壺形土器を対象として—」『Archaeology from the South』2 pp. 191～204 新田栄治先生追職記念事業会
- 河口貞徳・乙益重隆 1973「第4章 出土遺物 第1節 土器」pp.55～108 「成川遺跡」文化庁
- 河野裕次 2011「南九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究」「地域政策科学研究」Vol. 8
- 木下尚子 1996「南島貝文化の研究—貝の道の考古学」法政大学出版社
- 相美伊久雄 2004「成川式土器」の器種組成について（予察）—杯形土器の様相を中心にして—「縄文の森から」第2号 pp. 29～36 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 相美伊久雄 2014「南九州東端域における7～8世紀の土器様相—志布志湾北岸域の壺形土器を中心にして—」『Archaeology from the South』2 pp.221～238 新田栄治先生追職記念事業会
- 相美伊久雄 2015「本葉痕をもつ成川式土器」「Archaeology from the South』3 pp.185-194 本田道輝先生追職記念事業会
- 下山一覧 1995「考古学からみた隼人の生活—『隼人』問題と展望—」新川登亀男編『西海と南島の生活・文化』pp.169～199
名著出版
- 多々良友博 1981「成川式土器の検討」「鹿児島考古」第15号 pp.89～116 鹿児島県考古学会
- 壇 佳克 2011「土師器の編年 ①九州」「古墳時代の考古学」1 古墳時代史の枠組み pp.57～67 同成社
- 中園 啓 1997「九州南部地域弥生土器編年」「人類史研究」No.9 人類史研究会
- 中村直子 1987「成川式土器再考」「鹿大考古」第6号 pp.57～76 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子 1999「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション—南九州の土器をメディアとして—」「新しい関係性を求めて－コ ミュニケーションの諸相－」鹿児島大学教育研究室内特別経費全学プロジェクト報告書No.1 pp.63～71 鹿児島大学
- 中村直子 2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」「新しい関係性を求めて「コミュニケーションのかた ち－ことば・もの・メディア－」pp. 47～62 鹿児島大学
- 中村直子 2009「7・8世紀の成川式土器」「南の縄文・地域文化論考」中巻 pp.119～128 南九州縄文研究会
- 中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」「ナガラ原東貝塚の研究」：5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島 pp.259～268 熊本大学
- 中村直子・吉本美咲 2015「鹿児島県域の台付壺と器台」「有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流」 pp.79～90 長崎県考古学会・九州考古学会
- 平田信芳 1979「隼人が用いた土器・成川式土器...」「隼人文化」第5号 pp.34～44 隼人研究会
- 松崎大嗣 2014「成川式土器と古代土師器の「折衷型」—指宿市敷道遺跡十町地点出土の資料を中心に—」『Archaeology from the South』2 pp. 205～220 新田栄治先生追職記念事業会
- 森貢次郎 1966「弥生文化の発展と地域性—九州—」『日本の考古学』III 河出書房新社



3. どこにある？—成川式土器のひろがり—



南西諸島の土器と成川式土器

新里貴之

はじめに（図1）

南西諸島（琉球列島・琉球弧・南島）には古墳文化が及ぶことはなかったが、土器文化として南九州の成川式土器に類似した脚台壺を用いる地域がある。それは、九州に最も近い南西諸島北部に位置する大隅諸島と奄美諸島であり、それぞれの地域の土器は「上能野式土器」を代表とする土器群（1～4）と、「スセン式土器」を代表とする土器群（5～11）である。それより南に位置する沖縄諸島の尖底深鉢を指標とする無文尖底系「大当原式土器」（12～18）、土器を用いることがない先島諸島の「無土器文化」（貝斧・石斧文化：19～23）¹⁾と対峙させると、その土器文化の地理的勾配の特徴は明らかであり、煮炊き用である壺または深鉢の形態からみた南九州の成川式土器の影響は、南西諸島の北部地区に色濃く表れることになる。しかしながら、それらの地域においても成川式土器様式が採用されるわけではなく、島嶼部ごとに地域性をもつ土器様式を使用しているのが実態のようである。

以下に、成川式土器と関連性のある大隅諸島・奄美諸島の土器群の概要を示していきたい。

I 大隅諸島の土器（図2）

現在、古墳時代並行期の土器として設定、通用されているのは種子島・上能野貝塚出土土器を標準とした「上能野式土器」である。器種は壺の單一型式であり、口縁部は肥厚して断面三角形状になる。プロボーションは釣鐘形、やや上げ底の充実した脚台、砂粒を多く含み、焼成良好、ハケメやヘラ調整が施される。文様は胴上部に施され、鋭い沈線文で並行線を基本として、直線と曲線の山形やその変形文で構成される。また、胴部には刺みを有する平坦な突帯を巡らし、その接点で一方が垂下する。同じ形状の無文土器も存在しており、須恵器、土師器を伴わない（河口 1973）、とされている。壺の特徴を捉えると「肥厚口縁脚台系土器」であり、今まで一定範囲の調査範囲をもった遺跡で壺を伴った例がないため、壺その他の器種がほとんど伴わない様式となっていると考えられる（中園 1988）。

この「肥厚口縁脚台系土器」の上能野式土器も、数段階に区分される可能性がある。

現在のところ、口縁（端）部形態と文様、脚台の形で区別されるもので、口唇部が口縁部の厚さとほぼ同様であるが、口唇部を平坦に押さえることで、外面側にわずかに粘土が突出し（26・27）、文様は一条の刻目突帯文や格子目状の浅い沈線文を施し（25～29・31）、低い中空脚台（30）を有する土器群が、種子島・本村丸田遺跡（盛岡・酒匂 1986）から一定量出土している。1点椎ノ木遺跡出土土器に類似した口縁部も出土している。ほかにも種子島・鳥ノ峯遺跡（橋口はか 1996）や広田遺跡（桑原はか 2003）で1点ずつ出土している。この段階を肥厚口縁系として分類することはできないが、肥厚口縁系の前段階の土器として位置づけられる。

馬毛島・椎ノ木遺跡（中村はか 1980）では、口縁部に平坦および三角形状の粘土を貼りつけることによって、肥厚口縁となり、外見上は三角形状の肥厚口縁となるものである（33・34）。直線や弧状の曲線を組み合わせる浅い沈線文が描かれているが（35）、文様の全体像は不明である。底部は中空脚台（36）と考えられる。三角形状肥厚口縁のみ認められることによって他の遺跡の土器資料と区別される。

種子島・上能野貝塚（河口 1973）では、三角形状肥厚口縁部のほか（37・38）、口縁部外面に粘土板を貼りつけ、台形や四角形状の肥厚口縁部にするもの（39）の両者が混在しており、文様は梯子状の文様や直線文などを

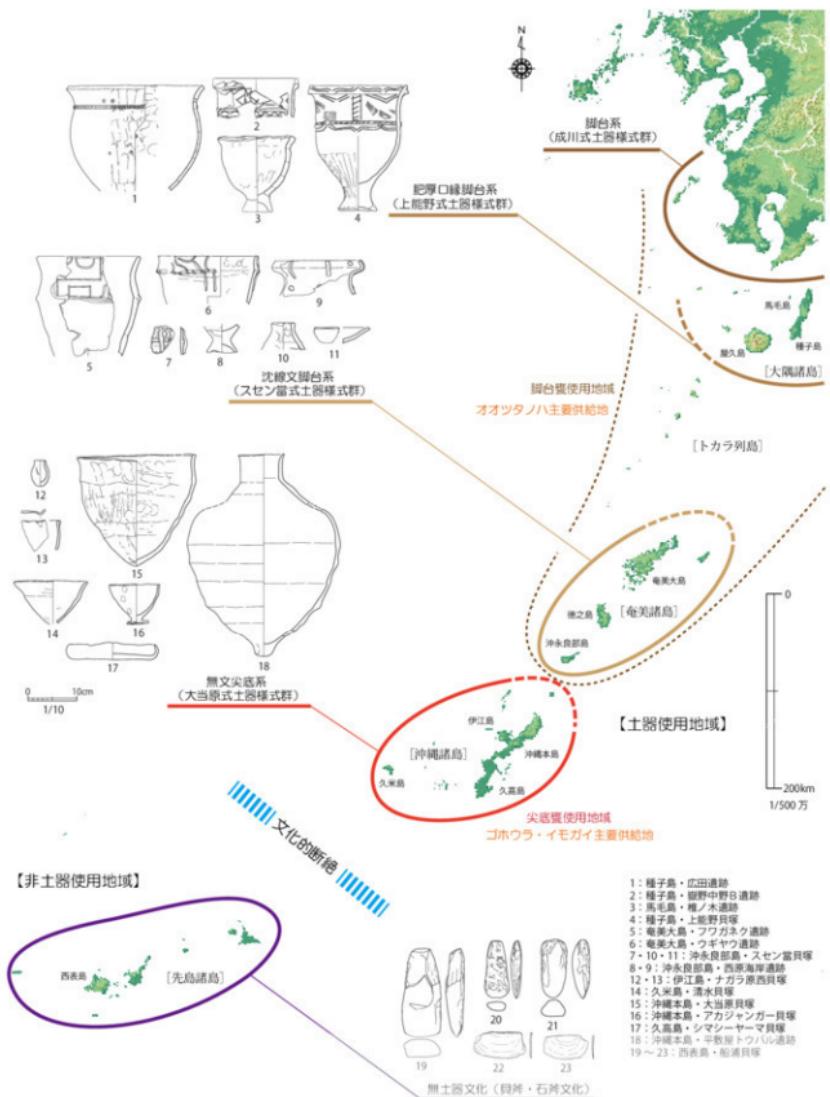


図1 古墳時代頃の南西諸島の文化範囲

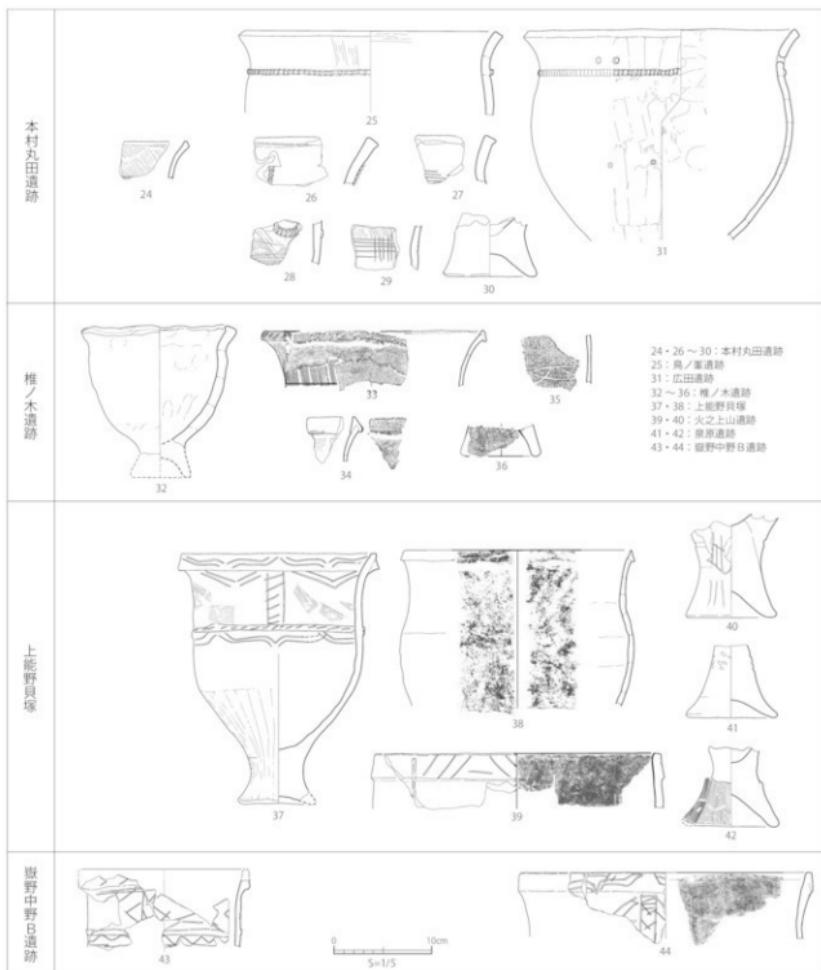


図2 古墳時代並行期以降の大隅諸島の土器

組み合わせて描き、平坦な突帯を胴部に巡らすこともある（37・39）。脚部は上げ底状になるが、底部の製作技法が大きく変わり、底面を底上げした円錐状の粘土塊の側面に胴部を積み上げていることが分かる（40～42）。また、この脚部の粘土塊側面には、深い沈線文や刺突文を施することで、粘土が剥がれ落ちないように接合面積を増やす工夫がなされていることもある（40・41）。上能野式出土遺跡とされる段階の遺跡の多く（種子島・横峯遺跡：中村 1977、屋久島・火之上山遺跡²⁾：倉元 1996、白浜・三垣 2003など）が、この様相を示している。

種子島・猿野中野B遺跡（新東・大久保 1995）では、三角形状肥厚口縁部はほとんど消失し、四角形状肥厚口縁部が主体の状況となる（43・44）。文様、脚部の特徴は上能野貝塚出土土器に類似する。

なお、これらの土器の施文部位は外面口縁部帶と口唇部などで、器面調整にハケメ調整がみられる。

以上のように、口縁部は、口唇部がやや拡張してゆき、粘土を貼付した断面三角形の肥厚口縁を呈するようになり（中園 1988）、断面台形・四角形の肥厚口縁と共存し、やがて三角形肥厚が消失し、四角形状肥厚のみとなる。底部は低い脚台、中空脚台がやや上げ底の高い脚台へと変化する型式学的変化が想定され、本村丸田遺跡→椎ノ木遺跡→上能野貝塚→嶽野中野B遺跡の各段階の序列になると想定される（新里 2009-2012）³⁾。しかしながら、現在でもこれらの土器群の開始期と終焉は明らかになっておらず、遺跡ごとの様相の違いで土器の状況が序列されているに過ぎない。弥生時代後期後半～終末期に「鳥ノ峯式土器」が位置づけられるので、本村丸田遺跡段階は古墳時代の前期頃と一部重なる可能性が高いが、その後の並行関係は不明である⁴⁾。また、終焉の段階については、律令機関である「多撫嶋」の成立（702年）以前の6世紀代まで上能野式が継続すると想定するもの（中園 1988）、大隅諸島においては、煮沸具である土師器甕が9世紀後半から確認されるので、上能野式も9世紀代まで継続している可能性があるとするもの（新里 1999、本田 2004）などがあったが、近年、種子島・太田遺跡（沖田 2004）において8世紀後半段階の土師器が認められるので、そこから古代律令期の土器組成へ移行すると想定するもの（石堂 2014）、また、大隅半島志布志湾岸の遺跡との比較から、上能野式を肥厚口縁部の製作技法の觀点から、6世紀末～7世紀前葉とする見解（川口 2015）などが提示されるようになり、文献資料と考古資料の年代観が調和しつつある。

2 奄美諸島の土器（図3）

現在、奄美諸島の古墳時代並行期の土器として型式設定されているのは、沖永良部島・スセン當貝塚出土土器を標式とする「スセン當式土器」である。器種は甕または鉢で、やや外反する口縁で、口縁部外面に三角形状や平坦な突帶を貼りつけ、底部は脚台であるとされている。南九州成川式と奄美諸島兼久式土器の特徴を有していると指摘される（上村・本田 1984）。その後、スセン當貝塚出土土器は再検討され、甕にも沈線文が一定量あり、少量ながら、壺や皿（浅鉢？）などの器種も伴うことが判明した（新里 2000）。スセン當式土器も、奄美諸島の弥生並行期の「沈線文脚台系土器」の系譜で捉えられ、南九州の成川式土器そのものではなく、大隅諸島の上能野式土器とも異なる特徴を持っている。

スセン當式土器は、甕の特徴として、口縁部と胴部の境界を屈曲させるものが多く、口唇部を平坦に整形する

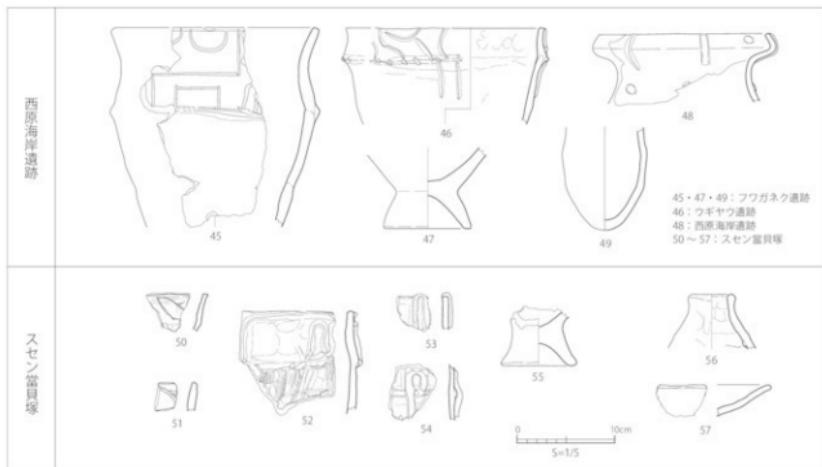


図3 古墳時代並行期の奄美諸島の土器



図4 奄美諸島センダン式前後の土器

(45・46・50・52)。口縁部帯に断面三角形のミミズ腫れ状の突帯を配置するものが目立ち(46・52)、沈線文を有するものも一定量ある(45・50・51)。中空脚台を有する(47・55)のが特徴である。

現段階では、以下のように二段階に区分することが可能であると考えられる。

沖永良部島・西原海岸遺跡(北野・森2011)出土の壺のミミズ腫れ状突帯を有する資料は、断面が三角形状のもので、袋状口縁壺を伴っており、この壺もまた、九州の袋状口縁壺にはないような円形浮文や平坦な突帯を貼りつけている(48)。フワガネク遺跡(高梨2003)においては、沈線文を主体とした同土器群中に、ミミズ腫れ状突帯を有する甕が出土しているため、この段階になると考えられる。

沖永良部島・センダン當貝塚(上村・本田1984、新里2000・2013、新里・北野2014)では、ミミズ腫れ状突帯のほか、平坦な突帯もあり(53・54)、ナデ肩の沖縄諸島の貝塚時代後期の壺に類似したものを作っている(56)。そのほかにも皿あるいは浅鉢と思われる器種もある(57)。センダン式土器の年代観は良く分かっておらず、5世紀代とするもの(上村・本田1984)、沖縄ナガラ原東貝塚の類似土器出土層(IV・V層)の放射性炭素年代を援用し、センダン當貝塚段階を5~6世紀なかばの可能性があるとするもの(新里2013)などがある。また、センダン式土器に後続する奄美諸島のくびれ平底系「兼久式土器」が6世紀代から出現するとする研究も多数あり(例えば高梨2005)、古墳時代並行期の最終段階は、奄美諸島沈線文脚台系とくびれ平底系の転換期に相当するものと考えられる。

また、資料数としてはかなり少ないものの、型式学的にセンダン式土器の前後に位置づけられる資料も確認されている。ミミズ腫れ状突帯と浅い沈線文、平坦な突帯の組合せでは、センダン式土器の特徴に類似するが、口縁部が屈曲せず直線状に開き、口縁部内外面に施文するという、前段階の弥生時代並行期の特徴をもつ甕(奄美大島・万屋泉川遺跡[中山1983]:図4-58)や、センダン式土器段階の中空脚内部に半球状の粘土塊を詰めて中実脚台とし、時期的に後続するくびれ平底土器様式「兼久式土器」甕の特徴である木葉痕を有する資料である(徳之島・天城遺跡[新里・北野2014]:図4-59)。

ちなみに、大隅諸島と奄美諸島間に位置するトカラ列島では、古墳時代並行期の土器は未発見であるが、図1で見られるように、およそ200~250km圏内で類型化される土器様式が分布している南西諸島の特性からして、トカラ列島もまた、将来的にはトカラ列島をほぼ覆うような土器文化が展開していくてもおかしくはない。将来の調査成果が期待される地域である。

3 土器の動き

近年の研究では、南九州の弥生時代後期~古墳時代の土器が、大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島でも散発的に確認されており、弥生時代前半期と比べると極めて低調となった南九州系土器の南西諸島への搬入の動きが、少ないながらも存在することが分かってきている(中村2013)。それに対して奄美諸島のセンダン式土器は、これまでに沖縄諸島で確認されており、同諸島の無文尖底系土器主体のなかで、それを模倣したような土器も比較的目立つ(図5)。奄美諸島では無文尖底系土器が確認されることもあり(奄美大島・屋鈍遺跡[西園2009]、沖永良部島・西原海岸遺跡[北野・森2013]など)、奄美諸島と沖縄諸島間では、少ないながらも土器の双方向的な動きと受容が認められることになる。いっぽうで、上能野式土器は大隅諸島の様式圈を越えた動きはほとんどみられず、極めて在地的な動きとして想定される。このことから、南西諸島においては、九州から長距離移動する成



図5 沖縄諸島出土のスセン當式土器

川式土器、島嶼部間を中距離移動するスセン當式土器および大当原式土器、島嶼部内で短距離移動する上能野式土器という、各様式の移動の特性が抽出できる。

4 土器様式圏の背景

南海産貝交易（木下 1996）は、主要な消費地である日本列島と、南海産大型貝（オオツタノハ・イモガイ・ゴホウラ）の供給地である南島を結ぶ遠隔地交易である。弥生時代初期から開始され、弥生時代後期に一時的に低調となるが、古墳時代中期以降、再び盛る（中村 2007）。また、この時期は大隅諸島広田遺跡が最大の南海産大型貝の消費地となっていることが知られる（木下 2003）。南海産大型貝のうち、ゴホウラ・イモガイの主要な供給地は沖縄諸島であるが、これは無文尖底系土器群の分布範囲に合致しており、また、オオツタノハの主要な供給地と考えられる種子島近海やトカラ列島、奄美諸島⁵⁾は、肥厚口縁・沈線文脚台系土器群の分布範囲と概ね合致している（図1）。このことから、貝交易と在地土器様式が無関係であるとは考えにくく、古墳時代における南海産貝交易の核（最大消費地・対日本列島の窓口）としての大隅諸島、オオツタノハ供給地であり、交易の仲介者集団としての奄美諸島、ゴホウラ・イモガイ供給地としての沖縄諸島というように、貝交易に関わる島嶼地域の、最もローカルな領域が土器様式圏としてあらわれ、各島嶼部の交易集団の往来のなかで、土器が搬入され、あるいは土器情報も伝達されたものと考えることができる。

おわりに

南西諸島の土器様式構造は、安定した主要器種が壺（深鉢）に限定されている点や、食器組成や祭祀行為に須恵器・土師器を導入しない構造という点において、日本列島とは明確に区別される島嶼型の土器様式である。このことは古墳時代の核となる地域から遠隔地にあることもさることながら、既に農耕社会に移行していた日本列島とは異なり、亜熱帯サンゴ礁資源を経済基盤とする狩猟採集社会で、伝統的に育まれてきた文化を基層にもつということが大きい。またこの文化は、豊かなサンゴ礁資源を有するがゆえに、日本列島との関わりを持ってきたといえるのである。

註

- 1) 先島諸島の無土器期は、約 2000 年前～800 年前まで断続的に空白期を有しながら存続すると考えられており、ここでは放射性炭素年代で弥生時代～古墳時代頃の並行年代が出ていている西表島・船浦貝塚の遺物（Pearson 1981）を便宜的に掲げた。
- 2) 屋久島・火之上山遺跡は、同表記が正確なものであるとされている（白浜・三垣 2003）。本稿でもこれに統一する。
- 3) 2015 年 5 月 16 日の奄美考古学会種子島大会会場で最初の質問等があったが、筆者の古墳時代並行期に関する南西諸島内の土器の並行関係図が混乱を与えていたらしい。筆者は 2009 年論考の表1の通りであると考えており、表中の大隅諸島とトカラ・奄美諸島列間が離れているのは、基本的に両地域の交差年代をとることができないことを示している。2009 年論考の図2、2012 年論考の図2は、頁数の都合上、各地域の土器の形態の差を表すことを目的としたものであり、図間の境界の横線が並行関係を表しているものではない。混乱させていることをお詫びし、ここに明示しておきたい。
- 4) 石堂和博は、筆者のいう本村丸田遺跡段階を広田式（新）、椎木本遺跡段階を上能野式（古）、上能野貝塚段階を上能野式（中）、嶽野中野B 遺跡段階を上能野式（新）とする（石堂 2015）。「肥厚口縁脚台系」である上能野式を古・中・新の三段階に区分する見解には賛同できるが、各段階の指標として挙げた土器には筆者と相違する点もある。
- 5) 従来、現生貝の生息域調査で種子島近海やトカラ列島がオオツタノハの供給地として想定されてきたが、近年、オオツタノハが奄美大島近海でも捕獲されることが分かってきた（忍澤 2013）。古墳時代における同貝生息域の議論は別にしても、奄美諸島の先史時代遺跡から出土する数が少なくないことからは、考慮すべき見解であると思われる。

引用・参考文献

- 安里嗣淳・名嘉真武夫 1979 「伊江島ナガラ原西貝塚」伊江村教育委員会
- 新垣孫一・川平朝申・国分直一 1957 「久高島シマシヤーマ貝塚の調査概報」「文化財要覧」1957年度版 琉球政府文化財保護委員会 55-72頁
- 石堂和博はか 2007 「広田遺跡」南種子町教育委員会
- 石堂和博 2014 「大隅諸島の先史文化にみられる生産の特徴と変遷」高宮広土・新里貴之編「琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷」六一書房 159-170頁
- 石堂和博 2015 「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流：古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に」平成27年度第6回奄美考古学会（種子島大会）研究発表会資料
- 沖田純一郎 2004 「武器製鉄所跡・奥ノ仁田遺跡・赤尾木城址・太田遺跡」西之表市教育委員会
- 忍澤成祝 2013 「奄美大島におけるオオツナノハ製貝輪：現生貝調査からみた素材採取地と採取法」『日本考古学学会第79回（2013年度）総会研究発表会要旨集』日本考古学協会 36-37頁
- 上村俊雄・本田道輝 1984 「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」「南西諸島の先史時代に於ける考古学の基礎研究」科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書 鹿児島大学法文学部考古学研究室 12-22頁
- 河口直健 1973 「上野貝塚発掘概報」「鹿児島考古」第7号 鹿児島県考古学会 59-68頁
- 川口雅之 2015 「古墳時代後期～奈良時代における大隅半島と大隅諸島の土器」平成27年度第6回奄美考古学会（種子島大会）研究発表会資料
- 岸本利枝はか 2005 「大堂原貝塚」名護市教育委員会
- 北野勘重郎・森幸一郎 2011 「和泊町西原海岸遺跡の調査概要」「奄美考古」第6号 奄美考古学会 59-68頁
- 北野勘重郎・森幸一郎 2013 「西原海岸遺跡」和泊町教育委員会
- 木下尚子 1996 「南島貝文化の研究：貝の道の考古学」法政大学出版局
- 木下尚子 2003 「貝製装身具からみた広田遺跡」「広田遺跡」広田遺跡学術調査研究会・黎明館 329-366頁
- 金武正紀はか 1980 「宇堅貝塚・アカジャンガ貝塚」具志川市教育委員会
- 倉元良文 1996 「火ノ上山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財センター
- 桑原久男はか 2003 「広田遺跡」広田遺跡学術調査研究会・黎明館
- 里山友廣 1988 「市理原」龍郷町教育委員会
- 島袋洋はか 1996 「平敷屋トゥバル遺跡」沖縄県教育委員会
- 白濱秀記・三垣恵一 2003 「火之上山遺跡」上屋久町教育委員会
- 新里貴之 1999 「南西諸島における弥生時代並行期の土器」「人類史研究」第11号 人類史研究会 75-106頁
- 新里貴之 2000 「スセン當式土器」高宮廣樹先生古稀記念論集刊行会編「東アジアの人と文化」上 尚生堂 153-173頁
- 新里貴之 2004 「沖縄諸島の土器」「考古資料大観12 貝塚後期文化」小学校 203-212頁
- 新里貴之 2008 「琉球縄文土器後期」小林達夫編「絶対縄文土器」絶対縄文土器刊行委員会 823-829頁
- 新里貴之 2009 「貝塚後期文化と弥生文化」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編「弥生時代の考古学1：弥生文化の輪郭」同成社 148-164頁
- 新里貴之 2012 「貝塚時代後期文化と古墳文化」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編「古墳時代の考古学7：内外の交流と時代の潮流」同成社 146-158頁
- 新里貴之 2013 「ナガラ原東貝塚出土のスセン當式類似土器について」木下尚子編「ナガラ原東貝塚の研究」熊本大学文学部 238-248頁
- 新里貴之・北野勘重郎 2014 「奄美諸島・貝塚時代後期1期の土器文化」新里貴之・高宮広土編「琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化」六一書房 145-156頁
- 新東見一・大久保浩二 1995 「嶽野中野B遺跡」西之表市教育委員会
- 高梨修 2003 「小浜フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書」名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005 「ヤコウガイの考古学」同成社
- 中園聰 1988 「土器様式の動態：古墳の南限付近を対象として」「人類史研究」第7号 人類史研究会 31-69頁
- 中村耕治 1977 「横峯遺跡の調査」「指辻・横峯・中之峯・上焼田遺跡」鹿児島県教育委員会 14-17・26-27頁
- 中村恩はか 1980 「馬毛島埋葬址：鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡」西之表市教育委員会
- 中村友昭 2007 「古墳時代の文化交流」「考古学ジャーナル」No.564 ニューサイエンス社 21-25頁
- 中村直子 2013 「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」木下尚子編「ナガラ原東貝塚の研究」熊本大学文学部 259-268頁
- 中山清美 1983 「兼久式土器」[1]「南島考古」第8号 沖縄考古学会 50-51頁

西園勝彦 2009 「屋純道跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター

橋口達也ほか 1996 「鳥ノ峯道跡」中種子町教育委員会・鳥ノ峯道跡発掘調査団

橋口尚武 1990 「種子島の考古学研究：その基礎資料（1）」乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会編『九州上代文化論集』139-168 頁

本田道輝 2004 「大隅諸島の土器雑感」平成15年度地域貢献特別支援事業報告書：文化島嶼圏社会の自立化促進』鹿児島大学

27-28頁

盛本歎ほか 1989 「清水貝塚」具志川村教育委員会

盛園尚孝・酒匂義明 1986 「本村丸田道跡」南種子町教育委員会

Pearson, Richard. 1981. *Subsistence and Settlement in Okinawa Prehistory: Kume and Iriomote*. University of British Columbia, Canada.

図版出典

図1 1 (桑原ほか2003)、2 (新東・大久保1995)、3 (中村ほか1980)、4 (橋口1990)、5 (高梨2003)、6 (新里原図)、7・10・11 (新里原図)、8・9 (北野・森2011)、12・13 (安里・名嘉真1979)、14 (盛本ほか1989)、15 (新里原図)、16 (金武ほか1980)、17 (新垣ほか1957)、18 (鳥袋ほか1996)、19～23 (Pearson 1981)

図2 24・26～30 (新里原図)、25 (橋口ほか1996)、31 (桑原ほか2003)、32～36 (中村ほか1980)、37・38・41・42 (橋口1990)、39 (白濱・三垣2003)、40 (倉元1996)、43・44 (新東・大久保1995)

図3 45・47・49 (高梨2003)、46 (新里原図)、48 (北野・森2011)、50～57 (新里原図)

図4 58 (中山1983)、59 (新里原図)

図5 60 (岸本ほか2005)

左から
種子島 輪之尾遺跡

なかたちょう
中種子町

あきのえらぶじま
沖永良部島

すせんどう
スセン當貝塚

ちかちょう
知名町



成川式土器の北のひろがり

甲斐康大

はじめに

異なる場所に住んでいた人々が、「同じ土器を使っていた」、「似ている土器をもっていた」といった場合、そこには何かしらの意味があるといえる。よって考古学では、特定の土器のひろがりを確かめることで、その土器を使っていた人々のつながりや、地域間の交流について考える試みがなされている。

成川式土器に関する従来の研究では、主に薩摩・大隅半島が対象地域とされてきた。しかしながら、類似した特徴をもつ土器がその周辺地域にもひろがっている。ここで、あらためて薩摩・大隅半島にひろがる成川式土器の特徴をまとめると、以下のとおりである。

① 壺は、底部に脚台があり、口縁部が大きく開く。また、口縁部付近に刻目突帯がめぐる。

② 壺は、胴部に突帯をもつ大型壺が作り続けられる。とくに6

世紀以降は幅広突帯となり、装飾性が増す。

③ 食膳具は、置き食器である高杯が多く、手持ち食器である杯が相対的に少ない。また、5世紀の中ごろから、高杯や杯、小型壺が赤い顔料によって彩色される。

こうした特徴をもつ薩摩・大隅の成川式土器に対し、周辺地域ではどのような土器が使用されていたのか。本稿では、薩摩・大隅半島に隣接するえびの盆地、都城盆地周辺地域の土器がどのような特徴をもち、成川式土器の特徴とどのような類似点や相違点があるのかを整理し、成川式土器の北のひろがりについて考えたい。

1 えびの盆地周辺の土器

盆地の中央部に位置する草刈田遺跡では3世紀半ば、古墳時代初期頃の土器が数多く出土している。壺が出土土器の大半を占め、少量の小型壺などが含まれるが、いずれも同時期の成川式土器そのものである。ただし、1つだけ異なるのは、壺が脚台をもたず、平底あるいは上げ底とする点である。5世紀代の集落遺跡である内小野遺跡でも壺は平底や上げ底で、3世紀以降変化はみられない。

天神免遺跡は弥生時代後期から連綿と営まれた集落・墳墓遺跡で、とくに6世紀代の土器資料が豊富である。壺は、口縁部から胴部の形状や刻目突帯をもつ点で薩摩・大隅の成川式土

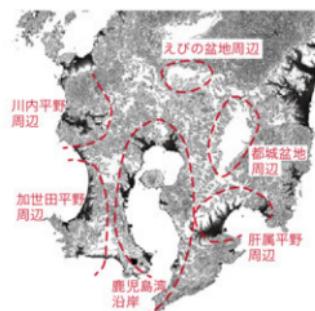


図1 地域区分

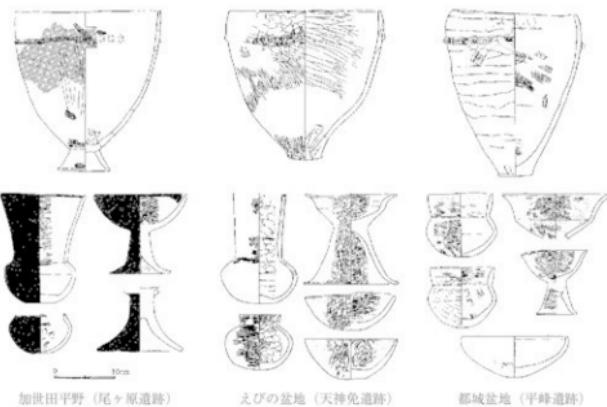


図2 6世紀の各地域の壺と食膳具



図3 沈線・刻目のみによる施文（天神免遺跡）



図4 多条突帯風の施文（天神免遺跡）



都城盆地

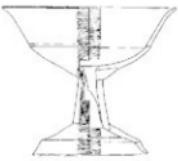


図5 脚部に段を有する高杯と深鉢

の南端に位置する。ここで出土した壺をみると、形態的な特徴はえびの盆地と酷似している。しかし、外側の仕上げとなる器面調整を行わないため、粘土紐を積み上げた際の接合痕跡が外側に幾重にも残っている（図2：右列上）。宮崎平野部にも外側の粘土紐接合痕を残す壺が存在するが、盛行するのは7世紀であるため単純に関連付けることはできない。食膳具には赤彩される土器もあるものの、赤彩されない土器の方が多い。杯は薩摩・大隅地域に比べて普及しており、えびの盆地周辺地域と同じ様相である。

都城盆地周辺地域における赤彩された土器の中にも、地域間のつながりを示すものがある。図5にある脚部が段をもつ高杯と深めの鉢は、肝属平野周辺と都城盆地に集中することから、両地域の間には陸路による頻繁な交流があったものと考えられる。また、高杯については宮崎平野でも出土していることから、日向灘や大淀川を介した交流が想定できる。

おわりに

えびの盆地周辺や都城盆地周辺にひろがる土器は、細部において違いはあるが、壺の外見的特徴や食膳具の赤彩化など、3世紀～6世紀までおおむね薩摩・大隅地域の成川式土器と歩調を合わせながら変化を遂げている。

よって、両地域の土器は広い意味での成川式土器に含めることができ、両盆地が成川式土器様式圏の周縁地域であるとあらためて捉えなおすことができた。周縁地域ゆえの他地域とのつながりやすさ、あるいは盆地特有の陸路の要衝としての活発な地域間交流があったであろうにもかかわらず、成川式土器のような独自性の強い土器を作り続けたことには一体どのような理由があったのであろうか、今後の課題としたい。

図版引用・写真出典

図2：宮崎県埋蔵文化財センター 2012「平峰遺跡(1・2次調査)」・えびの市教育委員会 2010「北岡松地区遺跡群」・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『尾ヶ原遺跡』より引用

図3：橋本撮影 図4：えびの市教育委員会 2010「北岡松地区遺跡群」より転載

図5：宮崎県埋蔵文化財センター 2012「平峰遺跡(3次調査)」・串良町教育委員会 1986「岡崎4号墳・1号地下式横穴」・鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996「東田遺跡」より引用

器と共通する（図2：中列）。一方で、底部形態はやはり平底である。

食膳具をみると、赤彩された土器が主体を占め、一部の壺などは薩摩・大隅と形態がよく似ている。脚部が太く発達した高杯はえびの地域独自の型式である。また、杯が食膳具の中で一定の割合を占めている点も薩摩・大隅とは異なるといえよう。

えびの地域の土器には、壺・壺の刻目突帯を表現するために特徴的な手法が認められる。1つは沈線や刻みのみで刻目突帯風に表現する手法（図3）である。もう1つは数条の刻目突帯を表現する際に、幅の広い突帯を張り付け、それを横方向の沈線で区画してから刻みを施す手法（図4）である。この技法は、川内平野周辺や加世田平野周辺地域で認められることから、地域間の交流を示す事象として注目できる。

2 都城盆地周辺の土器

都城盆地では、5世紀以前の良好な土器資料が少ないが、えびの盆地と同様に壺には脚台がなく、平底や上げ底であることから破片資料から読み取れる。

5～6世紀の集落遺跡である平峰遺跡は、都城盆地

の南端に位置する。ここで出土した壺をみると、形態的な特徴はえびの盆地と酷似している。しかし、外側の仕上げとなる器面調整を行わないため、粘土紐を積み上げた際の接合痕跡が外側に幾重にも残っている（図2：右列上）。宮崎平野部にも外側の粘土紐接合痕を残す壺が存在するが、盛行るのは7世紀であるため単純に関連付けることはできない。食膳具には赤彩される土器もあるものの、赤彩されない土器の方が多い。杯は薩摩・大隅地域に比べて普及しており、えびの盆地周辺地域と同じ様相である。

都城盆地周辺地域における赤彩された土器の中にも、地域間のつながりを示すものがある。図5にある脚部が段をもつ高杯と深めの鉢は、肝属平野周辺と都城盆地に集中することから、両地域の間には陸路による頻繁な交流があったものと考えられる。また、高杯については宮崎平野でも出土していることから、日向灘や大淀川を介した交流が想定できる。

てんけんめい
天神免遺跡

えびの市



古墳時代前期



古墳時代中期



古墳時代後期

鹿児島・宮崎・熊本三県境の盆地、宮崎県えびの市にある大規模集落遺跡である。古墳時代の全時期とおして、住居跡が確認できるが、とくに後期後葉段階の資料が多い。

基本的には成川式土器として理解できるものが主体であるが、その中にもえびのの小地域性、宮崎平野からの影響などがみられる。

天神免遺跡

えびの市



えびの市教育委員会蔵



やってきた土器・出て行った成川式土器

橋本達也

成川式土器の強い個性が生み出された背景には、他地域の土器との情報接觸の少なさが一因にあると考えられる。とはいっても九州南部にも古墳時代土器としての土師器や須恵器は持ち込まれているし、また多くはないが、成川式土器もこの土器の本来の分布圏外で発見されている。その概要をつかんでおこう。

九州南部にもたらされた古墳時代土器の様相

古墳時代前期に遠方からもたらされた土器としては、庄内系・布留系の甕がある（甲斐 2013）。またその模倣品もつくられている（図 4）。薩摩半島では、南さつま市金峰町芝原遺跡（図 1）、同市坊津町の清水前遺跡（図 2）・大隅半島では大隅町沢目遺跡（図 3）・肝付町東田遺跡など、それぞれ九州の西周り・東回りの港湾に近接するような遺跡での出土が特徴である。これらの土器の生産地や影響を与えたのは、西周りでは熊本や北部九州、東周りでは豊前・豊後などが候補となろう。

また、霧島市国分の城山山頂遺跡では二重口縁壺、甕、小型丸底壺や小型器台などがまとめて出土している。遺跡名称のとおり山頂にあり、特異な性格をもつていて、陸路を介した熊本地域との関係らしい。

なかでも、南薩の西海岸海路の拠点と考えられる芝原遺跡では、庄内系や布留系の甕など外来系の土器が数多く出土しており、他の遺跡では少数の土器が点的に入る様子とは大きく異なる（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013）。小型微製鏡 3 点、破鏡 2 点や、弧帯文状の線刻紋様のある小型丸底壺（図 5 左）広域分布する鍋蓋文土器（常松 2002）に属する小型鉢など（図 5 右）、古墳時代前期に活況を呈していたことがうかがえる。

なお、ごくわずかに南島からの搬入土器も清水前遺跡などで出土している。

古墳時代中期以降、運ばれてきた土師器は良くわからない。とはいって、土師器の影響を受けて作られた成川式土器は散見される。とくに、薩摩半島西部では古墳時代中期後半以降、台付甕とともに丸底甕も一定量出土するようになり、大隅では宮崎平野地域の影響を受けた土器などもみられる。

それに対して、古墳時代中期以降普及する須恵器は、九州南部では窯跡が確認



図 1 芝原遺跡の庄内系・布留系甕



図 2 清水前遺跡の布留系甕



図 3 沢目遺跡の布留系甕



図 4 鹿児島大学構内遺跡出土の土師器模倣成川式土器



図 5 芝原遺跡の線刻文様のある土器



図6 鹿児島大学構内遺跡出土の
朝鮮半島西南部産陶質土器

されておらず、また出土資料の様相から消費地としてのみ受容したと考えられるので、明らかに遠方からもち込まれたものである。古墳墓での初期須恵器の出土が目立つが、集落遺跡でも少数は出土している。

それらは、大阪府陶邑窯跡群、愛媛県市場南組窯跡群、これら以外の生産地、という3~4以上の窯場からもたらされている。また特異な事例として、鹿児島大学構内遺跡では、5世紀後葉の朝鮮半島西南部、栄山江流域産の陶質土器も見つかっている(図6)。ただ、総じて成川式土器の分布圏では須恵器が他地域と比べて少なく、古墳時代後期になっても主要な生活土器として採用されない。その辺が、また独特の土器様式を生み出す背景にもなっているのであろう。

九州南部から旅に出た成川式土器

現在、成川式土器は、東は大阪平野、南は沖縄本島・伊江島まで確認されている。これら運ばれた土器は、九州南部の人びとの移動を物語る資料である(池畠2008・梅木2003・中村2013)。

福岡市比恵遺跡第91次調査では中津野式の壺が古墳時代前期初頭の住居跡の可能性ある遺構から、また岡山市中瀬川遺跡では古墳時代前期中葉の東原式の壺が溝から出土している。古墳時代中期前葉には熊本市熊本大学構内遺跡で東原式の壺が溝から、中期後葉には大阪府八尾市久宝寺遺跡で壺と高杯などが九州南部の人が営んだとみられる堅穴住居から出土している。佐賀県鳥栖市東山2号墳では古墳時代後期後葉の古墳周溝内に埋設されて筒貫式の壺が出土している。大阪府八尾市五反島遺跡では、時期の決め手に欠くが古墳時代中~後期の遺物を含む地層から筒貫式の壺が出土している¹⁾。

けっして多くはないが、これまであまり認知されていなかったこともあり、成川式土器の分布圏外で出土した場合、ちょっと変わった弥生土器の混入などとして認識されていない場合もあると思われる。台付壺など破損しやすく、土師器にみえないものはなおさらである。今後の確認を期待したい。

なお、久宝寺遺跡では土器の移動に留まらないその場での生活がうかがえる。これに関しては、古代に移配された畿内隼人の居住地、賛振と近いこともあるが、5世紀の隼人を示すものと取り上げられたりもしているが(東2007)、隼人はあくまでも天武朝以降、律令体制の整備を目指した政治が生み出した「民族」であって、古墳時代にさかのぼる民族や文化ではない。そもそも古墳時代中期、久宝寺遺跡やその周辺は渡来人を含む多様な人びとの活動した地であり、成川式土器にのみ異民族支配と結びつく隼人を重ねることは適切でない。

成川式土器は南にも動いている。種子島・奄美大島・沖縄本島・伊江島で確認されている(図8)。貝交易を含む南島社会との交流の一端が示されているのであろう。とくに、種子島広田遺跡では在地墓制の覆石墓に在地産土器とともに中津野式土器が供獻されていた。南島ではいまのところ土師器が知られておらず、交易の交渉相手の古墳時代人は成川式土器を用いる九州南部の人びとであったのだろう。

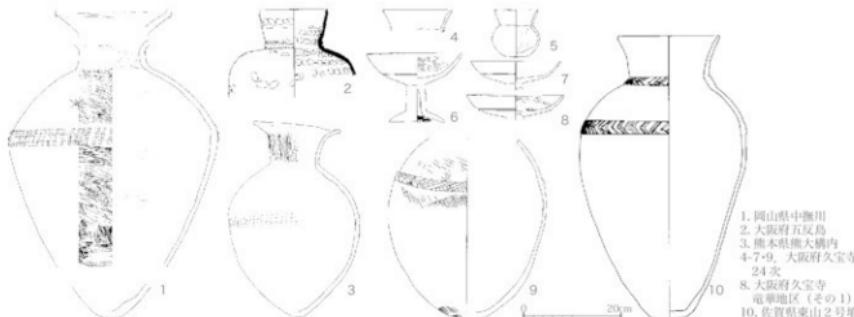


図7 九州南部から運ばれた成川式土器

註

- 1) このほかに成川式土器の可能性が指摘されたものに、岡山県王泊遺跡出土壺片（池畠 1980）、奈良県纏向遺道の壺片がある（石野 1986）、これは豊後、東九州の可能性がある（梅木 2003・坪根 2003）。

引用文献

池畠耕一 1980 「岡山県王泊遺跡出土の成川式土器」

『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会

池畠耕一 2003 「鹿児島から岡山へ、岡山から鹿

児島へ—考古資料からみた交流—」『岡山理科

大学埋蔵文化財研究論集』同論集刊行会

石野博信 1986 「纏向遺跡採集の「南九州」系土器」

『青陵』第59号 奈良県立橿原考古学研究所

梅木謙一 2003 「近畿の西部瀬戸内系土器—複合口

縁壺を中心に—」『初期古墳と大和の考古学』

学生社

甲斐康大 2013 「九州南部における古墳時代前期の

地域間交流」『古墳時代の地域間交流 1』第16

回九州前方後円墳研究会熊本大会実行委員会

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013 「芝原遺跡 4」

弥生時代・古墳時代編

常松幹雄 2003 「九州地方の土器」「考古資料大観

第2巻土器Ⅱ 小学館

坪根伸也 2003 「南九州における土器と集落」「前

方後円墳基造周縁域における古墳時代社会の多

様性」第6回九州前方後円墳研究会大会事務局

中村直子 2013 「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置付け」「ナガラ原東貝塚の研究」熊本大学文学部木下研究室

東 徹志 2007 「畿内からみた南九州」「日向・薩摩・大隅の原像—南九州の弥生文化—」大阪府立弥生文化博物館

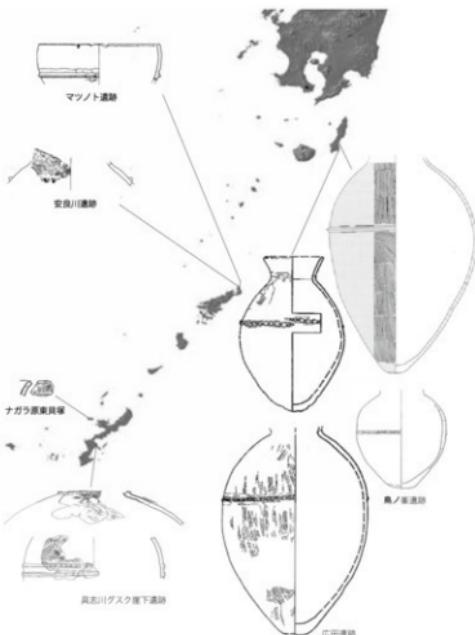


図8 琉球列島出土の成川式土器（中村 2013 改変）

九島がしま ひろた
種子島 広田遺跡 北区2号墓

みなみかねちょう
南種子町

土壙墓、覆石墓群
から特徴的な貝製副
葬品が大量に出土し
たことで著名な遺跡
である。北区2号墓
では、在地土器とと
ても中津野式土器が
供獻されていた。



南種子町教育委員会蔵・写真提供



4. どうやってつくった？—成川式土器をつくる—



土と砂—成川式土器を作る素材—

篠藤マリア

土と砂

職人には道具と素材が一番気になる物であろう。筆者にとっては、職人であった祖父達の影響が大きい。一人は大工であり、「良い道具は仕事の半分」と言って、道具も重視したが、素材に関しては特別であった。散歩していたとき道端に立派な木を見たら、どこそこの部分は、いつか、どういうふうに良い物に加工できるかというように、樹木に対しての愛情を込めた話をしてくれた。また、美しい家具を見ると、どの樹木か、森の中や広い平野のどこの場所で育てられたかななど、元々の樹木の、四季にわたる姿が想い浮かぶようになっていた。

こういう影響を受けて、大学生になって土器研究を始めた時、土器の素材を見逃してはいけないと筆者は思った。考古学者が土器を記録する時に、細い黒い線で外形を書くが、土器という物はその細い線の間の白い空白にある物質であることは忘れてはいけないと思う。

土器を作るにあたって、職人が素材を自然の中に探し、採掘し、運び、仕上げ、混ぜたりしたことは、成川式土器の破片を見ればよく想像できる。

土器作りに関する研究と成川式土器

土器作りを追求する研究は古くから世界中に多くあり、一番有名なのはおそらく、アメリカのシェパード氏の1950年代の研究である（Shepard 1956）。考古学においては民族学者の研究成果もよく利用するが、日本で土器作りの研究を進めた佐原眞氏が、アフリカの土器作りについての民族学的研究の本をかつて筆者に薦めた（Dorst 1966）。これら両方の本はここで紹介する研究に影響を与えた。他にも多くの研究成果があげられるが、成川式土器の素材に関する結果だけをここでは要約し、紹介しよう。

素材

土器は（1）粘土と（2）混和材から成り、その組み合わせを胎土といいます。

（1）粘土は簡単に言えば土であるが、器の形成に充分な「可塑性」があるかどうか、高い温度の焼成に充分な「耐火性」があるかどうかは、この土の質が決める。良質な粘土を探掘できる場所が少なく、あまりにも手に入りにくい場合、職人は少し質の悪い土でも土器を作ることができる。この場合は、耐火性が良くなければ、低い温度で焼くか、可塑性が良くなければ、適切な混和材を加える。

（2）混和材は器の形を支える骨組みにたとえることができる。そのため土の見えないほどの微細な粒子より大きい粒子をもつ混和材を選ぶ。混和材はさまざまな素材からできるが、成川式土器は、弥生時代や古墳時代の他の軟式土器（低い温度で柔らかく焼成した土器）と同じように、砂を使ったと思われている。混和材は良質な粘土にも加える場合が普通で、質の良くない場合は、混和材を増やす。粘土は筋肉にたとえれば、筋肉が充分自立できるほどの力がないときは、骨組を強くしなければならない。成川式土器の場合は、混和材が大変目立つので、よく「粗い」と言われるが、職人が質の良くない粘土を上手に生かした証拠ともいえる。しかし、後で述べるように、成川式土器は「粗い」だけではなく、様々な仕上げがあった。

粘土と混和材からなる胎土の様子は、焼成前、焼成後、使用中、埋蔵中に様々な影響を受けながら、考古学者が発掘する破片として現れる。この破片を見ながら、現在の胎土の様子を記述し、元々の材料についていくつかの推測ができる。

焼成

焼成の様々な条件は、土器の材質に大きく影響を及ぼす。野焼きでは、窯がなく、割と低い温度で空気が通るような、酸化焰の焼成方法がある。成川式土器の柔らかい破片は、低い温度と短い焼成時間を示し、その赤味のある褐色は酸化焰であることを語る。言い換えれば、成川式土器の破片を見れば、この土器群は野焼きの典型例といえる。野焼きには様々な形がある（e.g. 窯跡研究会 1997 参照）が、ここでは素材を中心に述べるので、この焼成方法の素材への影響だけを紹介しよう。

つまり、低い温度で短時間だけで焼成すれば、胎土の在り方は極端に変化はしないことが興味深い。「胎土の在り方」には、肉眼でわかるような外形もある。すなわち、混和材と土の元々の形に近い外形が残る場合が多い。また、科学的方法で分析しても、元々の素材の鉱物や化学組成（元素の割合）が極端には変わらない。成川式土器の破片を見れば、それぞれの遺跡に隣接する山の土壤と非常に類似した粘土、川や海辺にある砂に似た混和材があるのが、すぐに分かる。

焼成実験（Shinoto 2008, pp. 358, 360）では、成川式土器の破片を再焼成して、元々の最高焼成温度を追求した。そこで、検討した破片によれば、焼成温度は 600°C にも及ばなかった可能性が確認できたので、成川式土器の素材と、我々が実際に観察できる破片の在り方の類似性についての考えが裏づけられた。

焼成以外の使用中、埋没中などの段階の影響については、ここでは省略する。

破片の胎土分類

以上のことを考えれば、破片を見て、とくに成川式土器の素材については根拠のある推測が可能だと言えよう。しかし、それぞれの破片を別々に観察・記述するより、胎土をいくつかのグループに分けて、それぞれのグループの作り方を推測した方が合理的であると考えられる。

さて、1980 年代にエジプト考古学の研究者が数年にわたって、エジプト古代の破片をルーベで観察し、破片の色、通気性、精密度、混和材などを記述した。これらのデータを基に 20 以上のグループに分類し、それぞれのグループの例を写真として公開した（Arnold & Bourriau 1993）。この分野においては、土器を記述するとき、必ずその胎土グループも提示しないといけない。これによって、生産技術も推測できる。

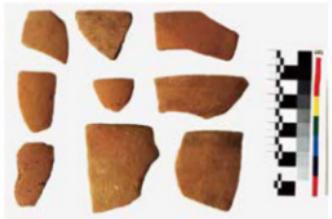
筆者は成川式土器に関して 20 種類には及ばなくとも、生産技術を理解する分類を見つけようとした。以下に述べるように、結局 4 つのグループに分けることができ、その素材の特色と仕上げについて、根拠のある仮説も立てることできた。

土器作りと自然科学研究

土器は土から作られるので、地質学者が土についての知識と方法を考古学的研究に提供すれば、違う観点からの解釈ができる、新しい知識が生まれる。地質学と言えば、これは様々な学問と関連するが、ここでは、主に「鉱物学」の観点から述べたい。

ヨーロッパの伝統的な学校教育において、古代ギリシャと古代ローマの歴史と言葉を重視してきたので、自然学者にも人文系の研究への憧れがあるらしい。自然学者は自分の主な研究の傍ら、考古学者と共に研究することは古くからある。筆者に影響を与えたのはとくに地中海を廻った陶芸家、考古学者、自然学者の実験を含む総合的共同研究である（Noll 1976, Winter 1959, Winter & Hampe 1962）。この伝統の上に、トルコのリダル・ホユック遺跡の研究を行い、これこそが以下説明する研究の模範である（Klenk 1987）。考古学者が遺跡で胎土の異なる上器を発掘し分類したので、その胎土を鉱物学的に検討することになった。地質学者のクレンク氏が遺跡の周辺を歩き廻って、地層を地図にし、土のサンプルを集め、土と土器の科学的分析を行った。これは主に、鉱物と元素についての分析であったが、素材・仕上げ・焼成についての興味深い結果が得られた。

成川式土器の素材を理解するのに、同じように土のサンプルを採集し、これらが素材であったかどうか、また、どういうふうに仕上げたかを、鉱物学の方法でも検討することにした（篠藤 & ホッフバウアー 2000, Hoffbauer & Shinoto 2000, Shinoto 2008 pp. 357-363）。



辻堂原遺跡の成川式土器の研究

1976年、旧吹上町、現在の日置市に所在する辻堂原遺跡で大規模な発掘が行われた（吹上教育委員会 1977）。出土した土器は成川式土器の様々な形式を比較的幅広くカバーし、初めての成川式土器編年に大きな役割を果たした（池畠 1980）。現在普遍的に使われている編年（中村 1987）もおおいに辻堂原遺跡の土器に拠っている。現在では辻堂原遺跡の土器を薩摩半島西海岸の少し古い様相の成川式土器として位置づけることができる。そのために、以下説明する結果はどこまで成川式土器全体の特色か、薩摩半島西海岸に限られる伝統か、これは今後の研究に委ねたい。

辻堂原遺跡の破片を目の前に拡げれば、その色と混和材の様々な在り方に気がつく。一方は、ある傾向があるように見え、分類できそうな様子であるが、他方は、その様子がなかなか複雑で、把握しにくい。しかし、この複雑な様子が偶然でなければ、昔の職人の知恵の現れであるはずである。

1997から1998年、筆者が辻堂原遺跡の土器を再検討し、できるだけ科学的な方法（反復可能な方法）を使って、様々な現象を観察記録した。胎土や素材については詳しく発表した（Shinoto 2008 pp. 313-363）が、ここは結果だけを述べたい。胎土グループを決める根拠は三つの柱からなる。

- (1) 遺跡全体像と胎土の観察に基づく仮説。
- (2) 素材と思われる土と砂の収集。
- (3) 仮説を検討するための素材と代表的な破片の鉱物学的分析。

成川式土器の破片ではまず最初に色に気がつく。赤い色は酸化鉄に起因するが、灰色の方は磁鉄鉄である。両方とも鉄分から成るが、酸化鉄は焼成の時によく空気が通る、酸化焰という状況で焼成した。磁鉄鉄は空気を通さないようにした還元焰の状況で焼成したが、火には空気が必要なので、窯をもった高度な技術なしで作られた軟式土器は酸化焰が普通である。たまには空気の通らない場所もできるので、軟式土器に黒い斑点が時々みられる。

辻堂原遺跡には少し赤気味の破片が見られるが、一番目立つものは橙色の物である（写真1）。破片は丁寧に仕上げ、考古学者がいう「精製粘土」に属するようである。同じように丁寧に仕上げた「精製粘土」の物もあるが、これらには橙色の層はあまり見られず、破片の色調は少し「汚い」感じの淡褐色である（写真2）。橙色の破片には同じような色の層も見られるので、両方の作り方には類似性があると思われ、酸化鉄の割合にはある程度の違いがあるだけだと思われる。両方の破片は食器や祭祀用の器種（高杯、小型丸底土器、小型鉢）に利用し、表面には赤い層が見られる。考古学ではよく「丹塗り土器」と言われるが、「丹」より、鉄分の多い粘土（化粧土）をかけたと思われる。この赤い化粧土の性質とかけ方は数多くの種類がある（Shinoto 2008 pp. 339-348）が、ここでは省略する。ただし、写真（3, 4）に二つの典型的な例が見られるように、橙色の土器の化粧土も橙色に近いものをかけ、土から浮かび上がったようである。また、淡褐色の胎土にかけた化粧土は胎土の色とは関係ない

ように見られ、紫色のものが多い。

以上の二種類と全く違う印象を残す破片がある。同じような淡褐色を呈するが、若干鮮やかな感じが傾向としてある。また、橙色の部分はいっさい見られなく、多くの混和材を含む（写真5）。これらの破片こそが、成川式土器が「粗い」と言う評判の原因ではないかと思う。実は、この胎土は他の地方の弥生・古墳時代の土器にも見られ、例えば双脚輪状文の埴輪（e.g. 国立歴史民俗博物館 1993 pp. 107, 110）も類似する胎土からできていると思う。しかも、この鮮やかな色調と光り輝く混和材を考えれば、逆に美しいと思われたかもしれない。この推測を裏付ける証拠として、古い段階の小型丸底土器をあげよう（写真6）。これらは全てこの「粗い」粘土からできている。高坏が登場し、小型丸底土器のスタイルが変わってくると、以上記述した橙色粘土を使うようになる。この粗い粘土は壺、甕、鉢のような器種にも続いて見られるので、丁寧に仕上げた胎土ほど使い分けが厳密ではない。

とても丁寧に仕上げた粘土と粗い粘土の間にはなかなか把握しにくいグループがある。色調も混和材も両方の方に向いて、もっと暗い褐色や少し赤い褐色などの傾向を見せたり、時々以上のグループと区別しにくい例がある。これははっきりとした特色がなく、他のグループには明確に属さないから、一つのグループとしてまとめたい。この胎土は高坏などの食器・祭祀用の器種ではいっさい見ない。こういう状況から、作りは雑なのか、他のグループより丈夫かをみることは興味深い。

粗い胎土の土器は、混和材（砂）と粘土（土）をきれいに見分けられ、原素材の粘土と混和材の形が残っているように感じる。混和材は近くの吹上砂丘の海辺の砂に大変類似するので、辻堂原遺跡ではこの砂浜の砂を混和材として使った可能性が高い。筆者があるサンプルを洗ってみたところ、鮮やかで大きい砂の粒子が残って、とくに混和材を多く含む破片に似たものになった。

土に関して探してみれば、遺跡の近くにはいくつかの、破片に見られる土に類似する土層が露出する。しかし、土器作りのための可塑性・耐火性があるかどうか、昔の職人がこれらに関連する土層から粘土を探掘したかどうか、具体的にどこから採掘したかは、類似することだけから言えない。幸いに、遺跡中の住居跡から出土した土塊があったので、これらは粘土として採掘して残ったものではないかと思われる。この土塊も土層に類似し、さわった感触も似ている（写真7）。

以上の観察は3900個の破片のデータを具体的に記録し、混和材の粒子の大きさと混和材の割合、破片の色調のデータを分析したものである。その上で、胎土分類とその生成過程に関する仮説を立てた。これに関する三つの現象（粒子サイズの分布、混和材の割合、破片の基本色調）について述べたい。

混和材の量を4つのグループに分類するが、その方法や基準は別に公表している（Shinoto 2008 pp. 171-203, 275-353）。図1に示す曲線はその量に属する平均的な粒子サイズの分布を表している。(1)

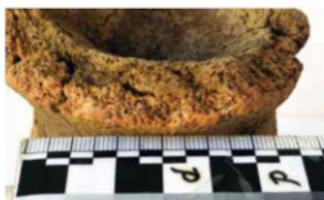


写真5 胎土グループCの壺の底部の割れ目



写真6 胎土グループCでできている小型丸底土器の例



写真7 辻堂原遺跡の住居跡に出土した土塊

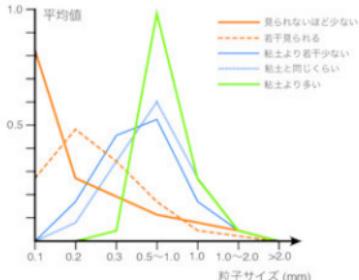


図1 混和材の量による粒子サイズの平均的分布

物的・化学的構造が違えば、破片の外形も違ってくるに違いない。この差は色調に現れる。ここでは統計学的分析を省略するが、以下に紹介するグループでは、その色調と混和材の論理的な関連が明らかになるであろう。

これによって、以下説明する胎土グループA1(1)、A2(2)、B(3、4)、C(5)を設立できる。

(A1) 一番丁寧に仕上げたグループで、砂の中の一番小さな、磁鉄鉱を多く含む粒子だけを混和材として使う。

焼成の時に、磁鉄鉱が酸化鉄になり、このグループが橙色の色調になる要因となるが、基本色調は他のグループに見られる粘土に由来する淡褐色である。

(A2) それほど丁寧に仕上げていないグループで、混和材の一番小さな粒子サイズより、若干大きい粒子も加えている。酸化鉄の橙色はそれほど目立たなく、主に粘土の淡褐色を呈する。

(C) A1・A2とは逆に、混和材の仕上げが「粗い」グループで、砂の一番小さな粒子を洗い流し、大きな粒子だけを大量に加える。この、土のきれいな淡褐色と砂のギザギザした大きい粒子が土器の鮮やかな印象につながる。

(B) 仕上げた胎土とは異なる、なかなか把握しにくいグループである(写真8)。丁寧に仕上げたグループに近い例、粗いグループに近い例があり、色調にも全てを含みながら、褐色や赤味のある褐色まで見られる。混和材は全ての粒子サイズが見られるので、元の素材のままに使ったと思われる。小さな粒子の磁鉄鉱は部分的に赤褐色になり、このバラツキがこのグループの性格が把握しにくい原因になっている。

以上の仮説を検討するために、それぞれのグループの素材と思われる砂や土のサンプルを収集し、鉱物学のさまざまな方法で分析した(篠藤 & ホッファウア 2000, Hoffbauer & Shinoto 2000, Shinoto 2008 pp. 357-363)。X線回折分析に現れる鉱物、蛍光X線分析に現れる化学的組成は素材と胎土グループの関係性を表しているが、胎土グループの化学的組成には体系的な違いが見られる。つまり、グループA1、2は砂の一番小さな粒子サイズに多く含まれる鉄分が他のグループより多いが、グループCは砂の大きい粒子サイズに多く含まれる石灰が若干多い。グループAの化粧土の一例にはチタニウムの量が比較的多く確認できたが、これも砂の小さな粒子サイズの化学的組成に合致する観察である。チタニウムの量は普通非常に少ないが、この砂と破片に同時に若干多く含む場合は砂と混和材の関係を表しているだろう。砂をそのまま使ったとみられる破片はそれなりに合致する化学的組成を見せる。

それぞれのグループの化学的組成と砂のそれぞれの粒子サイズの化学的組成をもって計算すれば、ある程度、混和材と粘土の比率が



写真8 胎土グループBの甌の底部の割れ目の例

予測できる。混和材：粘土の比率はグループ A1・A2 の場合 1:9 弱、グループ B の場合 1:3 以上、グループ C の場合 1:2 前後であるが、これは CaO だけに基づく計算で、再検討の必要がある。

胎土グループの定義

胎土グループ A1（写真 9）は混和材の砂を厳しく選別し、非常に小さな粉だけを土に加えたものである。職人が明らかに精密な胎土を目指したが、赤い色調も狙ったかもしれない。この粘土を食器や祭祀用の器種に使った。破片の橙色の色調と赤い表面（化粧土）には密接な関係がある。観察した属性からいえば、混和材の量が見られないほど少ない」、代表的な粒子サイズが 0.1mm 前後、破片の色は淡褐色（色相 10YR、明度 8、彩度 5～6）に橙色の層が多く見られる。

胎土グループ A2（写真 10）はグループ A1 ほど厳密な選別ではないが、明らかに選別が行われている。精密な胎土を目指したが、その色調に关心がなかったか、自然のまままで良かったのかもしれない。これは、まったく異なる色の化粧土を塗ったことから推測できる。この胎土も食器や祭祀用の器種に利用し、赤い化粧土を塗ったが、胎土の美しさはたぶん A1 ほど重視しなかった。観察した属性からいえば、混和材の量が「若干見られる」（2）、代表的な粒子サイズが 0.2mm 前後、破片の色は鮮やかでない（「汚い」）淡褐色（色相 10YR 前後、明度 7、彩度 4 以下）である。

胎土グループ B（写真 11）は最も普遍的で、これを甕、壺、鉢という、一般的に使う器に利用した。粘土も混和材も選別せずに使つたようであり、そのため色調のバリエーションが辻堂原遺跡の土器の中では一番多い。観察した属性からいえば、混和材の量が「粘土より若干少ないか同じくらい」、代表的な粒子サイズが 0.5mm～1mm でありますながら、他の粒子サイズもすべて含む。破片の色は褐色で、赤味のあるものもあり、「汚い」淡褐色に近いものもあり、はつきりしない（色相 10YR、5YR、5R、10R、明度 1～7、彩度 1～4）。

胎土グループ C（写真 12）は鮮やかな粘土と大量の砂の鮮やかな大きい粒子だけの混和材からなる。たまに現れるピンクの部分はおそらく粘土に含まれる鉄分に原因がある。混和材の大きい粒子と土の非常に小さい粒子の接着が悪く、割れ目ができやすい。粘土と混和材の組み合わせによって、職人が鮮やかな印象を目指したと思われる。そのために粘土にそのまま、洗った砂を混ぜた可能性が高い。胎土グループ A が登場する前の段階の食器や祭祀用の土器に使用されたが、壺や甕にも見られる。観察した属性からいえば、混和材の量が「土より多い」で、代表的な粒子サイズが 0.5mm から 2mm までの大きい物であるが、一番小さい粒子サイズが全くないのは特徴である。色調は鮮やかな淡褐色（色相 10YR～5Y、明度 8、彩度 5～6）である。

終わりに

以上追求した職人技は代々にわたって、女性の間に伝わって来た可能性が高い。成川式土器のような軟式土器はおそらく女性職人が他の仕事の傍らで作った民族学的例や日本の歴史資料（佐原 1988 p. 60）に知られている。



写真 9 胎土グループ A1 の割れ目 (20倍)

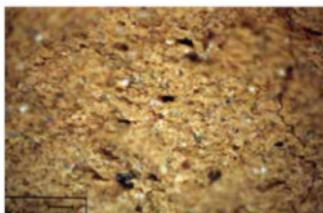


写真 10 胎土グループ A2 の割れ目 (20倍)

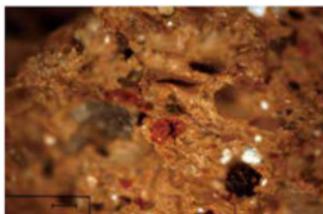


写真 11 胎土グループ B の割れ目 (20倍)

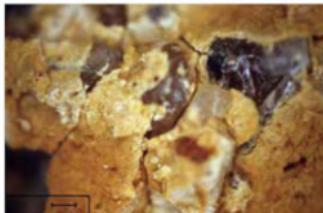


写真 12 胎土グループ C の割れ目 (20倍)

謝辞

成川式土器を最初に紹介してくれた池畠耕一先生に暑く感謝申し上げたい。辻堂原遺跡の研究に応援をくださった旧吹上町教育委員会、常田和彦さんに大変ご迷惑をかけ、お世話になった。鉱物学的分析をしてくださったR. ホッフバウアー先生と、長い間鹿児島の土器、成川式土器への情熱をともにしてくださった本田道輝先生、中村直子先生に感謝を表したい。

文献

- 池畠耕一 (1980) 「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』14, pp. 1-41.
- 国立歴史民俗博物館 (編) (1993) 『装飾古墳の世界 図録』、東京: 朝日新聞.
- 佐原真 (1988) 「土器の用途と制作」、大塚初重他 (編) 「新版 日本の考古学を学ぶ」2, pp. 42-63.
- 森藤マリア & ホッフバウアー・ラデグント (2000) 「鹿児島県吹上町辻堂原遺跡の土器の鉱物学的研究」『人類史研究』12, pp. 91-104.
- 中村直子 (1987) 「成川式土器再考」『鹿大考古』6, pp. 57-76.
- 吹上町教育委員会 (編) (1977) 「辻堂原遺跡」.
- 窯跡研究会 (編) (1997) 「古代の土師器生産と焼成遺構」京都: 真陽社.
- Arnold, Dorothea & Janine Bourriau (Eds.) (1993). An Introduction to Ancient Egyptian Pottery. Fascicle 1 and 2. Deutsches Archäologisches Institut Kairo: Sonderschrift 17.
- Dorst, Dietrich (1967). Töpferei in Afrika: Technologie. Berlin: Akademie-Verlag.
- Hoffbauer, Radegund & Maria Shinoto (2000). Joint archaeological and mineralogical research on pottery production in Ancient Japan. Proceedings of the Sixth International Congress on Applied Mineralogy ICAM 2000 / Göttingen / Germany, 2000, 989-992.
- Klenk, Gabriele B. (1987). Geologisch-Mineralogische Untersuchungen zur Technologie frühbronzezeitlicher Keramik von Lidar Höyük (Südostanatolien). München: Pfeil.
- Noll, Walter (1976). Antike Keramik als Forschungsobjekt angewandter Mineralogie. Mitteilungen der Technischen Universität Carolo-Wilhelmina zu Braunschweig, 11(3): 56ff.
- Shepard, Anna O. (1956). Ceramics for the archaeologist. Washington D.C: Carnegie Institution of Washington. Reprint 1980.
- Shinoto, Maria (2008). Wege der Keramikklassifikation. Am Beispiel einer prähistorischen Irdeware aus SüdJapan. Inauguraldissertation zur Erlangung der Doktorwürde. Vorgelegt an der Philosophischen Fakultät der Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg. <http://www.ub.uniheidelberg.de/archiv/8868>.
- Winter, Adam (1959). Die Technik des griechischen Toepfers in ihren Grundlagen. Heidelberg: Technische Beiträge zur Archäologie, Band 1. Mainz (1959).
- Winter, Adam & Roland Hampe (1962) Bei Töpfern und Topferinnen in Kreta, Messenien und Zypern. Mainz.

須恵器を模倣してつくった成川式土器

橋本達也

成川式土器でも古墳時代中期後葉になると、須恵器の影響を受けて、その模倣品が表れるようになる。確認されるもつとも早いものは、鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）で出土している樽形甕である（図1）。そのモデルは、TK216型式ないしTK208型式の須恵器で、5世紀前葉から中葉にかけての時期にあたる。今のところ樽形甕模倣品はこのほかに見あたらない。

その後、5世紀後葉以降に須恵器模倣品が拡がるが、模倣にあたっては、赤色塗彩したもの、焼成時に黒色処理をしたものの2種が目立つ。いずれも入念に表面なミガキ調整を行い、特別な意味をもたせた器だったのであろう。また、黒色の模倣品はおむね大隅地域に分布し、赤色磨研の模倣品は薩摩地域に多い。ただ、特別な彩色を施さないものもある。

器種として、よくみられるものには甕がある。ほかでは杯身・高杯などが散見される。珍しいものとしては、高杯の蓋、壺、小型壺などもある。あきらかな須恵器模倣の杯身・杯蓋は薩摩地域ではみられず、大隅地域や成川式土器の文化圏にある宮崎県えびの地域で出土している。

また、須恵器模倣品がみられる時期は鉢などの小型器種が増加しており、須恵器のモデルがすぐ見つかるもの以外にも、須恵器杯身や高杯の影響を受けて作られた成川式土器が普及しているとみなされる。反面、このことは日本列島の広域に5世紀中葉以降普及する朝鮮半島に源流をもつ新しい焼き物としての須恵器が、九州南部には日常の土器として流通するには至らなかったことと一連の現象である。それは5世紀後半以降、九州南部に他地域からの人・文物・情報の流入が停滞し、この地の文化が個性化することと関連しているのであろう。



図4 須恵器壺を模倣した壺
(えびの市天神免遺跡)



図1 樽形甕とその模倣品
右：樽形甕（鹿屋市岡崎18号墳）
左：模倣品（鹿児島大学構内遺跡郡元団地）



図2 甕とその模倣品
(鹿児島大学構内遺跡郡元団地)



図3 杯身、杯身・杯蓋の模倣品 (えびの市天神免遺跡)

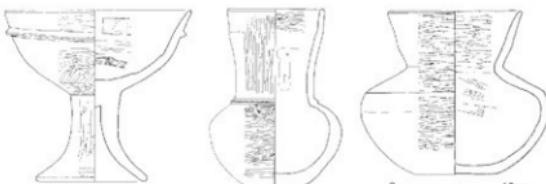


図5 高杯・壺の模倣品 (垂水市後ケ迫A遺跡)



5. どのように使うの？—成川式土器を使った人びと—

鹿児島大学構内に眠る遺跡

寒川朋枝

鹿児島大学構内では、郡元キャンパス・桜ヶ丘キャンパス・唐湊学生寮・農学部付属入来牧場で遺物や遺構が確認されており、それらは、鹿児島大学構内遺跡と呼ばれている。主な遺跡は桜ヶ丘キャンパスと郡元キャンパスで確認されており、後期旧石器時代から近代にわたる様々な時代の複合遺跡であることが知られている。



写真1 旧河川より出土した多数の土器



写真2 旧河川内出土木杭類



写真3 旧河川内出土木製品

鹿児島大学構内で初めて遺跡の存在が確認されたのは、1951（昭和26）年に河口貞徳氏により行われた教育学部運動場での発掘調査であり、古墳時代の住居跡が発掘された。その後、鹿児島県教育委員会、鹿児島大学法文学部考古学研究室により発掘調査が行われてきた。1985年には、埋蔵文化財の保護・活用と学内施設整備を円滑に進めるため、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター（2012年に鹿児島大学埋蔵文化財調査室から改称）が設置され、それ以降現在までに59件の発掘調査が行われている。

鹿児島大学構内遺跡の古墳時代集落

これまでの発掘調査の結果、鹿児島大学郡元キャンパス内は、主に弥生時代から古墳時代の集落遺跡であることが判明している。遺跡の特徴としては、郡元キャンパス内を東西方向に流れる河川とそこから出土する多数の成川式土器（写真1）や水利施設、河川近くに営まれた水田跡、そして微高地に営まれた住居跡群などが確認されている。郡元キャンパスは、当時の南九州の人々により営まれていた集落の景観や土地利用の様子をうかがうことができる南九州の代表的な遺跡となっている。

図1は、郡元キャンパス内の弥生時代から古墳時代にかけての遺跡立地を示したものである。

弥生時代の遺構としては、農学部1号館中庭で、弥生時代中期の遺物を包含する住居跡1軒（居住域①）が検出されている。また、弥生時代中期該当の水田跡A・Bが工学部と教育学部にて検出されており、水田の痕跡としては、溝状遺構や植株跡、足跡のほか、プラントオバール分析により多数のイネプラントオバールが検出されている。そして、郡元キャンパス中央部には幅約50mの河川が東西方向に流れていることが発掘調査から判明しており、産学官連携推進センター建設地では、河川跡の底から弥生時代後期と思われる合掌型の井堰跡も出土している。また、近接

する地域共同センター出土木製品・木杭類（写真2・3、藤田ほか1999）や、やや東側の理学部1号館にあたる釣田第一地点の河川跡から出土している木杭類や木製品類の樹種同定を行った結果（能城2014）、クリが圧倒的に優占しており、クスノキ科・エゴノキ属・エノキ属等がみられた。この状況は北部九州に比べても特異な状況であり、クリが遺跡周辺で管理され木材が利用されていた可能性が指摘されている。鹿児島大学構内遺跡では、弥生時代より、河川を利用するため森林資源を管理・利用し、水を引いて水田を営み、微高地では住居を構えていたことがわかる。

そして、古墳時代に入ると人々の活動はさらに活発になり、居住域は大きく3つのエリアで確認され（居住域②・③・④）、古墳時代後半期には集落規模も拡大する。居住域③では住居跡3軒、居住域④では住居跡10軒やピット群・溝跡等が確認されているが、特に居住域②エリアは、筒貫式土器を主体とする6世紀代古墳時代後半期の住居跡密集地である。そして居住域②エリアの北側には水田跡と河川跡も同時に検出されており、河川のはとりに営まれた古墳時代のムラの景観を示す重要なエリアであり、本点の状況を中心に詳細を述べる（図2参照、中村ほか2003・寒川2013）。

居住域②エリアの理学部から法文学部北側にかけては、約300軒

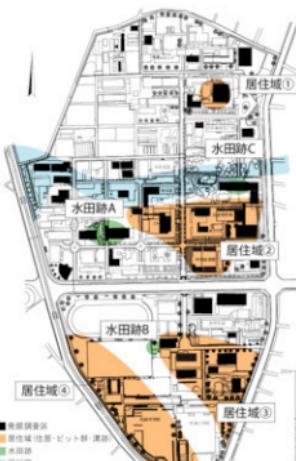


図1 鹿児島大学構内遺跡における
弥生～古墳時代の遺跡立地

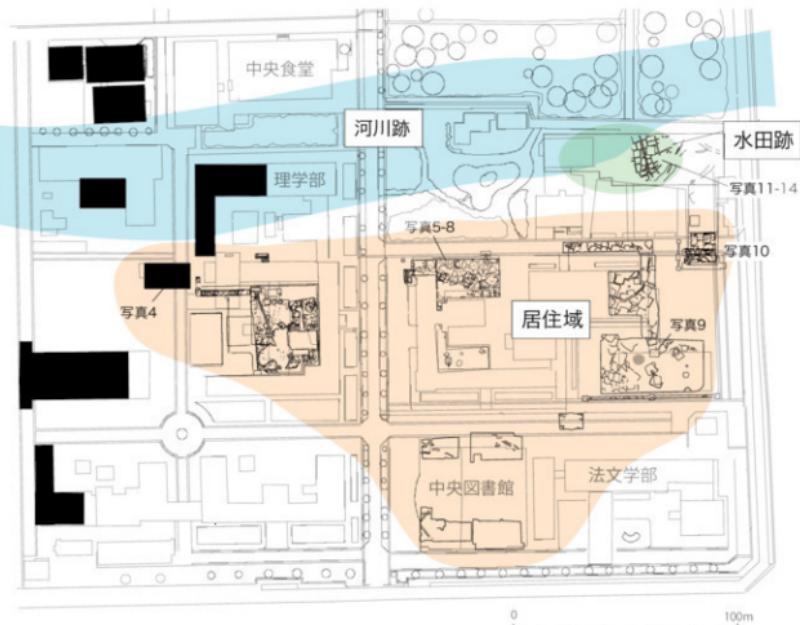


図2 居住域②・水田エリア周辺図



写真4 理学部3号館 造構検出状況



写真5 稲盛アカデミー建設地
SK103・107 住居検出状況



写真6 稲盛アカデミー建設地
SK71 住居検出状況



写真7 稲盛アカデミー建設地
SK99 住居 床面炉・遺物出土状況



写真8 稲盛アカデミー建設地
SK132 住居 埋設炉検出断面



写真9 総合研究棟住居遺物出土状況
(左は埋土内、右は床面白砂)



写真10 学習交流プラザ建設地
SK33 住居床面・裸検出状況



写真 11 水田面検出状況



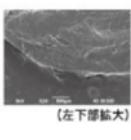
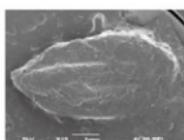
写真 12 水田面完掘、小畦検出状況



写真 13 水田面足跡検出状況



写真 14 溝完掘、盛土遺構検出状況

写真 15 鹿大構内遺跡出土笛貫式土器に残されたイネ圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真
(真邊・寒川 2011)

近くの住居が密集し、同じ場所に重複して建て替えられた状態で検出されている（写真4・5）。鹿児島大学構内遺跡における古墳時代の住居の特徴としては、形は方形のものが多く、床面には細かい白い砂が敷かれていたり、中央もしくは壁際に炉が配置されるものがある（写真5～8）。住居によっては、床面の白砂や炭の層が何枚か確認される場合があり、何度も床面を敷き直している様子もうかがえる。炉の中央部には土器（壺や壺の下半部や、高环の环部など）を埋設していることがあり（写真6～8）、土器内部に炭が詰まった状態で検出される事例もある。住居内からは遺物が出土することが多く、住居内埋土に廃棄されたように出土するパターンが多いが（写真9）、床面上に意図的に置かれたように土器や礫が出土する事例がある。居住域②エリアでは、5軒の古墳時代後期住居床面より、礫が4～8個ほどまとめて出土している。明確な用途は不明であるが、形状や重さ等のサイズが似たものが集められて床面に置かれた状態であり（写真10）、当時の人たちが何らかの意図を持って選別した礫を住居内に持ち込んでいることがうかがえる（寒川2015）。そのほかの出土遺物は、須恵器や土師器、石器（石包丁・台石はか）、紡錘車、土錘、玉類、鉄器、小型の青銅製品、金銅製品、軽石製品などもみられる。また、中央図書館や稲盛アカデミー建設地、学習交流プラザ建設地において溝状遺構が検出されている。これらの溝は、集落の境界にあたる可能性も考えられ、大きい溝内には多量の土器が廃棄されることがある。

また、河川跡南側には、1辺約3mの小畦によって区切られた水田が検出されており（水田跡C、写真11・12）、これは小畦によって区切られた一枚の水田の大きさが分かる貴重な事例である。その東側には大畦と想定される盛土と溝も検出されている。また、土壤のプランツオーバル分析の結果でも多くのイネプランツオーバルが検出されており、水田層であることが裏付けられているほか、ムギ類の栽培の可能性も指摘されている（株式

会社古環境研究所 2014)。この水田層は、河川の氾濫によると思われる白い細砂をかぶった状態で検出され、水田面に残された当時の人々の足跡にもこの氾濫砂が堆積していた(写真 13)。水田層は上下 2 枚検出されたが、整地された痕跡も認められ、氾濫で砂をかぶった後に何度か水田を作り替えている様子をうかがうことができる。また、下の水田層の面では、大溝が検出された(写真 14)。この大溝の西側には、川砂や地山の粗砂が混ざった土層が確認され、川岸に溝を掘り、さらに盛土を行っていることが判明した。盛土の南側は、河川氾濫細砂が堆積しており、河川氾濫により盛土が壊されている状況が認められる。当時の人々が、水田を営むために河川を利用しようとして川岸では土木工事を行い、土地利用の工夫を重ねていた様子がうかがえる。

また、居住域②エリアの住居内埋土については、一部をサンプリングして乾燥・洗浄を行い、土壌内に含まれる微小遺物を検出するというウォーター・フローテーション分析と、土器表面に残された植物片・昆虫類などの微小資料の痕跡をシリコンで型取りして同定・検証するという土器圧痕調査も併せて行っている。まだ分析途中有るが、現在までに得られている成果としては、植物はモモ種実、コミカンソウ属 79 点、イチイガシ 1 点、ツルマメ 1 点、イネ 16 点などが土壌内より検出されており、土器圧痕調査では、イネ圧痕やタデ科種子圧痕などが認められている(深川 2012、中村 2012、真道ほか 2011)。古墳時代のイネ以外の食用植物で、他遺跡より検出されている一例としては、都城市黒土遺跡(柴畠 1994) や坂元 B 遺跡(柴畠 2006) ではアワの土器圧痕、宮崎県児湯郡川南町尾花 A 遺跡(松林ほか 2011) では古墳時代前~中期の住居内からアワ・ヒエ・エゴマ・堅果類、モモ類が検出され、鹿児島県南さつま市上水流遺跡(溝口ほか 2008) では古墳時代住居内よりイシミカワ近似種・モモ類、薩摩川内市楠元遺跡(川口ほか 2002) では溝状構造出土壺の埋土より、シイ属・アカガシ亞属等の堅果類、ムギ類やヒヨウタン類などが確認されている。当時の稲作を含む栽培植物の実態を解明するには、今後も地道なデータを積み重ねていく必要がある。

また、鹿児島大学構内遺跡古墳時代居住域②エリアの土壤分析の際には、動物骨片なども検出されており、樋泉岳二氏(早稲田大学)の同定によると、イノシシ・鳥類・ウサギのほか、カツオ・タイなどの魚類の骨も認められている。これは、古墳時代の人々が植物質食糧以外にも活発な食糧獲得活動を行っていたという具体的な一端を示している。

引用・参考文献

- 株式会社古環境研究所 2014「付編 1 鹿児島大学構内遺跡(2012 ~ 1:郡元団地 H-I ~ 3 ~ 5 区 学習交流プラザ建設に伴う発掘調査)における植物珪化体(プランクトン・オパール)分析」「鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 28」pp.40-47
- 川口雅之・山元真美子・東和幸ほか 2002「楠元・城下遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 57 集
- 柴畠光博 1994「黒土遺跡」都城市文化財調査報告書 第 28 集
- 柴畠光博 2006「坂元 A 遺跡・坂元 B 遺跡」都城市文化財調査報告書 第 71 集
- 寒川朋枝 2013「鹿児島大学構内遺跡郡元団地 H-I ~ 3 ~ 5 区(学習交流プラザ)調査概要報告」「平成 25 年度鹿児島県考古学会研究発表会」レジュメ
- 寒川朋枝 2015「住居内に持ち込まれた礎 - 主に古墳時代の事例について - 」「Archaeology from the south III 本田道輝先生退職記念論文集」pp.169-183
- 中村直子・新里貴之 2003「鹿児島大学構内遺跡郡元団地における古墳時代の様相」「九州前方後円墳研究会 2003 年度第 6 回大会 前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」pp.322-327
- 中村直子 2012「大陸系穀物の流入を考える - 南九州の状況 - 」「第 7 回九州古代種子研究会宮崎大会」
- 能城修一 2014「付編 2 釣田第 8 地点遺跡(郡元団地 H-I ~ 7 ~ 8 区)出土木材の樹種」「鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 28」pp.48-58
- 深川祐子 2012「鹿児島大学構内遺跡出土の種子資料と圧痕資料」「第 7 回九州古代種子研究会宮崎大会」
- 藤田晋輔・寺床勝也 1999「付編 2 出土木材の樹種鑑定に関する報告」「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 13」pp.64-71
- 松林豊樹・日高博司・結城修ほか 2011「尾花 A 遺跡 II 弥生時代以降編」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 195 集
- 真道彩・寒川朋枝 2011「付編 レプリカ法による釣田遺跡第一地点出土土器の圧痕調査」「鹿児島大学構内遺跡 釣田遺跡第一地点」
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書第 6 集 pp.148-150
- 溝口学・東郷克利・森雄二ほか 2008「上水流遺跡 2」「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 121 集」



祭祀と成川式土器

中村直子

集落遺跡から出土する土器の出土状況は、ほとんど廃棄によるものであると言える。成川式土器は多くの場合、集落内の溝や堅穴建物跡（いわゆる堅穴住居跡）の窪地が廃棄場所になっている。土器を日々研究する者としては、1軒あたりどのくらいの量や種類の土器を使用していたかを知りたいのだが、住居跡を発掘しても、住居内に収納されていた土器を見つけるわけではない。住居が廃棄される時には、家財道具のはほとんどが持ち出されているからである。

しかしごく少量ではあるが、床面に残された土器を見つけることができる。これらの土器をよくよく観察すると、破片となってしまっているものが多く、器としての土器本来の機能を失っているものがほとんどである。ただ、複数の遺跡や構造間で器種や部位に共通点があり、また意図的に土器片を配置したと考えられる事例が見受けられることから、単なる偶然でその土器が残されたとは考えにくい。食べ物を煮炊きしたり、水を貯めたり、食物を盛るといった、日常的な土器の使い方とは異なっているが、複数の類似する事例が発見されるということは、これらが個人の単なる思いつきの結果残されたものではなく、成川式土器を使用する集団の全体が一部が保有する慣習の結果であると言えるだろう。また、壊れた土器をリサイクルして日常生活の道具としたと考えるには、いささか奇妙なものが多く、祈りや占いなどの祭祀儀礼の結果残されたものと推定される。

そのほか祭祀具としては、ミニチュア土器や杓子状土製品も存在している。これらも、集落遺跡やその周辺から出土する遺物である。ここでは、集落遺跡でみられる成川式土器を伴う祭祀的遺構や土製品などについて、代表的なものを紹介したい。

1 すまいに関係する遺構

南九州古墳時代の住居を含めた建物跡のほとんどが堅穴建物跡で、竈は導入されず炉が継続する。ここで紹介するのは、堅穴建物跡の床面や柱穴に残されたものと、住居跡内ではないが、居住域内と推定される遺構の事例である¹⁾。その様相は、東原式段階（古墳時代前期）と辻堂原式・筐貫式段階（中期以降）で異なっているため、2時期に分けて紹介する。

1) 東原式段階の事例

鹿児島市武遺跡の複数の住居跡（佐々木他 2004, 田中他 2004, 弥栄 2003）や鹿児島大学構内遺跡郡元町地²⁾の住居跡 93-6-SK14（中村 2001）において、床面やピット上面で検出された甕に共通した特徴が認められる。

出土した甕はいずれも完形品に近いが、脚台がないという特徴を持っている。残存状況がよいため、意図的に脚台のみ除外されたと考えられる。検出された土器片は、さらに破碎されて置かれている場合（鹿大遺跡、図 2）と、埋土の土圧で潰れてはいるものの、意図的破碎が認められないもの（武遺跡）の2種類があり、現在のところ、この特徴は遺跡間の差異となっている。また、鹿児島市のみで確認されているため、比較的限定された地域のものである可能性もある。

2) 辻堂原式・筐貫式段階の事例

この時期の事例としては、複数の土器片が組み合わされているものと、完形品もしくはそれに近い壺などの飲用器が単独で床面から検出されるという2パターンが認められるが、両者の特徴を合わせ持つ遺構も存在している。

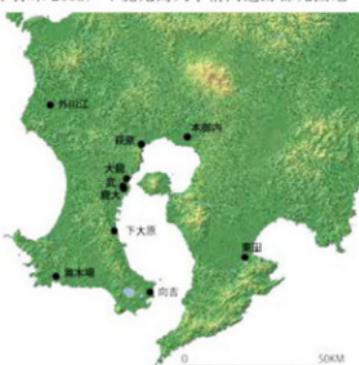
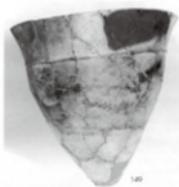


図 1 関連する遺跡の位置



図2 鷹大遺跡 93-6-SK14 土器出土状況と
出土した東原式甌



もある（図3右写真）。筒状の破片であることから、器台のように何かを乗せる道具として転用されるなど、この事例については、住居使用時に置かれた可能性も考えておきたい。

萩原遺跡の2基の住居跡では、甌脚部と高壺脚部を柱穴内や床面上に重ね上げ、最上部に堆や甌が置かれた遺

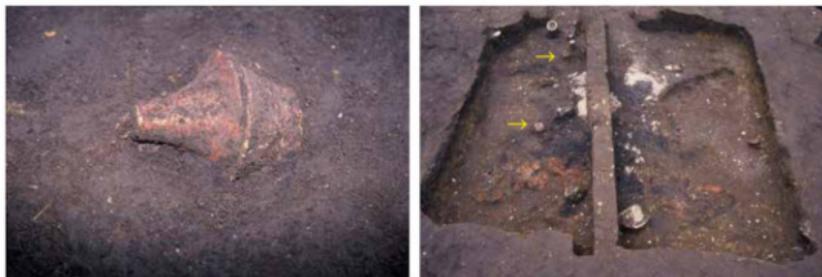


図3 鷹大遺跡住居跡床面の遺物出土状況
左：住居跡 99-1-SK50、右：住居跡 99-1-SK15、黄色印部分が脚台破片

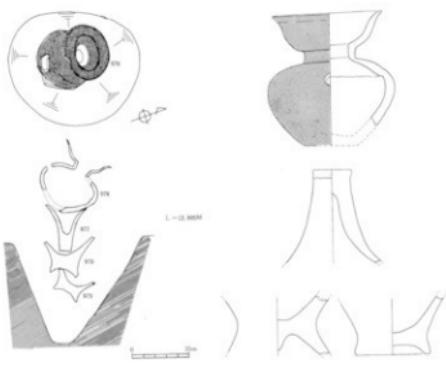


図4 萩原遺跡住居跡 柱穴内遺物出土状況と出土遺物
青崎（1980）より引用、一部筆者改変

構が確認されている（図4）。異なる2基の住居跡に伴うものではあるが、重ね方は全く同じである。一方は主柱穴内、一方は床面に積み上げていたと考えられることから、住居廃棄時によるものと推定できる。

大龍遺跡では、住居跡群隣接地に複数の土器片や軽石礫・堆を平面的に並べた遺構が確認されている（図5、出口他2001）。2、3個を1セットとした壺の脚台や壺口

縁部を対置させるなど、意図的な配置がうかがえる。大壺は胴部で分割され、上半部と下半部は離れて出土している。さらに、下半部のみ伏せられた別個体の大壺の中には軽石礫が詰められていた。これら土器片とおなじレベルに軽石礫や完形品の堆が配置されるなど、本遺跡は、これまで検出された同様の遺構の中では最も複雑な構成になっている。

これらの遺構に使用された土器片の形状に注目すると、以下の3つのグループに分類できる。（ア）壺の脚部や壺口縁部付近の筒状の破片、（イ）壺や鉢の脚台下半部や高环脚部などの器台状を呈する破片、（ウ）上部と下部に分割された大壺片である。破片の選択や配置に全く同じパターンが認められるのは萩原遺跡の2つの遺構のみであるが、全体的には器種や部位にゆるやかな類似性が認められる。しかし、重ね方は遺跡ごとに異なる（図6）。ここで取り上げた遺構は、種類の異なる儀礼によるものである可能性も高いが、土器の使い方に集落間を横断した強い規制があったとは考えられない。木製品など他の素材の道具も組み合っていた可能性があるが、遺跡に残存した道具である土器を見ると、ゆるやかに類似するものの、並べ方が違うなど集落間で異なっており、遺構を形作る行為は、集落間では共有されていないものであったと考えられる。

② 完形品の飲用器

住居跡床面からは、完形品やそれに近い状況の堆や須恵器など飲用器がしばしば単独で出土する。上記①の土器片を組み合わせる例とは異なり、器としての機能を保持しており、墓城の供献品に見るような焼成後の胴部穿孔などもない。まれに、鹿児島市下大原遺跡や枕崎市奥木場遺跡住居址等のような、複数個の堆が検出される事例も見受けられる（宮田・旭1987、吉永・富田1988）。水や酒などの内容物を供えた容器として残された可能性が高い。

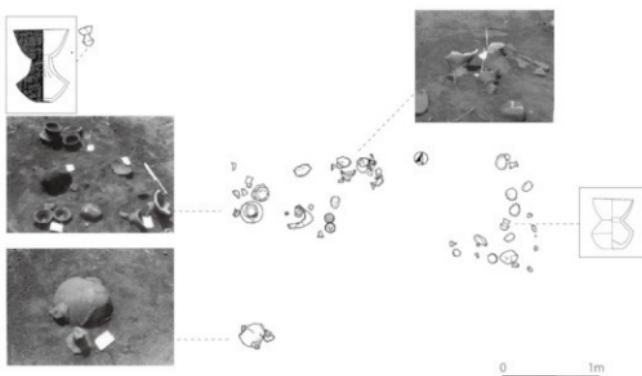


図5 大龍遺跡 土器片を配置した遺構
出口他（2001）より引用、一部筆者



鹿児島大学構内遺跡都元団地 99-1-SK50

萩原遺跡住居址

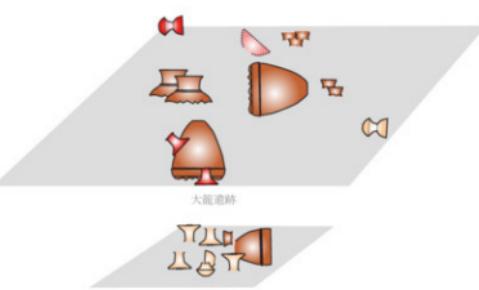


図6 各遺構の土器片の配置（笠貫式段階）



図7 川岸に埋められた土器（鹿大遺跡）

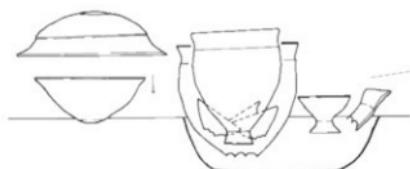
品が多く、壺は胴部に焼成後穿孔が施されているものがあること、また、ミニチュア土器も多く含まれる事から、河川祭祀に伴うものが多く含まれていると考えられている（鹿児島大学総合研究博物館 2001）。

川岸で確認されているものとしては、鹿大遺跡（鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2003）と姶良市萩原遺跡（平田編 1980）があげられる。鹿大遺跡では、浅い土坑内に、東原式段階の壺が破碎された状態で埋められていたが、脚台部分は欠損していた（図7）。これは上述した鹿大遺跡住居跡93-6-SK14の事例と共通する。ただし、この遺構が検出された川岸は住居跡群が検出される居住域とは対岸にあたるため、居住に関するものとは区別する必要があるだろう。

萩原遺跡の場合は、土器片がまとまって川岸から検出されている。意図的な配置かは判然としないが、器種や部位をみると、分割された大壺1個と大壺下半部のみ1個、壺や台付き鉢の脚台部、高杯の脚部等で構成されており、1-①で述べた大龍遺跡で出土した土器片群の種類と類似する。

3 その他の祭祀遺構

遺構の種類が不明ながら、特殊な土器の出土状況が認められる事例として指宿市向吉遺跡がある。東原式段階の遺構である。ここでは、軽石礫と土器埋納土壙を弧状に配置した遺構が検出されている（図8、渡部 1997）。土壙には、壺・台付鉢・小形高杯・大型鉢（あるいは蓋）・大型高杯の口縁部・軽石礫が埋納されていた。渡部（1997）による土器の埋納状況の復元から、これらは同時に埋められると考えられる。器種が煮沸道具と食器であることから、遺構近くで共食し、使用した道具を埋納した可能性も考えたい。



2 河川に伴う遺構

南九州では古墳時代に入ると遺跡数が増加する。特に平野部に立地する集落遺跡が増え、1遺跡内の建物軒数も増加する傾向にある。地形的には河岸段丘上から自然堤防帯に立地し、居住隣接地に河川跡が確認されている場合が多い。水田稲作など農耕に必要な水源として、また井戸が存在しない南九州古墳時代集落にとっては生活用水を得る場所として、さらに交通路として、河川は重要な場所であったと考えられる。

河川に関連する遺構としては、川岸で確認されるものと、河川埋土内から出土するものに分かれる。河川から出土するものとしては、鹿大遺跡（旧釣田遺跡第8地点）（松水・坪根 1986）や鹿児島市不動寺遺跡などがあげられる。鹿大遺跡の河川埋土出土品には様々な器種が認められるが、壺や壺など飲用器の完形

4 ミニチュア土器と杓子形土器製品（図9）

南九州では、土器のミニチュア品が成川式土器の中に含まれている。ミニチュア土器の中には精製品と粗製品があるが、後者はサイズのわりに器壁が分厚く、ユビオサエ痕も明瞭に残したものが多いことから、「手捏ね土器」と呼称される場合もある。

杓子形土器製品はほとんど粗製品であり、手捏ねで作られている。ミニチュア土器とともに南九州本土全域から出土する。そのモデルとなった木製品は杓などの掬い具であると想定される³⁾。これらの土器製品は実用品としては小さいものが多く、使用に耐えないと推定されることから、ミニチュア土器と同様そのほとんどが祭祀用の道具であろうと考えられる。

出土状況を見ると、両者とも住居跡や溝状遺構、廐棄場と考えられる土器溜り遺構などから出土しており、居住に関連するものが多い。杓子形土器製品が出土した外川江遺跡（鹿児島県教育委員会1984）や本御内遺跡（富田・関1994）では鏡片や小形彷彿鏡も出土している。出土状況からの直接の関連性は不明だが、拠点的集落から出土する傾向にあるという点では一致している。また、杓子形土器製品の場合、宮崎県や熊本県では弥生時代後期～終末期に限定されるのに対し、鹿児島県側では弥生時代後期に出現し、在地化して古墳時代まで存続し、成川式土器の消長とはほぼ連動している。

5まとめ

成川式土器を伴う祭祀的遺構と、土壙墓や土器棺墓などの墓域祭祀や供獻品を比べると、大きな違いが認められる（図10）。墓域で出土する主要な器種は、大壺・壺・高杯・埴などで、機能別に見ると貯蔵容器と食器であり、完形品かそれに近い残存状況である。ただし、壺には胴部に焼成後穿孔が施されているものが多く、貯蔵容器としては象徴的なあり方を示している。また、各器種の型式変化があるものの、使用される器種組成は古墳時代を通じてほとんど変化しない。

一方、集落遺跡での祭祀遺構から出土する土器は、東原式段階では脚台をはずした壺を用い、次の辻堂原式・

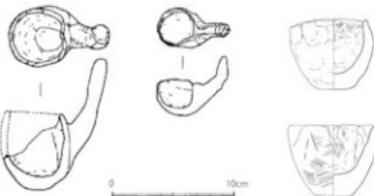


図9 粗子形土器製品とミニチュア土器 S=1/4
粗子形土器製品：外川江遺跡（鹿児島県教育委員会1984
より）、ミニチュア土器（寒川編2011より）



図10 集落遺跡検出の祭祀的遺構と墓域で使用される土器の比較

筒貫式段階のものは、大壺・壺の脚台・台付鉢の脚台・高杯の脚部・完形の壺などを組み合わせるもので、器種や部位に変化がみられる。煮沸具の使用・筒状の破片や器台状の破片・分割された大壺など、墓域でのあり方とは全く異なる。

日常的な土器片で形成されるこれらの遺構は、ただの破片が転がっているように見えるかもしれない。しかし、このちょっと奇妙な遺構は、当時の人々の生活に密着した願いや祈りのためのアイテムであったと思われ、それは集落ごとに少しずつ異なるものであったようだ。

成川式土器は、調整具の違いや口縁端部の仕上げ方、器形の差などの製作技法の違いが遺跡ごとに見られ、細かい型式変化ごとに各遺跡間の並行関係をとることが困難な土器様式であるが、それは、土器作りを行う集落内で製作技術が変化する一方、他の集落との土器作りの情報交換があまり頻繁ではなかった事を示している。これは、ゆるやかに類似しながら遺跡ごとに少しずつ異なる祭祀的遺構の様相と共通するものである。土器作りと集落での祭祀的遺構は、それぞれ自立しながらゆるやかに連携していた、成川式土器を使用する人々の社会の様相を示しているのかもしれない。

註

- 1) 遺構名は「〇号住居跡」など報告書掲載の遺構名をそのまま用いるが、遺構種類名としては「住居跡」に統合する。
- 2) 以後、「鹿大遺跡」と略す。
- 3) 題にしては身の部分を深く作り出しているものが多いことから、杓がモデルになっているのではないかと推定され、ここでは杓子形土製品と呼称する。

引用・参考文献

- 青崎和恵 1980 「四段重ねの土器」「萩原遺跡Ⅱ」姶良町教育委員会,69-74.
- 青崎和恵 1996 「東田遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県教育委員会 1984 「外川江遺跡・横岡古墳」鹿児島県教育委員会
- 鹿児島大学総合研究博物館 2001 「鹿児島大学総合研究博物館 News letter」No. 2
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2003 「鹿児島大学構内遺跡郡元町地 H - 12 - 13 区 (VBL 棟建設地) における発掘調査概要報告」
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 佐々木幸男・出口浩・吉永正史・森岡久美子 2004 「武道跡 E 地点」鹿児島市教育委員会
- 寒川朋枝編 2011 「鹿児島大学構内遺跡郡元町地一釘田第一地点」鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
- 田中竜太・出口浩・森岡久美子 2004 「武道跡 F 地点」鹿児島市教育委員会
- 出口浩・吉永正史・中村直子・宮里論子・上村律子 2001 「大龍遺跡」鹿児島市教育委員会
- 戸崎勝彦・吉永正史 1981 「松之尾遺跡」枕崎市教育委員会
- 富田逸郎・閑明恵 1994 「本御内遺跡 (舞鶴城跡)」鹿児島県立埋蔵文化財調査センター
- 中村直子 2001 「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 15」鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 中村直子 2004 「住居跡およびその周辺における土器出土状況の特殊な事例について—南九州古墳時代を中心として—」『鹿児島考古』第 38 号 鹿児島県考古学会
- 中村直子 2009 「南九州における木製品模倣土器について」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集 pp.59-67
- 平田信芳(編) 1980 「萩原遺跡Ⅱ」姶良町教育委員会
- 文化庁(編) 1973 「成川遺跡」文化庁
- 松永幸男・坪根伸也 1986 「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」I 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 弥榮久志 2003 「武 A・B・C 遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮田栄二・旭慶男 1987 「奥木場遺跡」枕崎市教育委員会
- 吉永正史・富田逸郎 1988 「梅木渡瀬調査地区」喜入町教育委員会。
- 渡部徹也 1997 「鹿児島県指宿市向吉遺跡検出の祭祀遺構について—その成立背景と意義—」『人類史研究』9 221-234 頁



墳墓と成川式土器

橋本達也

成川式土器は、この世の日常生活やまつりに用いられるほか、墓でのまつり、あるいはそれ自体を棺とした墓にも利用される。

まずは土器棺をみよう。成川式土器では壺が棺として利用されるが、その代表的な遺跡は、指宿市成川遺跡・同市南摺ヶ浜遺跡（図1）、枕崎市松之尾遺跡など、とくに南薩地域で事例が知られている。また、指宿とは錦江湾をはさんで対岸正面の錦江町大根占にある城元遺跡にも大量の土器棺群があったとみられる（図2）。時期的には古墳時代を通して長期的に利用されている。

土器棺は一般的に弥生時代以来、小児用棺として用いられたことが日本列島の広域で知られている。成川式土器の土器棺でも瓶島にある薩摩川内市大原・宮薙遺跡（図3）で乳児頭骨が出土していることから、やはり小児用棺の可能性が高い。

分布は、前方後円墳などの古墳築造のみられないところで抜がっており、土器棺墓と共存する土塙墓では死者が屈肢葬という古墳文化圏では存在しない埋葬姿勢で葬られることも特徴的で、これらの要素はとともに古墳文化の影響の少ない地域で独自に発展しているとみなされる。

また、土塙墓・土器棺墓群でも、祭祀に土器を用いることが多く、高杯や小型壺・甌（須恵器模倣）などが多く用いられる。これらは古墳に伴う祭祀土器とも共通するものであるが、大隅地域の古墳や地下式横穴墓群の場合、多くは成川式土器とは異なり、土師器を用いている。

円墳の鹿屋市岡崎18号墳では、土師器・須恵器を用いた祭祀を行っているが、そのなかに成川式土器の要素を取り入れた土師器壺があるのは珍しい（図4）。一方で、小規模地下式横穴墓からなる鹿屋市祓川地下式横穴墓群や名主原地下式横穴墓群では成川式土器のみの供獻がある（図5）。それらは須恵器模倣品が中心であることも興味深く、本来は須恵器・土師器を指向しているのだろう。

大隅の前方後円墳・曾於郡大崎町横瀬古墳・同町神領10号墳には埴輪が立てられているが、この埴輪の技法をみると、成川式土器との共通要素が多くみられ（図6）、その製作には日頃、成川式土器を作っていた人びとが臨時で動員されたとみられる。



図1 指宿市南摺ヶ浜遺跡の土器棺墓



図2 錦江町 城元遺跡
鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵



図3 大原・宮薙遺跡



図4 岡崎18号墳



図5 祓川地下式横穴墓群 供獻土器

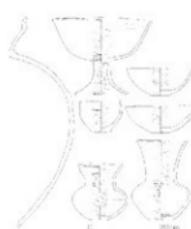


図6 神領10号墳

成川遺跡

指宿市



大型壺は土器棺、小型器種は供獻土器である。土壙墓・土器棺墓群として、考古学史上も著名な遺跡である。この遺跡の調査成果が、1960年代後半から70年代にかけて「隼人」を考古学で明らかにしようとする気運を盛り上げた。



6. どんな意味がある? —成川式土器をめぐる研究の現在—

「土師器」の中の「成川式」土器—中津野式から辻堂原式にかけて—

久住猛雄

【はじめに】「成川式」は「土師器」か否か?

「成川式」土器は、私のように「土師器」を専門にする者にとっては、同じ古墳時代の土器の中でも非常に違和感のある、異形な土器群である。いや、土器研究を専門とする者でなくとも、その<違和感>は直感的に感じるものであり、「それは<土師器>ではない」とする意見も聞かれるところである。しかしながら、ここで学問的に冷静に考えてみたい。

現在「土師器」は、学史上的「齊一性」概念からは理解できないような多様性があるものと捉える傾向が強い。少なくとも、須恵器出現までの「古式土師器」段階においてはそれが顕著である。以下に見るように、特に壺形土器（機能的には「甕」というより「鍋」なのだが）の多様性は顕著である。そのような観点で見ると、見方によってはまるで縄文時代の深鉢形に戻ったような（ただし脚台が付く）成川式の壺形土器も、多様性の一つとして捉えられないことはない。体部形態を除けば、西日本の土師器としては異質であるけれども、後述するように、東日本まで視野に入れると「台付甕」は、古墳時代中期前半では珍しい存在ではないのだ。九州において「台付甕」は、弥生時代後期から終末期の九州島南半分の地域色である。しかしその多くの地域では、古墳時代初頭以降は畿内系土器の伝播受容を待たずとも脚台が無くなる傾向があり（図1）、薩摩・大隅のみが取り残された観がある。そういう意味で「土師器」とは異なるものという見方も理解できるが、繰り返すが全国的に見ると「台付甕」ということで「土師器ではない」とすることはできない。さらに、「分厚い器壁」という違和感もあるかもしれないが、これも地方によってはそう珍しいことではない。

そもそも土師器に「齊一性」があるとすれば、かつて小林行雄が予察したように（小林 1935）、「祭祀」に関わるとされる「小型丸底土器」と、脚部が屈折する高杯、また大型土器以外の長頸壺や広口壺といった「丸底咲」の存在の共通性

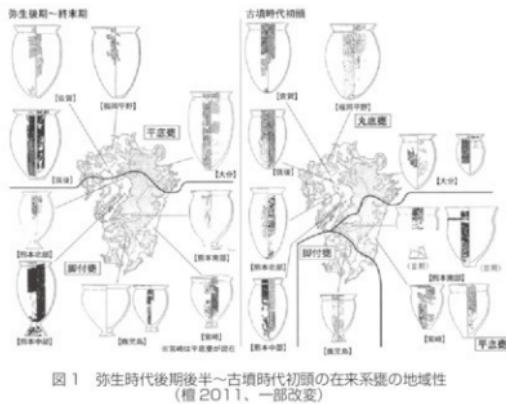
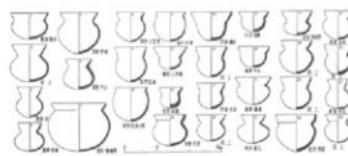


図1 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の在来系麁の地域性
(檀2011、一部改変)



四 二 集



図2 古墳時代前期～中期の各地の小型丸底壺(上段)と丸底坦・高杯(下段)(小林 1935)

ぐらいしかない（図2）。

しかし「古式土師器」の初期には、必ずしもこれらがそろう普遍的な「齊一性」はまだなく、現在、「土師器」の成立とは結局のところ、「古墳時代の土器」かどうかによって定められることになる。つまり、古墳時代（以降）の酸化炎焼成の軟質（後の須恵器や陶器に比較しての「軟質」）土器が「土師器」とするのが、後代も含めたもっとも包括的な定義となるだろう。これは「弥生土器」が、その多様性から、「弥生時代の土器」としか定義できないことと同じことになる。この場合「弥生時代」の定義は、「日本で（水稻耕作を根幹とする）食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」であり、「前方後円墳の出現」までの時代である（佐原1975）。一方、「古墳時代」とは「前方後円墳の時代」であるが、その「前方後円墳」がどの墳墓からかは説が分かれれる。ここでは、大方の同意がある「定型化した」前方後円墳が成立した、「箸墓古墳の時代」からとするが、この時期の畿内における土器様式は「布留0式」とされる段階である（寺沢1986）。

そのようにして見ると、「成川式」が「土師器か否か」は、「古墳時代」の土器か。またく上師器らしい土器類として、小林行雄が見通した最小限の「齊一性」を示す器種の存在あるいは受容がみられるかどうか、という二点を検討することが必要になる。前者の「古墳時代の土器」かどうかという点は、列島において「古墳」が出現した後の土器かという点と、「成川式」の分布圏で「古墳」ないしは<在地的墓制>としても「古墳」の影響を受けた墳墓が出現しているかどうか、ということが問題になろう。また土器論からすると、これは当初の「齊一性」の議論から、必然的に展開されたものであるが、畿内の古墳文化の影響が土器に影響するとして、すなわち畿内系土器（庄内式・布留式）の影響あるいは様式伝播があるかどうかが「土師器」の開始と理解されることも多い。特に西日本の古式土師器研究ではそうである。この影響の有無も検討の対象になる。なお本稿では、主に「古式土師器」の時期（「中津野式」～「東原式」段階）を検討対象とし、一部初期須恵器併行期（「辻堂原式」段階古相）まで言及することがある。

2 「成川式」初頭（中津野式）の編年的位置と「古墳」の影響

このような分析をするとき、結局のところ、通時的な理解、すなわち「編年」の理解が不可欠になる。「成川式」の編年については、現在よく使われる編年である中村直子による大別編年を用いる（中村1987）。この中村の編年は、当時は「細別」であったが、今日的な視点では「大別」であって他地域の編年との併行関係の措定に問題が生じるので、その大別様式（本論の対象となる「中津野式」・「東原式」・「辻堂原式」）を必要に応じて細分したり、移行様式を仮に設定する。また、中村やその後の「成川式」に関わる論者の多くが、その最初の大別様式である「中津野式」を「弥生時代終末期」ないしは畿内の「庄内式」併行としたが（弥生時代「後期後葉」とする論者もいた）、これが実は問題がある。

結論を先に言えば、「中津野式」は、少数ながら確実に伴う「伝統的畿内第V様式系」土器を媒介にして、また土器の搬出搬入関係から、北部九州の「II A期～II B期」（久住1999）に概ね併行し、畿内では「布留0式」の古相～新相、布留1式初頭に併行するだろう。なお「II A期併行」として示した図A（図A～Fは文末図）にある「中津野遺跡」出土土器群は、壺の胴部が下ぶくれ状になるものがあることから、やや新しく、II B期併行とすべきかもしれない。また次の東原式の移行様式は北部九州のII C期～III A期古相、布留1式～2式古相まで併行する。近年、「中津野式」の変形土器の詳細な観察から、その古相型式から一部に「内面ヘラケゼリ」が導入されていることが明らかになっているが（穗園2015）、その技法系統（畿内系の庄内式・布留式、あるいは山陰系技法）と伝播時期を考慮すると、福岡平野に庄内式期（I B期）に先行して一部受容されるのを除くと、その広範な展開は北部九州のII A期以降とみなければならず、やはり「弥生時代終末期」ではありえない。そもそも、「庄内式併行」の根拠とした土器は、北部九州から中九州では布留0～1式併行にある器種であった。

胴部突帯などに中津野式でも新しい型式的傾向をもつ壺（中村1987「壺B」Ⅲ式）が、おおむね布留1式併行の吉備（備前）の中撫川遺跡の溝から出土している（図B）。図示していないが、中津野式でも薩摩北部に特有の胴部タタキ仕上げの壺が、福岡市北区遺跡群91次のII A期の土器窓に共存している。また、中津野式の次の「東原式」の指標とされた霧島市国分の城山山頂遺跡土器群に伴う布留式系土器群は、「布留1式」ではなく、むしろ「布留2式」併行であり、さらにその新しい段階（北部九州のIII A期新相）に併行するものである（図C）。「東原式」でも古い様相の指標である出水郡東町の山門野遺跡2号住居の布留系壺も、おそらく模倣品であろう

が、口縁部の様相からは北部九州のⅢA期（布留2式併行）に下る布留系壺がモデルであろう。東原式が前期後半（以降）であれば、中津野式が前期前半とみてよい。中津野式古相の壺の一部に限定的受容でも内面ヘラケズリがあるならば、ⅡA期併行よりも遅上しないだろう。なお、南さつま市坊津町の清水前遺跡土器窯には、ⅡC期の北部九州および有明海沿岸の布留系壺が伴う（図B）。この土器群は壺の特徴から「東原式」とされるが、しかし壺の特徴は口縁部など、むしろ「中津野式」に近い。つまり、中津野式と東原式の間に移行様式を設定することができるだろう。これは、後述する南さつま市金峰町芝原遺跡の資料などからも指摘でき、北部九州のⅡC期からⅢA期古相に併行する時期がその移行様式であろう。

では、中津野式段階の墳墓に「古墳」の影響があるかどうかである。姶良郡湧水町永山遺跡10号墓は、板石積石棺墓を主体部にもつ、径7mの円形周溝墓である（図3）。周溝は北西方向が途切れ、陸橋部と考えられる。このような「石室墓」は弥生時代終末の石棺墓から急速に型式変化して成立したものであり（西2002の「石室墓第2類・第3類」）、円形周溝墓との組み合わせも含め、竪穴式石室を有する「古墳」の影響を考慮するのが妥当だろう。出土土器には、「畿内系」（久住1999の「B系統」だろう）の塊状环部開脚小型高坏があり（これを「小型器台」としてきた学史上的検討は不適切）、畿内からの形式伝播経路を北部九州→有明海沿岸（佐賀平野～熊本平野）→薩摩とすると、熊本平野でのこの形式の出現は北部九州ⅡA期併行（熊本平野の「古関式」）以降であり、時期的にも「古墳時代」併行である。実は、肥後南部の人吉盆地にある錦町夏女遺跡1号住居に同様の塊状小型高坏と、永山10号墓の頸部突宍がある大型壺に器形が類似する壺があり、檀佳克の「球磨Ⅱb期（夏女1式）」に位置付けられ（檀2004）、熊本平野の資料を媒介にして北部九州のⅡB期に併行する資料としてよい。注目すべきは、周溝に壺形土器が並ぶように落ち込んで出土していることであり、底部穿孔や二重口縁壺ではないが、「同類多数の壺を供獻する」という古墳祭祀の影響を受けていると見るべきだろう。あえて言えば、「永山遺跡10号墳」と呼ぶべきではないだろうか？

すなわち中津野式段階から、その土器様式の分布圏内に「古墳」が存在すると見るなら、時代的な意味でもやはりこの段階から「土師器」となる。類例は少ないのかもしれないが、今後、「古墳」の存在やその影響を受けた墳墓がないかどうか再検討する必要があろう。円形周溝墓自体は弥生時代中期後半から当地域に存在するようであるが、たとえば指宿市南摺ヶ浜遺跡などの陸橋を有する円形周溝墓は中津野式段階から増えたとみられ、「古墳」の影響と考える。

3 「成川式」への畿内系土器の影響と「土師器」化

それでは、中津野式からそれに続く東原式に、「土師器」の特徴である「小型丸底土器」は伴うのであるか？あるいは「畿内系」の影響はあるのだろうか？

その検討の前に、古墳時代前期の土器を検討するにあたって、土器の＜技法体系＞の系統分類を把握する必要がある。ここでは詳述できないが、筆者は弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて北部九州の在来系から「畿内系」土器様相への変容を考察するにあたって、A系統（在来系）、B系統（畿内伝統的V様式系）、C系統（庄内式系）、D系統（布留式系）の四系統（山陰系含めれば五系統）を把握・分類し、分析の基礎とした（久住1999）。これは從来、「畿内系」としていたものを三系統にわけて捉え直したこと、系統ごとの土器群の変遷・型

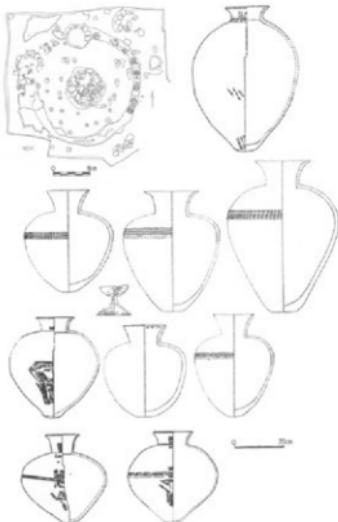


図3 永山10号板石積石棺墓と周溝出土土器
(河口ほか1973、土器実測図の一部は西2000)



図4 古式土器の系統分類(権2011、久住1999の記述を基に権佳克が整理したもの)

式組列を明らかにしたことに意義があった。以後、この系統分類を基礎とする考えが古式土器研究者の間で浸透しつつある。ここでは、筆者の考え方を整理した権佳克の系統分類説明を、若干の修正加筆して掲げておく(図4)。

ここで注目すべきは、「B系統」である。これは本来的には畿内およびその周辺部の技法体系だが、北部九州(筑前・豊前・肥前)にI A期(弥生時代終末期古相)に伝播・波及し、その後各地にさらに拡散している。当初のI B期までの波及は「畿内系」集団の移住・移動とも関係があるが、伝播先の在地において特に小型器種の製作技法に受容され、器形は在来系的でありながら技法は「B系統」という「隠れB系統」がみられることが少なくないことが注意される。もちろん、器形(器種)も本来のB系統土器群にあったものが型式変化しつつセットで伝播する場合もあるが、筑後はI B期、肥後へはII A期(「古閑期」、図A)に波及する際の「集団」は、直接

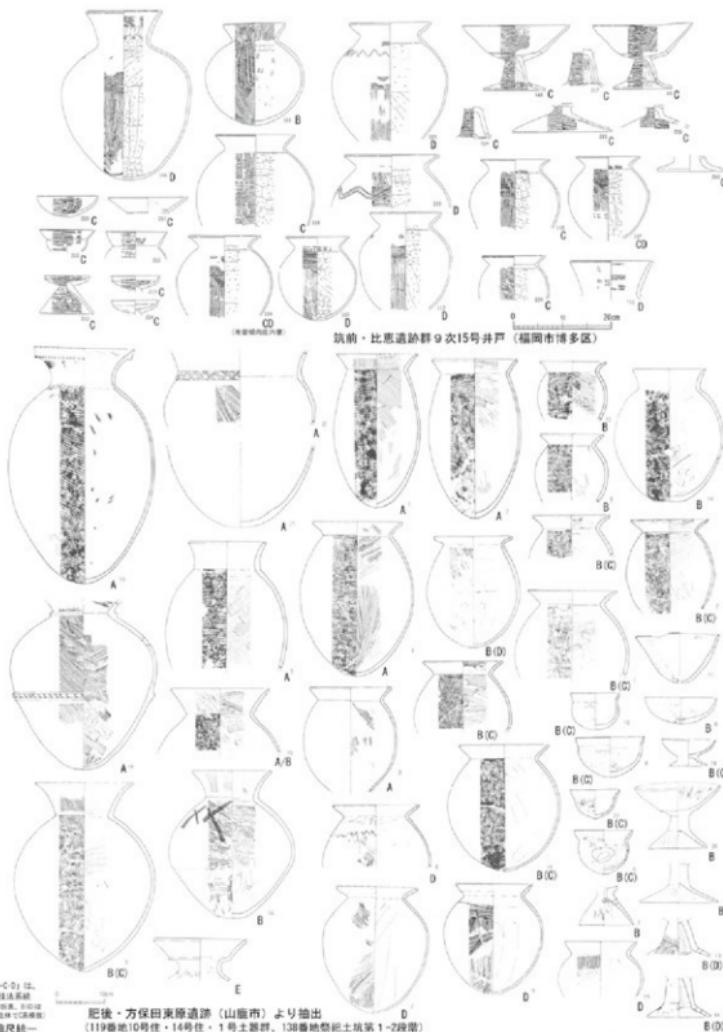
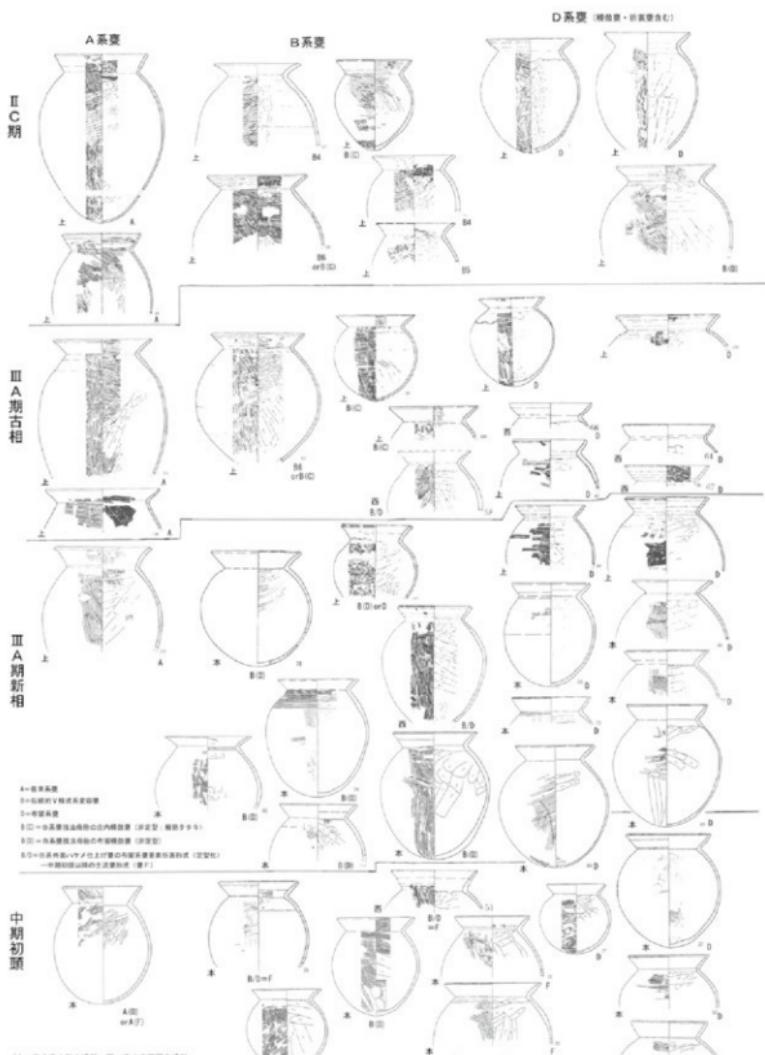


図5 II期(布留O式新相併行)の北部九州(筑前)・中九州(肥後)の土器様相

図 6 熊本平野中～南部の古式土師器壺形土器の変遷
(縮尺統一)

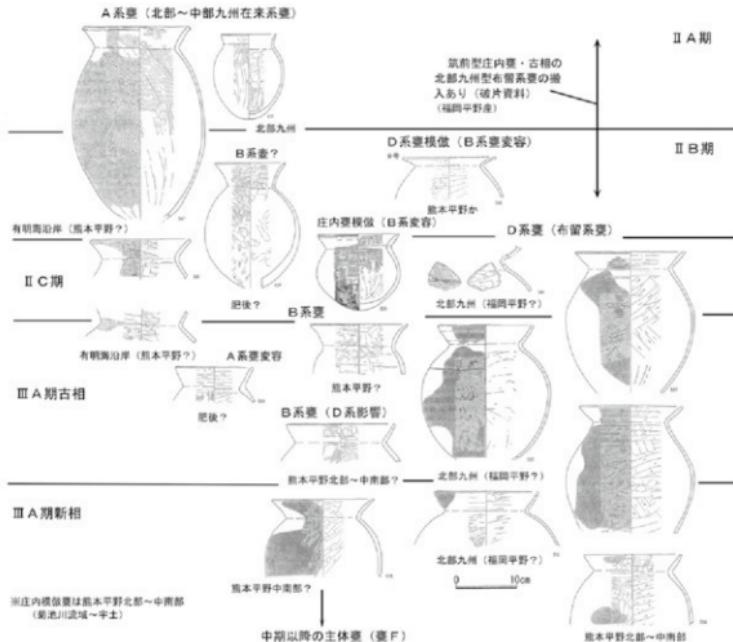


図7 芝原遺跡における外来系壺の搬入

的に「畿内」周辺と関係がある集團であったかは疑問もある。というのは故地の土器群の変化とは連動していないからである。しかしこの「B系統」は伝播力が強く、「布留系」が伝播拡散する前にまず各地に波及している傾向がある。薩摩への伝播経路である肥後においては、II B期には「B系統」が多くを占めるようになる(図5)。同時にII B期にはD系統(布留式系)土器群も波及するのだが、その後、布留式系が多くなるII C期以降もB系統は根強く残り(図B)、D系統の模倣や折衷による新形式創出をしながら(図6)、そのまま古墳時代中期の土器に統いてしまう(図D)。

従来の鹿児島に成川式の編年的検討では、「B系統」の認識は皆無に近く、また実際は肥後經由のB系統の搬入や在地化なども、「布留式系」として捉えている節があり、外来系(畿内系)壺を「丸底壺」として括し、系統分類の視点がない傾向にある(たとえば鎌田浩平2009・2014)。たとえば外来系「丸底壺」にも、北部・中九州在来系壺(A系統)、B系統壺、D系統壺がある(図6・7)。さらに、東原式期における布留系壺の搬入あるいは在地模倣においても、「布留式」の様式幅における時間的型式位置や直接の故地(多くは熊本平野)における型式対比を考慮せず、漠然と布留式古相としてきたが(そのために中津野式は庄内式併行となる)、「畿内系」が多く出土した城山山頂遺跡土器群の高壺や小型丸底壺の型式学的位置を見てもそれは誤りだろ。その城山山頂遺跡の布留式系様式土器群には「B系統」も含まれているのである。

鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査した南さつま市金峰町芝原遺跡の中津野式～東原式の土器群を観察・検討する機会があったが、そこに少なからず「B系統」とその技法の影響を受けた土器が存在することに気がついた(図8・9)。古い時期では、松木蘭式／中津野式の移行様式期(北部九州I B期併行)と推定される土器集中遺構3号にすでに存在する。図8の左上の小型壺などは、福岡平野に存在する「隠れB系統」のものに酷似して



図8 芝原遺跡における日系系統土器(1)(遺構出土土器、技法影響含む)



図9 芝原遺跡におけるB系統土器（2）（グリッド出土土器、技法影響含む）

いる。しかしB系統が多く存在するのは、中津野式期から、「中津野式／東原式移行様式期」とした段階である。この時期には、在地の脚台付甕のごく一部だが、体部下半の整形にB系統技法が影響しているのではという例もある(図9左上)。芝原遺跡におけるB系統の技法影響は中期初頭まで確認できるが、同じ万之瀬川流域で河口付近を見下ろす位置に築かれた南さつま市加世田の奥山古墳の出土器群の製作技法にその影響があることが分かる(図10)。奥山古墳の土器群は、器形的には同時期(ⅢA期新相併行)の熊本平野南部の布留系主体土器群の影響下にあるが、製作技法は在地に根付いたB系統技法をもとにそれらを模倣したものと理解することができよう。

筆者は芝原遺跡しか実見していないが、他にも、日置市吹上町辻堂原遺跡溝状遺構2や、姶良市萩原遺跡2号住居の土器群といった「中津野式」段階の指標とされた一括資料の中に、実測図の表現による限り、やはり「B系統」と推定される土器が少なからず存在する。これはこの前段階の様式にはないものである。芝原遺跡の場合、土器集中遺構4（松木園式／中津野式移行様式段階）に北部九州IA期の複合口縁壺があつたり（報告書作成段階に「下大隈式」段階としたのは、頸部の太さなどから訂正する）、北部九州産の小型微製鏡が数面存在するなど、北部九州との直接的な交流・交易ルートが推定されたため（久住2014）、B系統も一時期早くI B期併行で一部波及している理由が説明できるが、薩摩地域の他遺跡にも点的ながらそれが波及しているのは、隣接する肥後地域でそれが点的で

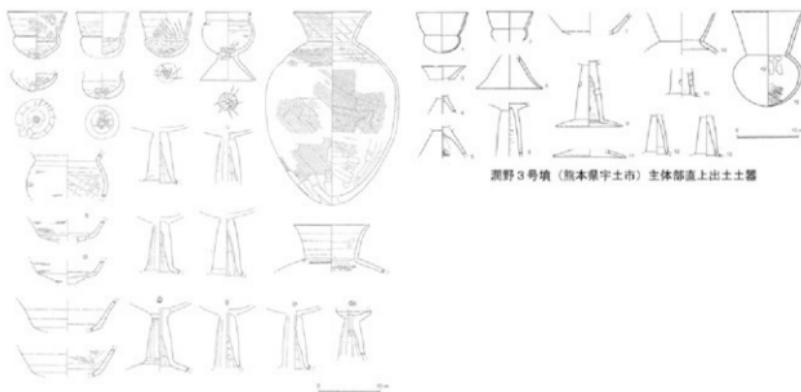


図 10 加世田奥山古墳と熊本平野南部の古墳出土土器（Ⅲ A 期新相併行）

あるが波及しているⅡ A 期を巡ることはないだろう。むしろ多くは、それら中津野式の諸資料に伴う「B 系統」土器の型式学的様相を比較するならば、肥後・熊本平野のいくつかの遺跡でそれが主体となるⅡ B 期の様相の一部が波及していると考えたほうがよい（図 5・11）。

しかしこれで言えることは、「中津野式」段階に、時期は布留 0～1 式併行期に下るが、「畿内系」土器の影響がみられるという事実である。これは、「成川式」が当初から、「土師器」的様相を有するということの証左にもなる。

次に小型丸底土器はどうか？

これまでの資料では、城山山頂遺跡や大隅の鹿屋市稻村城跡での様相から、型式学的にⅢ A 期併行段階（布留 2 式併行）が小型丸底土器（小型丸底壺）の波及（一部搬入も含む可能性がある）と在地化の上限であり、在地の土器様式では東原式古相段階であった。ところが芝原遺跡においては、Ⅱ B 期併行段階からの精製小型丸底壺の搬入があり（北部九州産か）、Ⅱ C 期併行以降、その模倣と在地形式化がなされていることが判明した（図 12）。この段階、Ⅱ C 期～Ⅲ A 期古相併行期は、中津野式／東原式移行様式段階である。この段階には、「小型丸底土器」という観点でも、一部の遺跡であるが様式的に「土師器」化した段階と捉えることができる。

もちろん、他の大部分の器種は在来系様式の

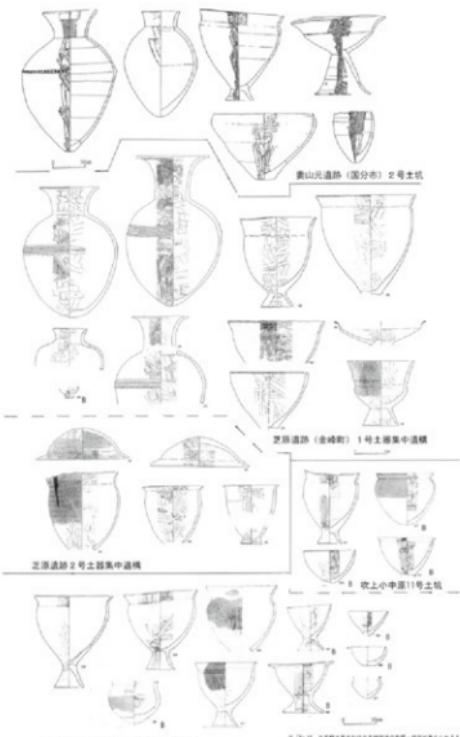


図 11 Ⅱ B 期（＝布留 0 式新相）併行期と推定される中津野式土器

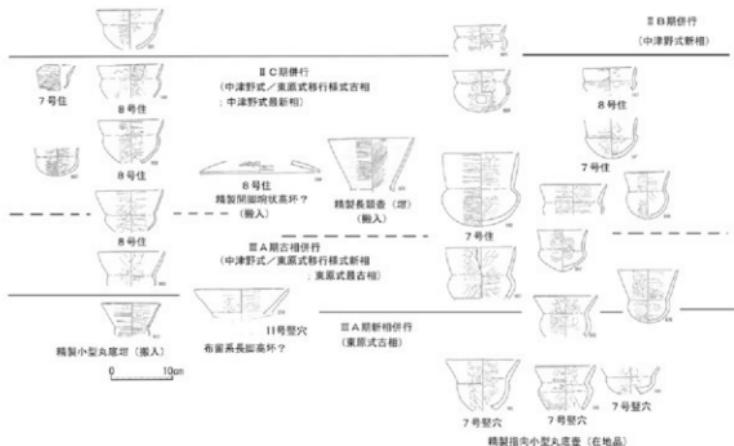
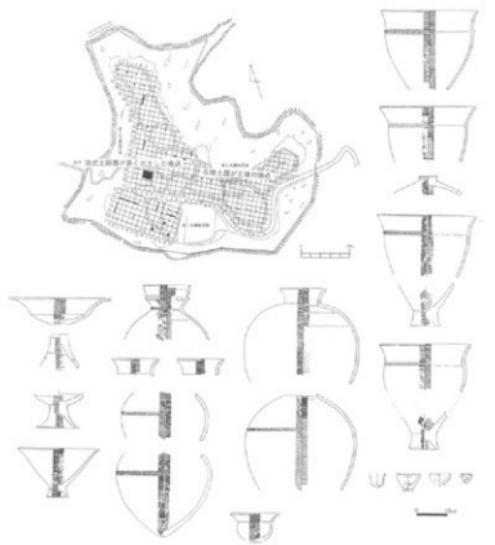


図12 芝原遺跡における精製小型丸底壺の搬入とその在地化

図13 城山山頂遺跡（国分市）と在来系・外来系土器の出土域
(上村ほか 2000 および報告書より、実測図は在来系土器群)

ままである。しかし、汎列島的な「土師器」の多様性を見たとき（図A～F）、そのことが「土師器ではない」という理由にはならない。

芝原遺跡は弥生時代終末期から古墳時代中期初頭まで継続する拠点集落であり、「土器交流拠点」であり（久住 2014）、他地域の土器の搬入やB系統技法の在地土器様式への受容という現象があるが、「交流」があっても土器様式全体の外来系様式への変換はなされなかった。その伝統墨守が「成川式」の特徴でもあるが、それもやはり汎列島的には珍しくはない。また芝原遺跡では、外来系〔畿内系〕のB系統土器や、搬入の小型丸底土器などの精製土器、やはり搬入の布留系などだが、遺跡の一部に偏って出土するという現象を明確に指摘することはできない。むしろB系統技法土器が在地様式に受容されているように、混在しているようだ。おそらくこれらの土器を携えて搬入したり、技法を伝えた外人も混住ないしは一時的に在地の人々と混在して滞在したのだろう。なお芝原遺跡の「交流拠点」としての盛期は前期末（東原式古相）段階までであり、その前段階の中津野式／東原式移行様式段階（II C期～III A期古相）併行に最盛期がある。

一方、芝原遺跡で最盛期を過ぎた頃（ⅢA期新相併行）に現れる城山山頂遺跡では、「畿内系」土器群が集中的に出土した住居と、在来系土器群（東原式古相）が出土した住居群は明確に分かれているらしい（図13、中村2000）。これはまた背景が違う状況かもしれないが、まだその背景を分析し論ずるには資料不足である。ただしこの城山山頂遺跡段階は、小型丸底土器だけではなく、布留式系の脚部「屈折高杯」の波及と受容の開始という点でも画期となる段階である。実はこの時期の「屈折高杯」の波及と受容は、汎列島的な現象である（図C）。

さらにこの東原式段階（前期末～中期前葉）は、大隅の肝属平野地域で最大級の前方後円墳が築かれる時期でもある（唐仁大塚古墳）。同時に古墳群が多く展開する。肝属平野の場合は薩摩と異なり、隣接する日向経由の土器様相の「土師器」化がこの時期にみられるが（日向の在地土器の一部波及も伴う）、同じ時期に薩摩と大隅で同様の土器様式変化が始まることが注意される。

その次段階以降、東原式新相から辻堂原式古相（初期須恵器併行期）にかけて、「土師器」の特徴である「小型丸底土器」は在地的な器形様相を見せながらも、土器様式の中に確固とした位置を占めることになる（図E）。さらには、脚部屈折高杯などの布留系高杯も在地化が著しいが様式に受容される。他の器種は相変わらず「在地的」だが、この状況はやはり「土師器」の一角を占めるとするべきだろう。この時期のどこかで、日向南西部から大隅、薩摩北東部で、北部九州で成立した横穴式墓制の影響を受けた地下式横穴墓が成立し、展開する。これも、小型丸底土器の普遍化や、在地化した布留系高杯の受容と無関係ではないだろう。なお、この初期須恵器併行期に至っても、各地の「土師器」は、とくに壺についてはバラバラであることが注意される（図E・F）。一部には、朝鮮半島からの渡来人がもたらした「韓式系土器」を受容している集落さえ出現している。すなわち、ここでの「齊一性」は、やはり小型丸底土器と高杯・丸底壺に限られるのである。

以上、「成川式」の初期（中津野式）からその中期（辻堂原式）まで、「土師器化」していく様相を駆け足でみてきた。筆者の成川式の理解についてはまだ不足しており、地元研究者から見ると異なる理解もあるかもしれないが、他地域の「土師器」からの視点でみた「成川式」の理解の一つとして検討対象としていただければ幸いである。

引用・参考文献

- 赤坂次郎編 2002「考古資料大綱 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ」小学館
 池畠耕一 1980「成川式土器の細分編年式案」「鹿児島考古」第14号 鹿児島県考古学会
 市村慎太郎 2012「布留式と画期」「東生」第1号 東日本古墳確立期土器検討会
 甲斐康大 2009「奥山古墳出土土器の系譜とその背景」「薩摩加世田奥山古墳の研究」鹿児島大学総合研究博物館
 甲斐康大 2013「九州南部における古墳時代前期の地域間交流」「古墳時代の地域間交流Ⅰ」第16回九州前方後円墳研究会熊本大会
 鎌田浩平 2009「成川式土器の地域編年－薩摩半島側鹿児島湾沿岸とその周辺を対象にして－」「南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表遺跡記念論文集－」（中巻）南九州縄文研究会
 鎌田浩平 2014「薩摩半島西海岸側の地域編年に向けての基礎作業：壺・壺形土器を対象として」「新田栄治先生退職記念論文集」同記念事業会
 上村俊雄ほか 2000「東北・九州地域における古墳文化の受容と変容に関する比較研究」平成9年度～11年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 鹿児島大学法文学部考古学研究室
 亀田修一編 2003「考古資料大綱 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅲ」小学館
 河口貞徳ほか 1973「永山遺跡」吉松町教育委員会
 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIX
 久住猛雄 2013「九州における古式土器の地域間交流によせて～布留式中相併行期と小型丸底壺を中心に～」「古墳時代の地域間交流Ⅰ」第16回九州前方後円墳研究会熊本大会
 久住猛雄 2014「北部九州における古墳時代初頭前後の「土器交流」の実態とその背景」「特別展 大交流時代 鹿児島流域遺跡群と古墳出現前後の土器交流」安城市歴史博物館
 小林行雄 1935「小型丸底土器小考」「考古学」61 東京考古學會
 佐原 嘉 1975「農業の開始と階級社会の形成」「岩波講座日本歴史1 原始および古代1」岩波書店
 重藤輝行 2010「北部九州における古墳時代中期の土器編年」「古文化談義」第63集 九州古文化研究会
 関明恵・長野眞一・大久保浩二編 2013「アゼ原遺跡4」「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（178）鹿児島県立埋蔵文化財センター

- 田嶋明人 2008 「古墳確立期の広域編年…東日本を対象とした検討（その1）…」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2012 「古墳確立期の広域編年…東日本を対象とした検討（その5）…」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会
- 多々良友博 1981 「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 榎 佳克 2004 「人吉盆地における古墳時代の土器編年について」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会
- 榎 佳克 2011 「土師器の編年 ①九州」「古墳時代の考古学 I 古墳時代史の枠組み」同成社
- 常松幹雄 2007 「九州地方の土器」「考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ」小学館
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土器の編年と二、三の問題」「矢部跡遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 中園 啓 2011 「邪馬台国時代前後の南九州とその地域間関係」「邪馬台国時代の南九州と近畿」ふたかみ邪馬台国シンポジウム 11 香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」
- 中園 啓 2014 「邪馬台国時代の前後の南九州とその地域間関係」「邪馬台国時代のクニグニ 南九州」青垣出版
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」「鹿大考古」第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子 1997 「南限の古式土器」「人類史研究」第9号 人類史研究会
- 中村直子 2000 「九州南部における古墳時代の集落」「東北・九州地域における古墳文化の受容と変容に関する比較研究」鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子 2002 「薩摩・大隅」「古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－」第5回九州前方後円墳研究会
- 中村直子 2015 「鹿児島県域の台付甕と器台」「有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流」長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 西健一郎 2000 「地下式板石積石室墓起源論」「高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化」同記念論集刊行会
- 西健一郎 2002 「肥後から見た薩摩・弥生時代と古墳時代の墳墓から見る－」『鹿児島考古』第36号 鹿児島県考古学会
- 西村 歩 2008 「中河内地域の古式土器編年と諸問題」「邪馬台国時代の津波・河内・和泉と大和」ふたかみ邪馬台国シンポジウム 8 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 野田拓治 1982 「古式土器の成立と展開－特に中部九州における編年試案－」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」同記念論集刊行会
- 他園さやか 2015 「中津野式の甕」「七隈史学」第17号 七隈史学会
- 松山智宏 2002 「土器から見た出雲における前期古墳」「山陰の前期古墳」第30回山陰考古学研究集会資料集 山陰考古研究所
- 三好 玄 2013 「高環形土器における布留式土器定型化の様相」「古墳出現期土器研究」第1号 東日本古墳確立期土器検討会
- 吉本正典 1985 「中津野式」土器の検討」「鹿大考古」第3号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 米田敏幸 1990 「中河内の布留系土器群について」「考古学論集」第3集 考古学を学ぶ会

*道跡報告書の多くについては割愛した。

なお、図A～Fの同時期前後の各地の土師器を示した図に関しては、赤塚編2002、亀田編2003を主に参照し、また松山2002、西村2008、野田1982などを参考とした。併行関係については、とくに東日本については、田嶋2008・2012などの田嶋明人の一連の研究成果によるところが多く、従来言われている通説とは異なる。

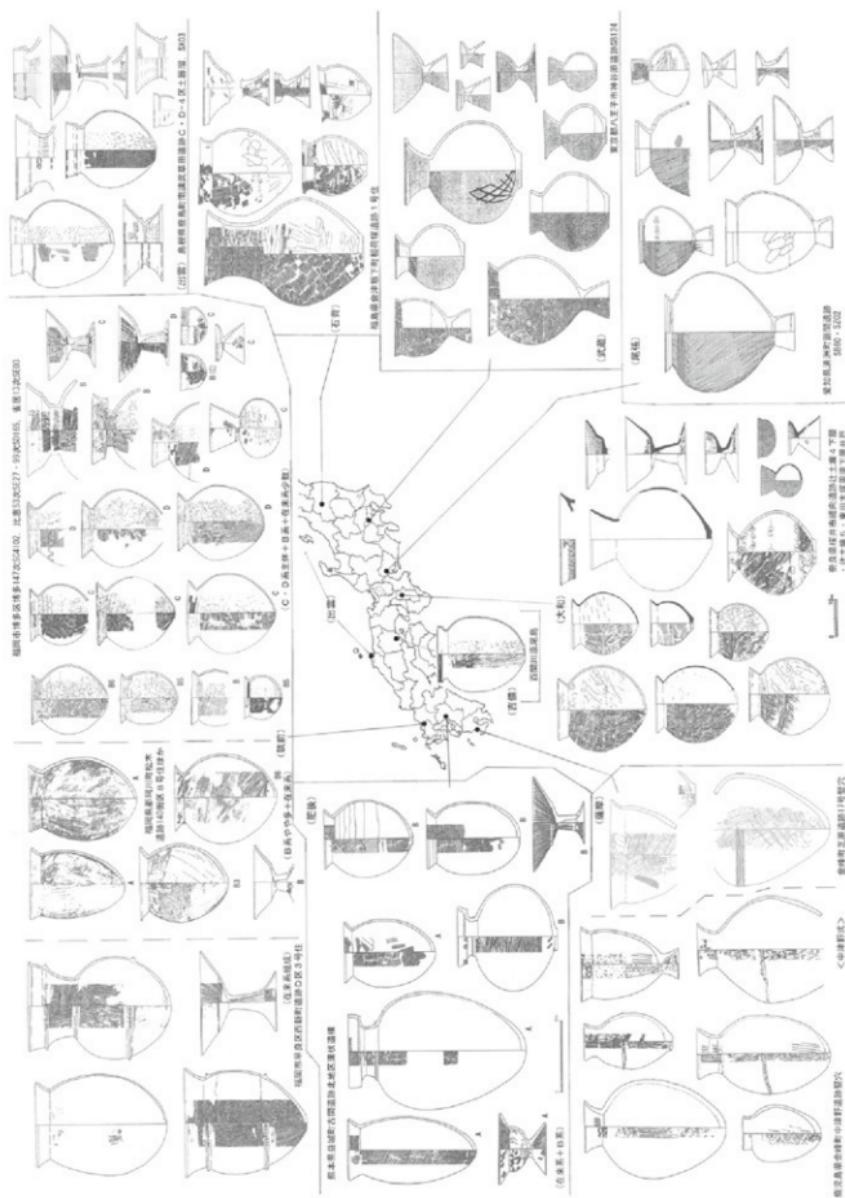
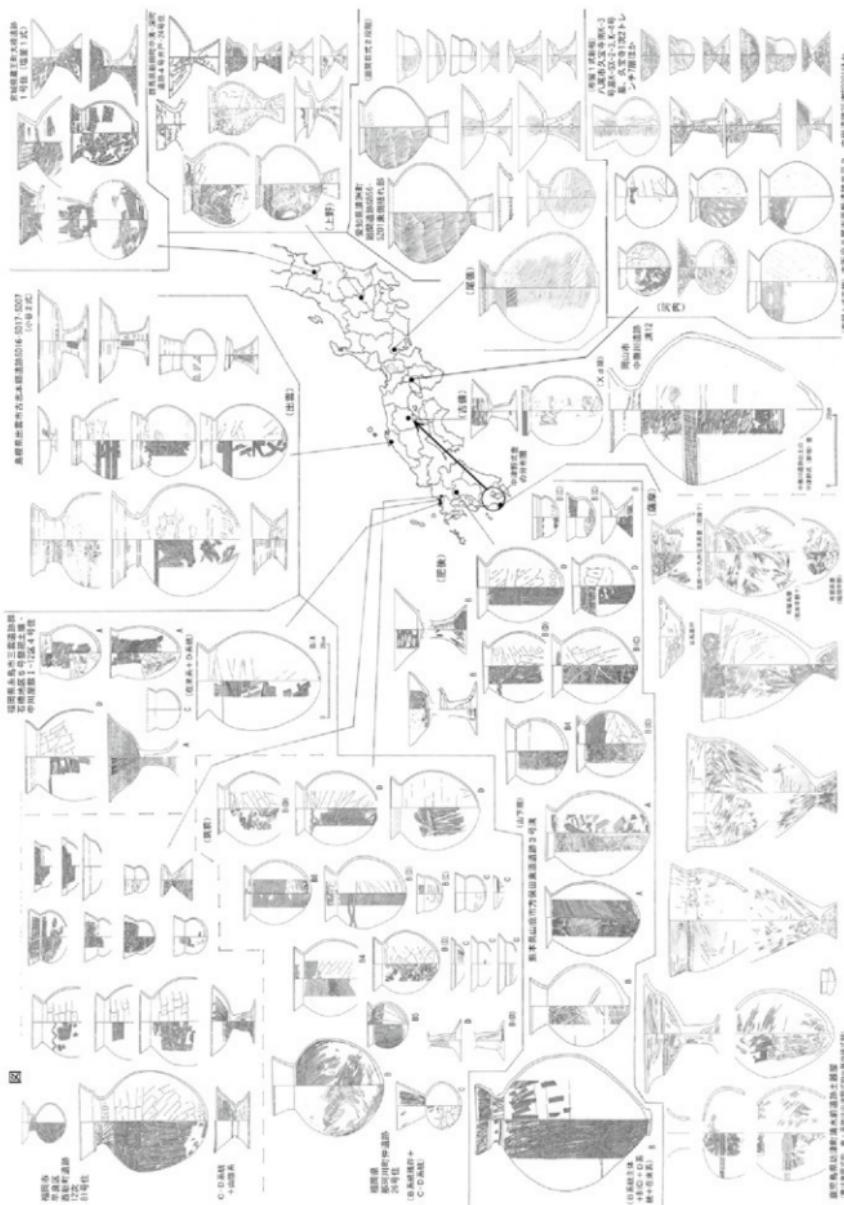
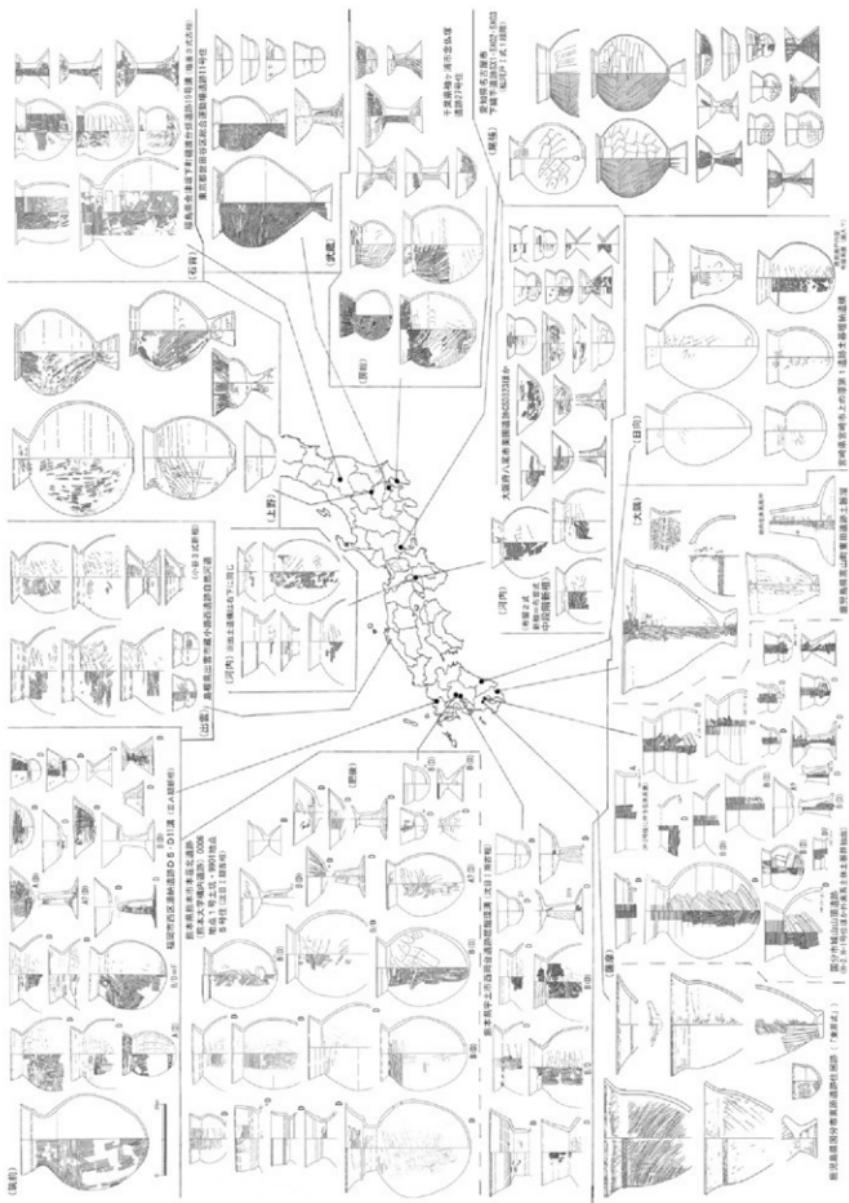


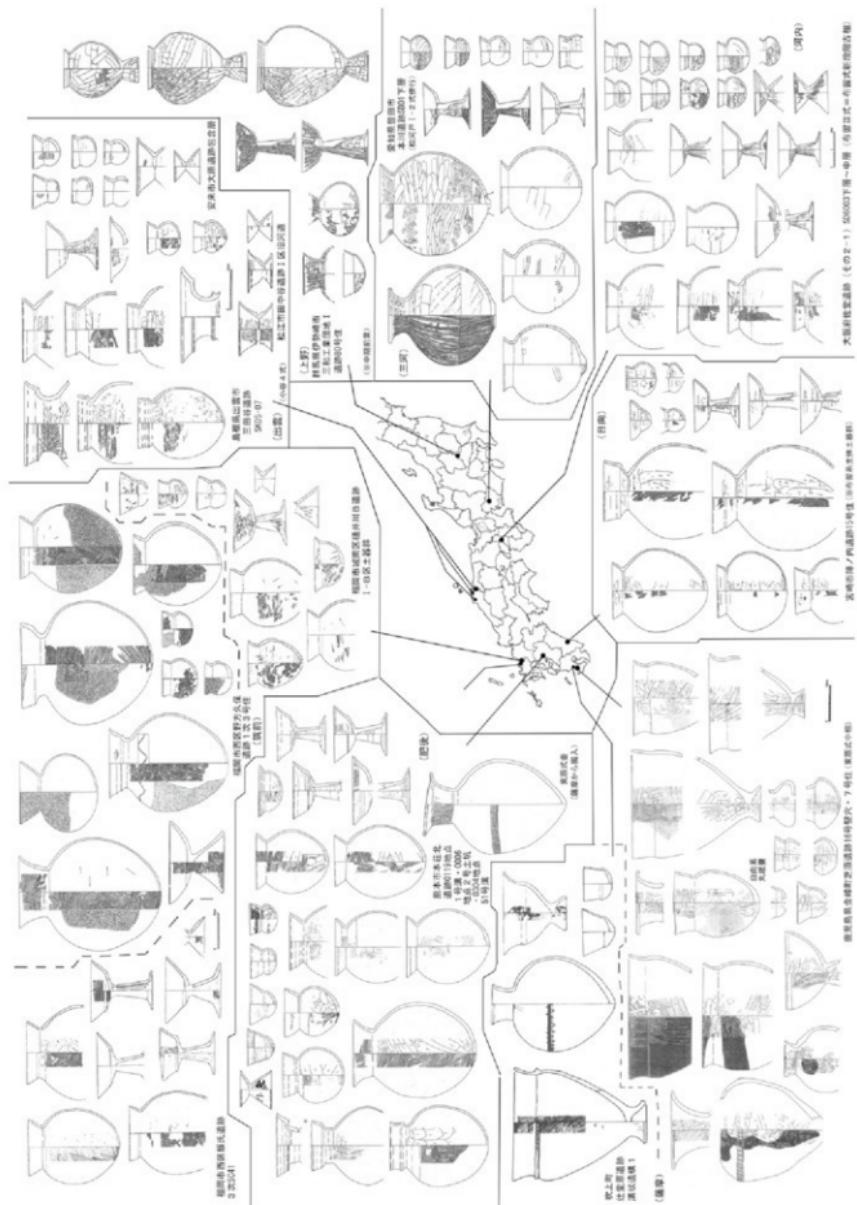
図 A 布留日式（北部九州用）併行間の各地の土師器

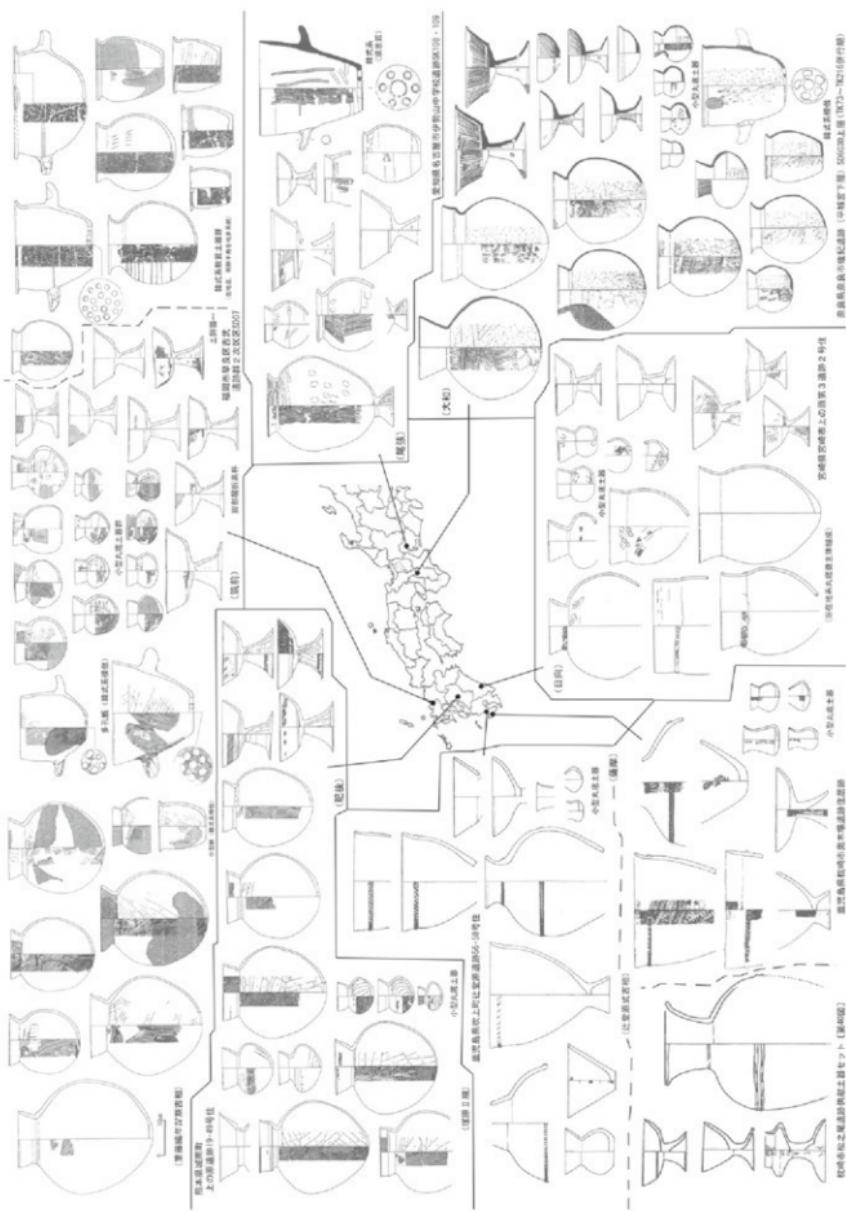


図目 布留1式(田中期)併行期の各地の土師器

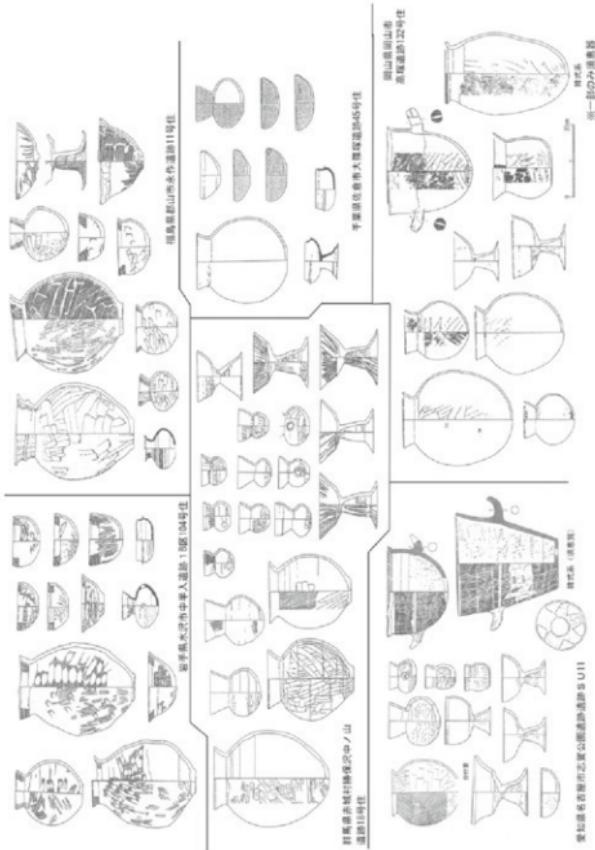


図C 古墳時代前期末（ⅢA期新相伴行）の各地の土師器





図三 5世紀前葉～中頃（初期須恵器併行期）の各地の土師器（1）



図E 5世紀前葉～中期（初期須恵器・井干期）の各地の土師器（2）

成川式土器と東北の弥生土器、土師器

辻 秀人

成川式土器を初めて見たのは、平成9年のことである。上村俊雄氏を研究代表者とする科学的研究費による共同研究「東北・九州地域における古墳文化の受容と変容に関する比較研究」で鹿児島大学所蔵資料を見学したときだった。大型の壺や台付鉢を中心とする成川式土器はとても異質な土器に見えた。中村直子氏の説明によれば弥生時代後期から古墳時代そして新しくは平安時代まで確認されているという。成川式は弥生土器なのか古墳時代の土師器なのか、平安時代に成川式が存続するのかなど疑問が多く、従来の土器研究の常識では計れない土器群という印象が強く残ったことを覚えている。

さて、東北地方では古墳時代土師器と弥生土器とは明瞭に識別できる。東北の弥生後期の土器は天王山式と呼ばれる。表面には特徴的な縄文が多用され、文様をもつ土器群で、縄文土器によく似ている。西日本の研究者には縄文土器との区別がつきにくい特徴的な土器群である。

古墳時代の土師器は東北南部に分布する。土師器は無文で、小型丸底鉢、器台など小型精製土器を含む土器群である。製作技術も異なり、土器の種類や構成もまったく弥生時代からのつながりを見いだせない。また、弥生後期の土器群と土師器と併存する例も知られていない。土師器の特徴、特に壺の製作技術と形態は、関東沿岸部中でも千葉県域の土器群にきわめてよく似ている。千葉県域では、畿内第V様式の外面にタキ痕跡を残す壺を受け入れ、やがて外面のタキがハケ調整に変化していく。西川修一氏によってY字壺と呼ばれる口縁部が「く」の字状に外反し器壁が厚い壺である。東北南部に分布する古墳時代前期の土師器「塙釜式」は千葉県域に分布す

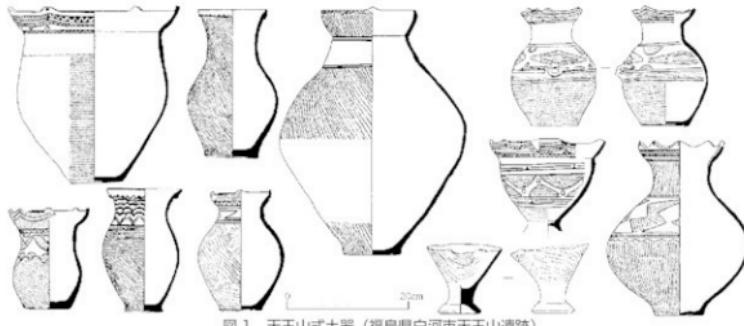


図1 天王山式土器（福島県白河市天王山遺跡）

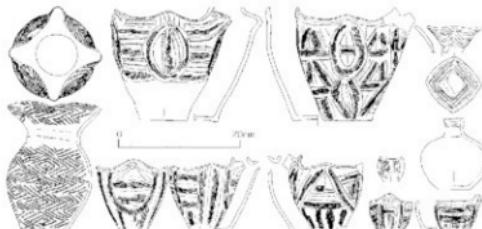


図2 縄文土器・後北 C2-D式（秋田県大仙市寒川II遺跡）



図3 塩釜式土器 古墳時代前期前葉（宮城県蔵王町大橋遺跡I号住居）



図4 塩釜式土器 古墳時代前期後葉（宮城県迫町佐沼城跡遺跡 SD105）

るYH甕と形、製作技術含めてわかるところはない。このような現象の背後に古墳時代初頭に東北地方南部沿岸地域に千葉県域からの集団移住があったものと考えている。その基盤は水稻農耕にあるのだろう。

一方、東北部では弥生後期の天王山式からその後続型式を経て続縄文土器へと変化する。続縄文文化は北海道を中心に分布し、狩猟、採集を生活の基盤とする。つまり、東北地方では弥生時代終末から古墳時代初めにかけて弥生社会が大きく転換し、南部は水稻農耕を基盤とする社会を形成し、北部は狩猟、採集を主生業とする続縄文文化へと転換する。この時期、東北地方には両者が併存し、その境界が出現したのである。この境界がその後の東北の歴史に大きな影響を与えることになる。

ところで、南九州の動向は東北地方とは対称的である。成川式の長時間にわたる変化の過程は近年の研究の成果でさらに明らかにされてきている。それによれば成川式土器は弥生後期以来時間とともに少しづつ変化しながら台付鉢、大型壺が存続し、古墳時代に地域の中で変容した土師器小型壺、器台など小型精製器種が共伴するという。このような事実は、成川式の分布する南九州では文化あるいはそれを営む人々の移動や交代ではなく、一貫して伝統的な生活を営む人々が古墳文化に同化することなく暮らしていたことを示している。南九州では強固な地域社会が形成され、古墳時代から古代にかけて維持されていたのだろう。これほど長期にわたって地域の伝統が保持される例を私は知らない。成川式はこの地域に存続した強固な地域社会によって生み出され続けた土器で、人々の暮らし方を物語る大変良好な資料と思われる。今後さらなる研究の進展によって地域の様相がさらに明らかにされることを期待したい。

図版出典

図1・3・4：比田井克人 2002「関東・東北地方南部の土器」「考古資料大観」第2巻 弥生・古墳時代土器II 小学館

図2：小林 克 1988『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I—寒川I遺跡・寒川II

遺跡—』秋田県埋蔵文化財センター

成川式土器と前方後円墳

広瀬和雄

1 成川式土器との出逢い

波打つ口縁部、ぶ厚い器壁、壺や甕や鉢に貼りつけられた突帯、そこに付けられた刺突文や刻み目。甕や鉢などの内面にこされた輪積み痕、数カ所についた黒斑。いかにも特徴的な成川式土器。強力なインパクトを与えてくれる土器群だ。

2015年1月、霧島市国分の「鹿児島県上野原繩文の森」の講演に招かれた際、その前日、鹿児島大学に立ち寄った。橋本達也さんが発掘調査された岡崎古墳群など、大隅地域の前方後円墳から出土した須恵器を観察するためである。鹿児島大学総合研究博物館に案内されて、ガラスケースのなかの成川式土器を見たときの印象である。

須恵器の杯などもいっしょに展示されていたので、それらが古墳時代の産物であるということはわかったが、とにかく変わった土器群としかみえなかった。「何じゃこれは。けったいな土器や。しかし、面白いなあ」と、感嘆の関西弁オーバーレードだった。あたかも、研修センターで訓練を受けて生産されたかのような斉一度の高い須恵器。それにくらべて、土師器は在地的な色彩をいっそう濃厚にもつ。それが各地でみられる古墳時代の日常土器を特色づけるのは理解していたが、「それにしても…」というのが率直な感じだった。

南九州の一画、大隅地域では、塚崎古墳群で前期の前方後円墳がつくられているし、中期になると唐仁大塚古墳や横瀬古墳といった大型の前方後円墳をはじめ、多数の円墳や地下式横穴墓が営まれる。さらに、大阪府南部の陶邑窯で製作された大甕なども、岡崎古墳群などにもたらされている。それだけに、成川式土器の強力な地域的色彩とのギャップに驚嘆した。そこには前方後円墳に代表される政治と、成川式土器を使った日常生活の、いわば経済との相関性が秘められている。そう思った。

ひと昔も前のことになる。大阪府教育委員会で埋蔵文化財の発掘調査に携わっていたとき、6世紀代を中心とした集落遺跡の大園遺跡や7世紀の觀音寺遺跡など、大阪府南部の和泉地域で古墳時代の土器を日常的に掘り出していた。そこでは須恵器が圧倒的に多かった。河内地域のはさみ山遺跡や土師の里遺跡などの土器もたくさん見たが、土師器が卓越していた。いずれにせよ、形や大きさや文様、つくりかたや色あいや質感、全体としての斉一度の低さなど、それらにくらべて成川式土器には大いなる違和感をもつたのである。

2 伝統を踏襲した成川式甕

弥生時代後期から古墳時代にかけて、鹿児島県を中心にした南九州地方で消費された土器群、それが成川式土器と総称されている。中村直子さんの研究（中村 1987、2009）で、高付式、松木圓式、中津野式、東原式、辻堂原式、釜貫式の土器様式が設定され、その変遷などが明らかになっている。中津野式は「畿内第V様式の比較的新しい段階から庄内式に」、東原式は「布留式に」それぞれ併行し、辻堂原式は「陶邑編年I型式とかなりの時間を共有し」、釜貫式は7～8世紀までつづくとされている。

弥生土器の特徴がつよく残った土器群。甕と壺にきわめて色濃い地域色をみせる成川式土器。橋本達也さんは「成川式土器と呼ぶ鹿児島県域を中心に分布する様式は弥生土器以来の系譜を墨守し、古墳時代を通して土師器とは異なる独自性を有している」（橋本 2011）と述べている。ここではさほど多くはないが、それなりに須恵器が共伴していて、時期が判定しやすい5～6世紀の土器群を対象に、大阪府南部・和泉地域の土器群とくらべながら二、三の問題を考えてみよう。

この時期の成川式土器は壺、甕、高杯が基本的な器種で、それらに壺や鉢などがともなう。須恵器の杯や甕や高杯なども一部では共伴するがさほど多くはなく、日常的に使われたとはみなしがたい。

成川式土器の代名詞のような甕。底部から胴部、そして口縁部にかけて、くびれずに外方にひろがるバケツ形の胴部に、しっかりとふんばる中空の脚台がつく。けってシャープとは言いがたい、この甕が主体をなす。それに加えて、脚台がつかない丸底で、やや縦長の丸い胴部に外反する口縁部が付き、く字形を呈する甕も共存し

ている。前者を脚台甕、後者を丸底甕とよぶ。

脚台甕はほぼ例外なく、口縁部のやや下方に刻みをほどこした突帯を一条めぐらす。かならずしも水平に回続するとはかぎらない突帯で、一周しながら奇妙なことに始まりと終わりとが「すれ違って」連結しない。ことさら、一致させていない。一見、無造作にみえる突帯である。それにたいして、丸底甕は突帯や文様はほどこさない。これこそが汎列島的ともいるべき甕の属性だが、脚台甕が丸底甕に駆逐されることはない。こうした脚台甕の装飾は古墳時代全般の長期におよび、その過程での大きな変化は認めがたい。あたかも南九州の生活品の約束ごとであったのか、永く伝統が保たれている。そこにつよい愛着をみたり、外来や新規のものにたいする排他的感情を読みとるもの一計ではある。

煮炊き用土器が使われた古墳時代の火どころには炉と竈があって、5世紀になると竈が普及するところが多い。ところが南九州には導入されていない。発掘調査された南九州の5~6世紀の堅穴建物は、おおむね3~5m四方の方形プランで、中央に炉を設置するのが普通である。左右両横と後ろの三方を土壁で囲まれた竈は、燃やされた木々の熱が外には逃げずに、上部にかけられた甕に効果的に吸収される。熱効率のいい火どころといえる。いっぽう、火熱がその周囲に拡散してしまう炉は、竈にくらべると熱効率はよくない。そうはいっても、夜になると室内の明かりになるというメリットはあるし、冬場になれば暖房の効果も出てくる。もっとも夏は暑くて仕方がないだろうが…

丸底甕だと、ひっくり返らないように小石などで底部を支えねばならないが、脚台甕（平底甕）は自立するので安定している。双方とも外面にススが付着しているので、煮炊きする対象によって使い分けていたのであろう

か。炉では安定して使える脚台甕だけでいいのでは、と思うけれども、底部の形状が違う甕の併用が事実である。鹿児島県日置市尾ヶ原遺跡のおなじ堅穴建物から脚台甕と丸底甕が出土した場合の比率は、6世紀中頃の2号堅穴建物は脚台甕が丸底甕よりも多いが、5世紀末頃の3号堅穴建物はその逆で、丸底甕が脚台甕を凌駕している（図1・鹿児島県立2006）。

甕について気になるのが、形と大きさに見られるバラツキである。たとえば、鹿児島県金峰町白糸原遺跡の堅穴住居跡16号（5世紀後半頃）から出土した甕の底部には、脚台、上げ底状、平底、丸底の4種類の形状がみられる。口縁部もまっすぐ外方に折がる、やや内傾する、内湾する、く字状など、多彩である。口径は18cmほどの小型品から、30cmほどと結構な容量のものまである（図2上段・鹿児島県立2005）。

このような成川式の甕にたいして、大阪南部の和泉では5~6世紀の土師器甕は齊一的な様相を見せていている。おおむね、丸底で縦長

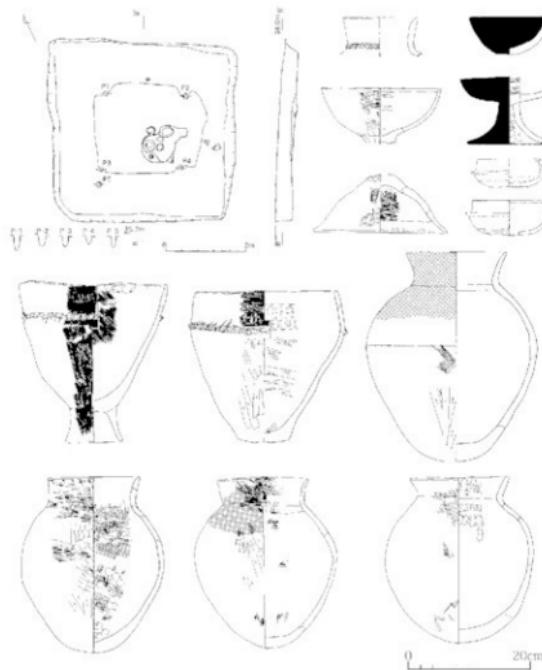


図1 南さつま市金峰町尾ヶ原遺跡3号堅穴建物と出土土器

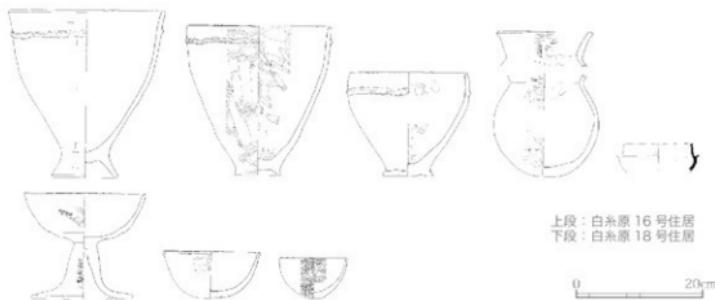


図2 南さつま市金峰町白糸原遺跡の壺と高杯・鉢

の丸い胴部に外反する口縁部がつくものに限られる。体部の器壁は薄く、内面は丁寧になでてつくり、外面はハケでなめらかに仕上げる。成川式壺のように形や法量にさほどの相違がみられない。どちらかといえば、個性というものを超越した機能的な製品、なかば「商品」化したかのような規格的な壺といっても過言ではない。その差は一目瞭然である。

成川式の壺はどこでつくられたのか。脚台壺の個体ごとのバラツキは、個々の集落でつくられた、あるいは複数の工房で製作された事情を想像させる。そうだとすれば、ほぼ例外なく文様帶をめぐらすという共通性は、いったい何を意味するのか。土器づくりの慣習として定着していた理由は奈辺にあるのか。無意識裡にそれが付けられつけられたのか。そうではなく積極的な意味をもたせて、こうした行為に南九州の民衆のアイデンティティを読みとるのか。その場合、成川式土器を共有する地域の人びとをつなぐ紐帶はなにであったのか。文化圏といえばそれまでだが、それを形づくった要因の究明がこれからの課題となる。「たかが土器、されど土器」である。それにしても、すべての壺を個々の集団が自給していたとみるのであれば、それこそ伝統的な脚台壺と他地域との類似性をみせる丸底壺との差異は何に基因するのか。たくさんの疑問が生じてきた。研究課題は多い。

3 成川式土器の変遷と流通

脚台壺とおなじように壺も十分に個性的だ。上方に最大径をもった綫長で丸い胴部に、外反する口縁部が付く。頸部や胴部の最大径付近に、刻みや刺突のはどころされた幅の広い突帯がめぐる。二条や三条のものも目に付くが、いずれにせよ素朴な文様帶である。ただ、こちらは脚台壺と違って丸底か、小さな平底で、大・中・小型といろいろな大きさがある。これらはおおむね液体や穀物などを貯蔵するための容器だが、和泉地域ではその機能は須恵器の壺・甕が担っていて、成川式のような土器大壺は存在しない。

大隅地域の集落からは須恵器大壺はほとんど見つかっていないが、大阪府の陶邑窯や愛媛県の市場南組窯からもたらされた高さ90cmもの須恵器大壺が、前方後円墳や円墳の祭式には用いられている。樽形甕や杯や高杯など、須恵器供献は顕著である。須恵器をふんだんに用いた古墳祭式への直接参加はなかったにせよ、近隣地域の民衆が古墳造営に駆り出されなかつたはずはなかろう。遠隔地からの須恵器の運搬にかかわった人びともいたことだろう。彼らが神人共食のための容器という、須恵器の果たした役割を知らなかつたはずはないだろうが、須恵器にたいする価値意識はさほどは高くはないようみえる。

成川式土器とともに須恵器の杯や甕が、堅穴建物から出土するがきわめて少なくて、生活の容器として普及していたとは考えがたい。5～6世紀の南九州では須恵器生産がまだ実施されていないので、生活レベルまでは他地域からの流通が届かなかつたのであろう。須恵器を模倣した土器もあるが稀少品だ。しかも、土器杯の形態には大きな影響を与えてはいない。そこに土器工人の、ひいてはこの地域の民衆の自主性や自律性、あるいは排他性をみてとることができそうだ。ちなみに、東国では5世紀後半ごろに須恵器杯蓋を模倣した土器杯がつくられ、6～7世紀をつうじて食器として普及している。

そうしたなか注意をひくのは、古墳時代になって在地的な個性を強烈に發揮した脚台壺や壺とは断線したかのような、いわば異次元のようなありかたをしめす高杯である。圓化するとあたかもまっすぐな口縁部に見えそうだが、実際は波打つような脚台壺や鉢などと異なって、総じて高杯はつくりが丁寧である。あまり深くない杯部に、中空で外方にひろがる脚部がつき、丹塗りをしてからミガキ整形をほどこす。弥生時代から連綿とづく系譜の高杯だが、杯部と脚部が途中で稜をもって屈曲するものから、ゆるやかに彎曲するものへという変化は、畿内地域をはじめ広い地域とも連動している。けっして、脚台壺や壺のような他地域とは没交渉の、「孤高」の形式というわけではない。

5～6世紀の高杯の法量はそこそこ揃っている。そして、一人ひとりの専用の食器、いわゆる銘々器とみていはほどの量は出ている。すなわち、この時期の食器のメインは土師器の高杯で、一部に土師器の杯や鉢が加わる。ちなみに、金峰町白糸原遺跡の堅穴住居跡 18 号からは、多量の土師器の高杯とほぼ同数の鉢（杯）が出土している（図2下段・鹿児島県立 2005）。食器の一画を構成しているようだが、これなどは少数派である。また、須恵器の杯も少し出ているが、土師器の高杯を駆逐するほど大量には持ち込まれてはいない。

このようにみてくると、5～6世紀の成川式土器はふたつの土器群で成り立っていることが理解される。A群は伝統的な色合いがきわめて濃厚な脚台壺と壺と一部の鉢。B群は他の地域と広域連動したかのような高杯や丸底壺や鉢である。

渾然一体の感じさえ与える A 群土器と B 群土器は、やはり生産された場所が違うと考えられる。A群が集落ごと、もしくは多数の箇所での製作が想定されるにたいして、B群は特定の工房で多量生産されていた可能性が高い。そうだとすれば、南九州における各集落の生活容器は、自家生産もしくは近隣から供給された A 群土器と、なれば専業工房で生産され、広範囲に流通した B 群土器とで構成されていたことになる。

ここで和泉地域の5～6世紀の日常土器をみておこう。たとえば、大阪府和泉市・高石市大園遺跡での6世紀後半～末頃の「土器溜まり」と「溝 SD317」での計測によると、須恵器と土師器の比率は 83:17 である。圧倒的に須恵器が多い。なかでも、杯や高杯などの食器と壺や壺といった貯蔵容器は須恵器が占めている。前代に主流であった土師器の高杯や杯は、この時期にはもはや姿を消している。食器では高杯 1 個にたいして杯・杯蓋 6.6 個の割合だから、高杯は銘々器でなかった可能性も否めない。長頸壺・短頸壺・台付椀などは杯 14 個にたいして 1 個の割合なので、それらが各自の食膳を賄ふではないのは確実である。堅穴建物 1 棟で食膳をともにした家族（世帯）につき 1 セットくらいの程度である（広瀬 1981）。

ちなみに、おなじ時期でも南河内の集落での食器は、土師器の杯・高杯・椀・皿などが中心で、陶邑窯から少し離れているせいか須恵器の杯や高杯はすこぶる少ない。それだけではない。ここでは壺、瓶、土釜、鍋、壺、鉢といったふうに豊富な土師器の器種が消費されていて、近距離とはいながらも大園遺跡とは顕著な差異をしめしている。古墳時代の日常土器の流通圏は意外と狭い。

和泉地域に戻って、大園遺跡での煮沸容器は例外なく土師器の壺である。したがって、ここでは食器と貯蔵容器は須恵器、煮沸には土師器というふうに、須恵器と土師器が機能で整然と皎別されていたわけだ。それらすべてが土師器でまかなわれていた南九州とは、生活様式が異なっていた。

幅 2 m 前後、長さ 10m 前後の長大な半地下水式の穴窯で高温に焼成された須恵器は、古墳時代から平安時代にかけて、陶邑窯で専業的に生産されつけた。いっぽう、土師器の生産地はよくわかっていないが、南九州の B 群土器とおなじく、どこかの専業工房で製作されていたのは動かない。各地に分散して居住していた和泉や南河内の農民層などの民衆が、これら陶邑窯と土師器工房のそれぞれに出向いて、須恵器と土師器を入手していたとは考えにくい。集落遺跡からは廃棄された須恵器・土師器が多量に出土することからみても、これらの土器は一度、入手すれば数十年もの長期にわたって使用できるものではないことがわかる。壊れやすいから結構、頻繁に「購入」しなければならないのである。

異なる複数の工房で製作された須恵器と土師器が、どこかにあったマーケットに集積され、そこを経由して消費地に持ち込まれた。個々の集落の日常土器は、複数の生産地からもたらされるのが古墳時代では一般的であったようだ。南九州でも須恵器や土師器 B 群の高杯といった食器は、形や法量や製作技法が揃っている。規格化された製品が大量生産され、それを消費する文化があったわけだ。

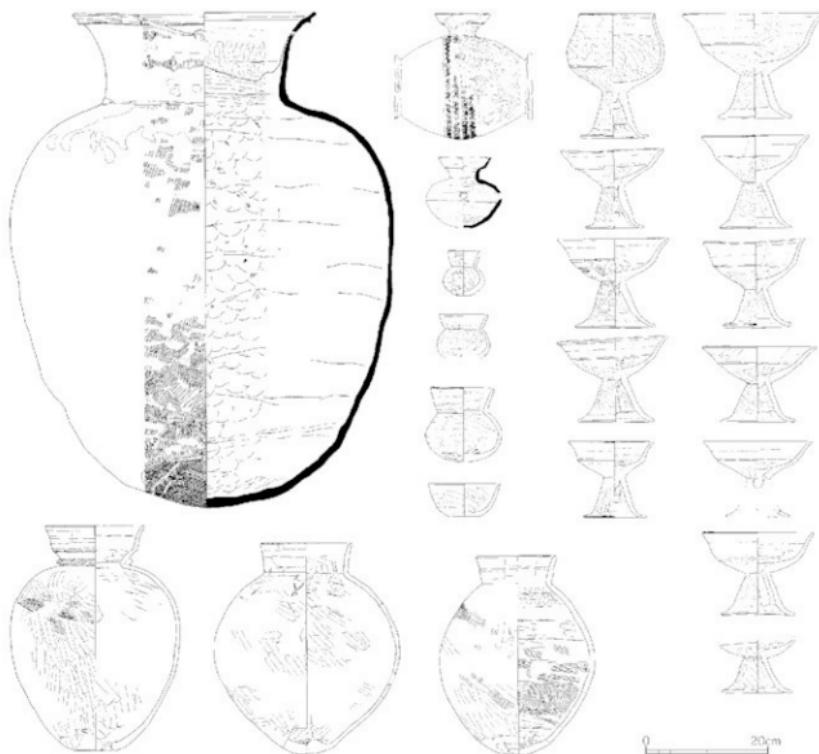


図3 鹿屋市岡崎18号墳 出出土器

4 古墳の供獻土器と成川式土器

鹿児島県大隅半島、志布志湾の沿岸地域には、たくさんの前方後円墳や円墳が造営され、そこからは多彩な須恵器や土師器が出土している。塙崎18号墳からは土師器の小形丸底土器や器台など、岡崎20号墳からは二重口縁壺など、岡崎18号墳では須恵器の大甕や樽形甕などとともに、土師器の壺、高杯、台付短頸壺などが、神領10号墳では多量の須恵器杯、高杯、甕、器台、壺、甕などと多量の土師器が、上小原4号墳でも須恵器の樽形甕、椀、甕などがそれぞれ出土している（図3）。

墳丘の裾でのにがしかの儀礼に使われた、須恵器や土師器は供獻土器とよばれる。少数の須恵器甕や土師器壺など液体一酒であろうか—を貯蔵した容器と、多数の須恵器杯・高杯や土師器高杯など飲食のための食器、それに液体を注ぐ樽形甕や甕という組合せが基本形である。土師器の甕は見あたらないので、儀式的行程で煮炊きはされなかったようだ。他所で調理された食物や酒などが、大甕などで墳丘の裾に持ち込まれ、杯や高杯に盛って飲食されたと推測される。亡き首長の葬儀に際して、饗宴がなされたようである。

新しい首長や、彼を支える有力者たちの共飲共食儀礼が終わった後、飲食に使用された須恵器や土師器は、そのまま墳丘の裾などに放置された。須恵器の大甕などは、わざわざ口縁部や胴部を打ち欠いて使用不可にしている。日常生活の容器が繰り返して使われつづけたのにたいして、こうした儀式で用いられる土器は一回かぎりであった。

いったい、墳丘の裾での共飲共食儀礼とは何なのか。そこには前方後円墳とはなにか、の問い合わせたい手がある。詳しくは省くが、前方後円墳での祭祀はく亡き首長がカミと化して共同体の繁栄を保証する>という共同観念に基づく、というのが私の意見である（広瀬 2003）。首長の権威を表わす戚信財、防衛のための武器・武具などの権力財、さらには食料確保のための生産財が遺骸に副葬された。これら共同体を再生産させるための道具類を駆使して、共同体の安寧を保証する超越的存在であるカミに首長は昇華した、と観念された。そうした祭祀の場が前方後円墳である、というわけだ。もっとも、死した首長がそのままカミにはなるわけではない。4世紀後半以降、朝鮮半島への航海安全を海のカミに祈った国家的祭祀、福岡県沖ノ島の祭儀に象徴されるように、古墳時代のカミは海上や山上などに浮遊する、と認識されていた。したがって、外部のカミを勧請し、墳頂部に埋葬された亡き首長の遺骸に憑依させねばならない。それにはいくつかのプロセスがあったが、前方後円墳などの造り出しやくびれ部裾での儀礼もそのひとつである。

4世紀末から5世紀にかけて、前方後円墳などの造り出しにならべられた形象埴輪群が、前方後円墳祭祀を解くヒントを与えてくれる。それは4つのカテゴリーにわけられる。A類はカミを運搬してきた船や、先導した水鳥の埴輪。B類はカミがとどまるための建物や、貴人がいることをしめす蓋の埴輪。C類は聖水儀礼の導水施設とそれを囲む壠の埴輪。D類は儀式空間を辟邪した叔や盾の埴輪。これらに須恵器・土師器が加わった儀式は、次のように復元される。「船で運ばれたり、水鳥に先導されたりして、はるか彼方からやってきたカミが、墳丘の裾で、次代の首長らと神人共食儀礼をおこなってから、墳頂部へ登っていく」。もっともこうした前方後円墳祭祀の理解度は、個々の古墳儀礼を見るかぎり、各地の首長層によってバラツキがあったようだが…

ここで重要なのは、大隅地域の前方後円墳や円墳には、突帯をめぐらせた壺・甕は供献されていない事実である。農民層が普段の生活に使用していた成川式土器は、墳裾での祭儀にはいっさい登場していない。地元の民衆が煮炊きや飲食に使っていた土器では、神人共食儀礼は成立しなかったのである。在地土器では「ご利益」がなかったのか、それとも効果が薄い、と意識されていたのか。在地民の前方後円墳祭祀への参画度は低いとみなざるを得ない。排除されていたのかどうかは判然とはしないけれども、少なくとも主体的な関与はしていない。それにたいして、供獻土器の中心を占めたのは、遠隔地の陶邑窯などから搬入された須恵器や、在地色の希薄な土師器であった。大いなる「ご利益」をもたらしたのは、中央性を身にまとめて持ち運ばれた須恵器なのである。

さて、前に述べた前方後円墳祭祀の「共同体の安寧をもたらす」といった場合の共同体には、次のふたつが重層していた。第一は、首長と民衆=農民層のほかに海民や手工業民も含むで形づくられた農耕共同体。第二は、首長と首長で形成された支配共同体、つまり首長層。北海道・東北北部と沖縄諸島を除く各地で造営された、<共通性と階層性を見せる墳墓>である前方後円墳は、広域におよぶ首長同士のくわれわれ意識>を表出していた。同一の政治的社会に帰属しているという共同の意識を表明していたのである。

ふたつの共同体の安寧を願った共同観念が前方後円墳祭祀だが、そこに供された土器をみるかぎり、農耕共同体的側面よりも支配共同体的側面のほうが前面に押し出されている。たとえば、岡崎18号墳の須恵器大甕は、大阪府陶邑産のものと產地不明の窯のもので、ともに遠隔地から運ばれてきた製品である（橋本・藤井・甲斐2008）。口径39.2cm、高さ81cmもの巨大な甕が、船形埴輪にみられるような小さな船に乗せて、はるか遠方から運ばれてきたわけだ。陶邑窯だと直線距離でも550kmほどに達する遠路を、壊れやすい焼き物が運搬されてきたのである。これなどはまさしく、中央政権と地方首長の政治秩序を維持するための象徴的な営為であった。いいかえれば、それは南九州首長層が所属した支配共同体、その再生産を根幹にした前方後円墳祭祀に基づくのである。

このような土器を用いた祭式は、墳丘の形態やつくりかた、埋葬施設の種類や構造、副葬品の組合せなどとともに、古墳様式の一環として組み込まれていたのである。器種組成などにも一定の約束ごとがあったようだ。もちろん、実際の古墳をみるとその幅はかなり大きいように見えるが、基本的なところでは大きな逸脱はない。

5 大隅の前方後円墳と南九州の社会

成川式土器が分布する鹿児島県でも、前方後円墳や円墳などが築造された大隅地域と、前方後円墳がつくられなかった薩摩地域とでは、古墳時代の様相は大きく違っている（本節の古墳内容の多くは橋本・藤井・甲斐編2008などに負っている）。とにかく古墳時代中期の大隅地域は、日本列島のなかでもすこぶる特徴的な地域なの

である。古墳時代を前期（3世紀中ごろ～4世紀後半）、中期（4世紀末ごろ～5世紀後半ごろ）、後期（5世紀末ごろ～7世紀初頭）にわけて、その動向にふれておこう。

古墳時代前期には、塚崎古墳群で前方後円墳が5基造営されている。最大は39号墳で、墳丘の長さ（以下、墳長）は66.5mである。前期をつうじて、一代一墳的に累代的に造営された、ひとつの系譜をなす首長墓が當まれたようである。社会は階層化していたわけだ。

前期末から中期にかけて事態は一変する。一気に前方後円墳がたくさん築造される。志布志湾を眼下におさめた墳長約80mの飯盛山古墳。ここには4世紀末ごろの壺形埴輪がならべられていた。ほほおなじ頃の刳り抜き式の変形長持形石棺をもち、長方板革綴短甲が副葬された墳長154mの唐仁大塚古墳。前方部が低くて平らな、いわゆる柄鏡式の前方後円墳である。それにくらべて、前方部が高くつくられた墳長約140mの前方後円墳、横瀬古墳。「横瀬砂州」に立地し、5世紀前半ごろに築造されたときは海に備容に向けていた。朝鮮半島の陶質土器が出土したことでも注目されている。これら3基の大型前方後円墳は、海運を意識した海浜型前方後円墳である。そこから、海上交通を掌握した首長の像と、「もの」と人の往来をつうじた首長ネットワークをイメージするのはさほど難しくない（かながわ2015）。

このほか、前方後円墳をふくむ古墳群が4ヶ所ある。

第一、前方後円墳5基、円墳133基からなる唐仁古墳群。唐仁大塚古墳を盟主墳とした、この地域では文句なしに最大の古墳群である。墳長57mの100号墳、墳長約44mの16号墳などが、唐仁大塚古墳につづく首長墓の可能性があつて、3、4代におよぶ4～5世紀の首長墓系譜が連れそつである。ここでは前方後円墳を築造した一人の首長と、小型の円墳をつくった多数の中間層が、共同墓域のなかで親縁的な一体性を一定期間あらわしつづけたのである。

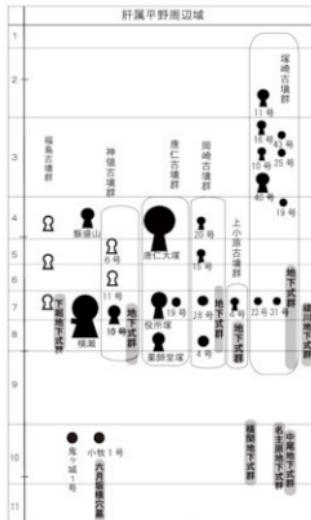
第二、20基で構成される岡崎古墳群。墳長26mの帆立貝形前方後円墳の15号墳には、長方板革綴短甲や三角板革綴角付冑などが副葬されている。直径約19mの円墳である18号墳は、鉄錠や鉄製武器などを副葬した地下式横穴墓を3基ともなっていた。中央・地方の政治秩序をあらわした円墳と、在地的な墓制の地下式横穴墓との一体的結びつきの解明が、これから研究テーマに浮上してくる興味深い古墳群である。

第三、前方後円墳4基、円墳9基の神領古墳群。墳長54mの前方後円墳の10号墳には、初期の事例に属する盾持有人の埴輪などが立てられ、舟形石棺を囲んだ砾礫の東側には三角板革綴短甲、衝角付冑、頭甲、肩甲、龍手、金銅装胡蝶、鐵剣などが置かれていた。ここでも周溝に地下式横穴墓が設けられている。

第四、前方後円墳1基、円墳約20基の上小原古墳群。墳長27mの前方後円墳の4号墳からは、5世紀前半ごろの陶邑産須恵器の博形埴輪のほか埴輪や椀が出土している。この古墳もそうだが、大隅地域の前方後円墳や地下式横穴墓は、やたらと鉄製武器・武具の副葬や初期須恵器の供獻が目にとまる。いいかえれば、中央的な色彩がつよいのである。

前期には首長墓系譜が塚崎古墳群のひとつしかないので、前期末から中期初頭になると、数え方にもよるが5～6系譜の首長墓が併存する。これはどうみても尋常ではない。「前期から中期にかけて前方後円墳は発達する」との通説がなんとなく信じられがちだが、実際のところはそうではない。古墳時代の中央の畿内を除く日本列島各地では、前期から中期にかけて、前方後円墳などの首長墓は確実に減少する。それも急激に。大隅地域のような増え方をするところは、どこにも見あたらない。しかも、ここでは前方後円墳は大型のものが目に付くし、陶邑産の須恵器や武器・武具などが顕著で、地方首長の自発的な動向とは簡単に片づけられない。

しかしながら、そのような「繁榮」ぶりはたかだか半世紀しかつづかない。中期でもその後半になると、前方後円墳の命脈は途絶えてしまう。そして、6～7世紀にはほとんど存在しない。いったい、なんだというのであ



ろうか。前方後円墳の急増と一氣の消滅。前期から中期への「飛躍」と、中期と後期の「断絶」。きわめて「不自然な」動きが大隅地域の最大の特徴である。そこには「前方後円墳とはなにか」や「古墳時代の特質はなにか」というような本質的な問い合わせが秘められている。紙数の都合でいまは不間に付さざるを得ないが、成川式土器との関連でもうひとつ、指摘しておきたいことがある。

前方後円墳は多数の円墳や地下式横穴墓を随伴させるという事実である。すなはち首長層と多数の中間層と首長層でもない、といって民衆でもない人びとが、共同の墓域で集団的な一体性と階層性を表出しているのだが、それはともかく大隅地域では200基近くある円墳の多くが中期につくられているようだ。おなじ頃の地下式横穴墓も実数がつかみにくいが、判明しているだけでも30数基はあって、これも中期が中心だ。個々の中間層がそれぞれ3~4代にわたって円墳をつくったとみなすと、大隅地域には50とか60とかの数の中間層がいたことになる。それを有力家族層みると、古墳時代の家族は20~30人ぐらいからなる複合家族だと想定されるので、それだけで1000~1800人の人口が試算できる。さらに、地下式横穴墓をつくった人びとも加えねばならない(基數が判明しないので省略しているからもっと増える)。もちろん、古墳造営などに携わった一般家族層が、有力家族層よりも大勢いたと推測されるから、5世紀の大隅地域は結構な人口になりそうである。それだけの人びとの食料をまかなう生産基盤を、水田稲作に不向きな大隅地域のシラス台地に求めるのは無理がある。

4世紀末ごろに中央政権の政治的な意図にしたがって、首長に率いられて多数の人びとがこの地に移住してきた(させられた)。大きな外圧がこの地域に画期的な変動をもたらした蓋然性が高い。もしそうだとすれば、大勢の人びとの生活物資の多くは薩摩地域や近隣の地域から供給されたり、いきおい交流も頻繁になったであろう。こうした諸地域の相互作用が、人びとの生活に大きな影響を及ぼしたと想像されるが、はたして成川式土器のありかたをとおして、そのような動静を読みとくことができるのか…

おわりに

律令国家から「隼人」とよばれた南九州。そのせいで僻地や周縁地域、後進的かつ停滞的といったイメージが、その先駆をなすと思われるがちな古墳時代にもつきまとった。その一翼を担ってきたのが、濃厚な在地色をみせる地下式板石積石室墓と成川式土器の脚台壺や壺であった。

しかしながら、大隅も薩摩も古墳時代は中央政権から排除された辺境だった、孤立した地域だった、というわけではない。少なくとも4世紀末ごろから5世紀中ごろまでの大隅は、中央政権にとって的一大重要拠点であった。それを表わす前方後円墳などの政治的モニュメントの营造は、葬送儀礼や人びとの大幅動員もふくめ、この地域にとっては革新的なできごとであった。おそらく、それは動かない。それまでの慣習や風俗などにも、大いなる流動をもたらしたのも想像に難くない。こうした伝統と革新が錯綜するなかに、歴史の深奥が潜んでいるのであろうが、いまはよくわからない。

泰然と砂丘に聳え、汎列島性をまとった横瀬古墳と、土着的な日々の生活に使われつづいた成川式土器。これらは中央と地方をつなぐ政治的一体性と、日常的な交流にもとづく集団的アイデンティティを、それぞれが体現している。そこには政治と経済の関係性を読み解く鍵が隠されているのだが、どうも律令国家が「隼人」を設定した過程には、複雑な歴史の陰影が彩られているようだ。

成川式土器が消費された南九州はまた、水田稲作を中心とした生産経済の古墳文化と、採集・狩猟・漁労などの獲得経済の貝塚後期文化という、異質な文化的接觸ポイントでもあった。これに北東北での古墳文化と続縄文文化とのかかわりもあわせて考えると、三つの異なる文化が共生していた時代の「国家フロンティアとはなにか」の問い合わせにたいするいくばくかの解が、ここから得られるのは間違いない。

弥生時代後期から7・8世紀までの永きにわたってつづいた成川式土器、それは前方後円墳と律令国家というふたつの時代転換を経験したのだが、そのときかかる有為転変がこの地を襲ったのか。あたかも「我聞せず」といった相貌をみせるように、成川式土器は私の眼には映るが、それは歴史の皮相かもしれない。先入主なしで「もの」を見る、そこからなにが言えるのか。成川式土器の研究が多くの人びとの歴史的想像力を飛翔させる、そのための手がかりになればいいと思う。

小文を書くにあたって、鹿児島大学の橋本達也さんと萩市美術館の市来真澄さんからは、関連の文献をたくさん提供され、研究情報も教えていただいた。深謝。

参考文献

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2005 「農業開発総合センター遺跡群Ⅰ(第2分冊) 吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田遺跡」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2005 「主要地方道鹿児島加世田線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 白糸原遺跡」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2006 「農業開発総合センター遺跡群Ⅲ 尾ヶ原遺跡」
- かながわ考古学財団編 2015 「海浜型前方後円墳の時代」(同成社)
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」「鹿大考古」第6号(鹿児島大学法文学部考古学研究室)
- 中村直子 2009 「7・8世紀の成川式土器」「南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表遺跡記念論文集中巻」(南九州縄文研究会)
- 新東晃一代表遺跡記念論文集刊行会
- 橋本達也 2009 「薩摩地域の古墳時代墓制と地域間交流」「薩摩加世田奥山古墳の研究」(鹿児島大学総合研究博物館)
- 橋本達也 2011 「九州南部」「講座日本の考古学 古墳時代上」(青木書店)
- 橋本達也・藤井大祐・甲斐康大編 2008 「大隅申良岡崎古墳群の研究」「鹿児島大学総合研究博物館」
- 広瀬和雄 1981 「6世紀後半における集落遺跡出土土器の二、三の分析」「大園遺跡発掘調査概要・VI—第2阪和国道建設に伴う発掘調査—」(大阪府教育委員会)
- 広瀬和雄 2003 「前方後円墳国家」(角川選書)

図出典

- 図1: 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2006
- 図2: 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2005
- 図3: 橋本・藤井・甲斐編 2008
- 図4: 橋本達也 2012 「九州南部」「古墳時代の考古学」2 古墳出現と展開の地域相 同成社

げんりょう
神領10号墳 クビレ部土器群

せあさん ああさきちょう
曾於郡大崎町



太陽の前方後円
墳における祭祀土
器群。

古墳での初期須
恵器出土数は大阪
府野中古墳に次い
で全国2位。



鹿児島大学総合研究博物館蔵



成川式土器と鹿児島の古墳時代研究

橋本達也

はじめに

九州南部、鹿児島の古墳時代というと、よく知られたイメージとしては南端の前方後円墳、あるいはこの地域独自の墓制・地下式横穴墓などではなかろうか。この地域では前方後円墳を築造するとともに古墳を築造しない広大な地域があり、地域独自の墓制が展開している。そして、鹿児島以外での知名度は低いが、この地域の生活の場には成川式土器という在地に根ざした個性的な様式の土器が広く分布する。

これらの古墳時代資料に対しては文献上の熊襲・隼人を重ね合わせた辺境觀をもっている人がいまでもまだ多く見受けられる。しかし、熊襲・隼人は古墳時代にさかのほるこの地域の民族、文化や伝統などではなく、7世紀後半につくられた律令国家の民族意識であり、古墳時代資料にそれを投影させるのは適切でない。

とはいへ、たしかに九州南部には在地で個性的な墓制や生活様式が展開しているが、それはどのように形成されたのか、また他地域でみられる地域性と何が違う、何が特殊性ととられられるのか、まだまだ検討は十分ではない。まずは現代の地理的な地方觀や、8世紀の資料に記された古代国家の民族意識を前提とするのではなく、今明らかにされつつある資料によって地域ごとの様相を把握した考古学的な評価が必要であろう。

その一端として、ここでは本書の締めくくりに、成川式土器とはどういう特性をもつ土器なのか、鹿児島の古墳時代社会の中でどういう存在であったのかについてみておきたい。

I 九州南部の古墳時代研究史と土器

別稿（本書第1章）で成川式土器研究史にふれたので、ここでは要点だけをみておく。成川式土器は大正時代から弥生土器として理解されてきた。そもそも、N.G.マンローの垂水での調査や浜田耕作の橋牟礼川遺跡での調査以来、繰り返し須恵器の共伴が記録されていながら、それらと共に古墳時代の土器様式として認識されるに至ったのは、1958年の成川遺跡の発掘調査によってである。

成川遺跡では多量の人骨が出土する土壙墓、土器棺墓が検出され、なかでも、立石を伴う土壙墓（立石土壙墓）は南薩地域に特有の墓制として注目された¹⁾。そして当時は弥生時代後期～終末期だと理解されていた成川式土器とともに、5世紀中葉～後葉とされた鉄器が多く出土したこと、あらたな認識が登場する。

その土器と鉄器のアンバランスさから、「弥生式土器の文化から新しい土師器文化への転換がきわめて緩慢で、両者併用の期間もまた長かった」といった九州南部は弥生時代の存続期間が長く、他地域の古墳時代にも併行する、といった文化・時代にズレがあると理解され、そこに「中央文化、あるいはその周辺文化の発達の過程となり様相を異にした特殊性」を見出した。とくに、他に類をみない墳丘をもたず立石を伴う群集墓、葬身具をもたず武器を中心とする多量の鉄製副葬品から「階級未分化な、かつ素朴で勇猛なる人々の集團」、すなわち隼人を考古学資料で提示するに至ったのである（斎藤・田村 1974）。この調査報告書の刊行は1974年であるが、隼人と古墳時代資料を結びつける理解は、1958年の発掘調査を契機として拡散していく。

成川遺跡の成果を受けた森貞次郎が、弥生土器の範疇で理解しながら、この様式の土器は5世紀末まで存続しており、その独自性の要因として、隔離的な生活環境、停滯性、他地域との交渉が少ないと挙げたのは、墓制研究において小田富士雄や乙益重隆が地域墓制である地下式横穴墓や板石積石棺墓（当時は地下式板石積石室墓と呼称）、「立石土壙墓」に隼人を当てはめ、これらの生成要因に、自然環境の劣悪さ、文化的孤立、征討されるべきまつろわぬ民の地と論じたことと完全に共鳴している（小田 1966・乙益 1970）。

考古学者が熊襲・隼人を論じ、九州南部を辺境とみる視線は成川遺跡の調査を経て昭和40年代以降に形成された產物なのである。むしろ戦前は皇祖皇宗の地としての意識もあり、一部の研究者の發言を除いておおむね文化の停滯した地域という認識は低く、古墳と隼人の結びつけにも慎重であった。成川遺跡の調査は「劣悪な環境下にある停滯した文化の古代九州南部」という新しい歴史観への転換をもたらしたのである。

その後、墓制研究では、ながく21世紀に入るまで熊襲・隼人は考古学的に実体のある存在として説明する道を歩んだ。一方、土器研究において1970年代までは成川式土器と隼人を結びつけるような研究もあったが、1980年代以降、成川式土器そのものの編年を中心とした研究に移行していったこともあって、古墳墓や熊襲・隼人ととの関連性について言及されることもなくなっていった。

しかしながら、土器研究では、土器そのものの独自性を背景として、研究自体も他地域の古墳時代土器研究から孤立した状況となっていた感がある。いまだ土器1型式の時間幅に100年程度の時間幅を想定するというのではなく、他地域の古墳時代土器研究ではみられない程の広さであり、土器そのものの研究が十分でないことを示している。それはまた、年代や併行関係の把握、古墳時代社会における成川式土器の位置や評価も十分になされてきたとは言い難いことも表している。

2 土器様式の構造

(1) 成川式土器

いうまでもなく、成川式土器は墓制とならんで古墳時代の九州南部を特徴づける考古資料である。弥生土器以来の伝統を継承し、弥生終末期から古墳時代を通じて展開し、その系譜上にある堺は一部で9世紀までも存続している。一見して土器の様相とは異なる顕著な独自性を有しているが、その特性は壺と壺に著しい。

壺は基本的に鹿児島県域では古墳時代を通して台付壺である。形態は底部から口縁部に掛けて開く広口を基本とし、頸部に刻目突帯を施す。サイズにはバリエーションもあるが、古墳時代後期までは大きく深いものが多い¹⁾。また、成川式土器の様式図としては周縁部となるえびの盆地や都城盆地などでは、突帯は有するものの平底の壺がみられる。その一部は人吉盆地にも及んでいる。突帯は胴部を一周してその合わせ目を直線で合わせず、ずらしている(図1)。単なる装飾としてのみではなく、そこに精神世界にまつわる物語があるのであろう。この突帯に代表される属性を有する範囲は、大成川様式図としての一体性がうかがえ、通婚や物資流通で結ばれた地域圏を形成していたものと考えられる。

壺は長胴の卵形で底部は尖底のものが基本である。大・中・小あるが、大型壺は胴部や頸部に装飾突帯を持ち、とくに古墳時代後期段階に至ってより加飾度を増す。突帯には斜格子文に竹管文を加えたり、およそ古墳時代土器としては他にみられない装飾が多用される(図2)。

また、同じく古墳時代後半期に小型器種では赤色塗彩が顕著になる。後期に至っても大型の高杯があり、またバリエーションの幅が広く、多様な形態が生まれる。小型丸底壺が継承され、平底の壺と呼ばれる独自のスタイルの供膳具に発展する。須恵器模倣による成川式の遡も多い。

成形には各器種とも一般に厚い粘土を使い、薄く仕上げるという意識は絶じて低いものが多い。一部、あるいは一時的な使用はあっても叩きや削りなどの技法が定着しない。そのため、きわめて重いものが多い。また粘土の厚みを均質に仕上げるという意識も曖昧なものがみられる。結果、楕円形になったり、左右のバランスが崩れて傾いていたり不安定な形のものも多い。

調整は板ナデが主流でハケ目は一般的に客体的であるが、その使用頻度には他地域の技法情報との接觸度合いによって地域差が現れるようである。壺の内面には粘土輪積み痕や粘土の接合痕を見かけるなど雑なものも多い。

また、各器種とも型式としての規格性が緩やかで個体ごとのバリエーションの幅が大きい。鉢など単純な器形のも

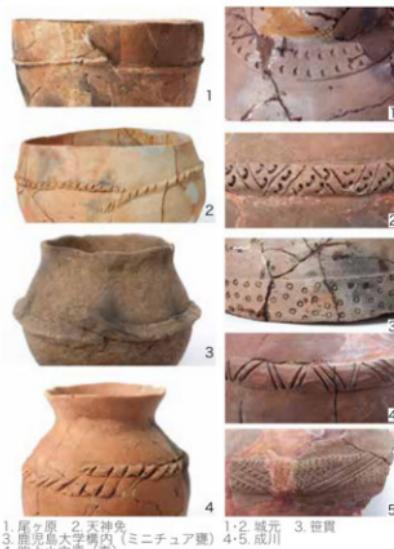


図1 成川式土器突帯の合わせ目
1.屋ヶ原 2.天神免
3.鹿児島大学構内(ミニチュア壺)
4.吹上小中原(壺)

図2 成川式土器大型壺の突帯装飾
1-2.城元 3.世貢
4-5.成川

のは自由度が非常に高く、個体ごとに違いがみられる。

これらの様相は、もちろん各時期の土師器や須恵器の影響も受けているが、さながら、「続弥生土器」的な弥生時代以来の伝統的な要素の強く残ることが特徴である。一方で、規格性の緩さ、自由さはむしろ弥生時代にはみられず、その性格は古墳時代後期以降に顕在化することに注目できる。この時期に土師器・須恵器からなる古墳時代土器様式から、個性化し、よりかけ離れて行くのであるが、それはこの時期の地域間交流の変質、不活発化に関わるものと考えられる。自由度が高く、雑なつくりの多い古墳時代後期の土器は、目立って大量に出土することも多い特徴がある。それはこの土器の使用法に関係するのであろう。成川式土器は身近にあって大量に生産・消費する、頻繁に更新するものであったとみられる。むしろ大量消費と雑さには相関関係があろう。

(2) 須恵器の非受容

肝属平野周辺域では古墳や地下式横穴墓などの葬送儀礼に伴う TK73～216 型式の初期須恵器の出土が多く確認されている。その出土量は一地域としては有数の質と量であろう。ところが、その後須恵器は生活の土器としては、わずかにしか導入されず古墳時代後期に至っても土器様式の中に組み込まれない。

これは成川式土器自体が独自形式の生産や加飾化などの個性化を強める現象と連動するものであろう。古墳時代中期後半以降の地域間交流において周縁地域はよりネットワークから疎外され始める。その中で在地土器はより独自化し、須恵器も導入契機が欠如することになったとみられる。同様の現象は生活様式にも反映されている。

3 生活様式・生産様式

(1) 住居構造

花弁状間仕切り住居 成川式土器の分布圏において住居形態の基本は方形プランである。一方で、同地域には中津野式～東原式土器段階までは花弁状間仕切り住居も併存している。このタイプの住居は弥生中期後半から後期を中心に、宮崎平野や大隅で確認されており、九州南部に特徴的な住居形態として知られる（石川 1991・北郷 1997）。最近の調査では、その下限は一部で古墳時代中期中葉～後葉の辻堂原式段階にも及ぶことが明らかとなった（図3）。この地域における在地の生活様式の継続性の強さ、あるいは東日本などと異なって外的刺激による変化の緩やかさがみて取れる。また、詳細な分析はしていないが少なくとも中津野式から東原式段階までは石庖丁や磨製石器などの石器も存続するとみられ、やはり生活様式に弥生時代以来の強い継続性がうかがえる。これらは土器にみる続弥生的生活にも共通する現象である。

炉 日本列島の広範な地域では古墳時代中期後半以降、須恵器の普及とともに、杯など手持ち食器が一般化し、また朝鮮半島系渡来文化の影響によって竈や瓶が導入される。ところが九州南部では古墳時代後半期以降に至っても、広範な地域で造り付け竈は導入されず、火処は堅穴住居内で中央炉が維持され続ける。とくにこの地域では古墳時代後半期以降に土器を埋設利用した土器利用炉が広く展開する（今塩屋 2004）。竈は都城盆地で古墳時代後期末に確認できる程度で、ほかにはまったく存在しない。

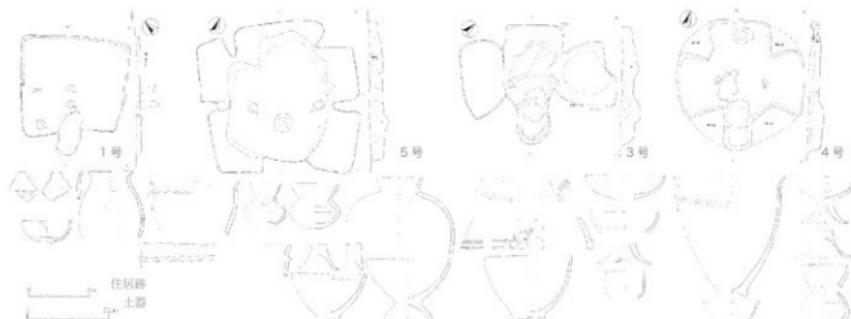


図3 伊佐市下ノ原B遺跡の住居跡と土器(辻堂原式)

甌 瓢は古墳時代後期以降にごくわずかにみられるに留まり、ある程度まとまって拓がるのは8世紀代を待たねばならない（藤井2012）。中期後葉以降全国的に普及する蒸すという調理法が基本的に古墳時代のうちでは導入されないのである。甌で蒸した食物が祭りなどでの特別な食料であるなら（佐原1996）、祭祀のあり方や祭祀が表す精神的な世界観も共有していない可能性が高い。

なお、成川式土器様式圏のうちでも、古墳時代後期後葉～末には瓶が、えびの盆地・都城盆地、あるいは大隅の志布志周辺で一程度普及しており、境界域として以北の地域との接触による複合的な文化導入がうかがえる。

高杯の多用 成川式土器では古墳時代後期に至っても高杯が多用されており、手持ち食器が多くない。これは手食が根強く残存したことを推定させ、食事法および料理にも他地域との差が広がり始めた可能性がある（中村 1999）。

大型の壺や大型の高杯が多くみられることも、これに関連しているのであろう。たくさんつくって、大きく盛る料理をみなで囲むような食事が多いのではなかろうか。これは個人別食器の拡がる一般的な古墳時代後半期の様相とは相当異なる。同時に世帯あたりの構成員のあり方、規模などにも差異が生じていた可能性があろう。

生活様式の地域性 このような生活様式に見られる地域的個性は、繼続性の強さと古墳時代中期後半以降、列島の広範な地域に波及する朝鮮半島系文化を受容しなかったことによって大きく差が生じ、時間とともに拡大する。その要因には旧来、強調されてきたような九州南部の地形・地質や自然環境に基づく停滯性といった事象で理解できないことは、広大な平野を抱え、古墳時代中期に大型前方後円墳を築造し、広域交流の拠点となった大陸隅地域であっても新たな生活様式を導入しなかったことからみて明らかである。むしろ、新來の生活様式が地域外から波及しない、地域内で受容しない要因が古墳時代中期後半以降に発生している可能性を考えるべきであろう。それは後述するネットワークの変質、古墳の築造停止等の政治的な動向と関連する問題であろう。

(2) 鐵器生產

九州南部では鉄器生産に関する地域的な様相が看取される。地下式横穴墓や板石積石棺墓などから、圭頭鐵が多く出土していることは早くから着目されていたが（高木 1982）、共伴する鉄礎からみて、中期前半には独自に地域展開し始めていることが明らかである。その分布は都城盆地からえびの盆地の間の宮崎県の内陸部に重心があり、この地域が生産・流通の中核を担っていたと考えられる（橋本 2014）。

このような、鉄器生産の地域展開が早くから認識できるのは、主頭鎌が切断・研磨という単純な板加工で成り立ち、鍛打によって平面形・側面形を形成する一般的な中期の鉄鎌とは技術差が生じていることによる。すなわち、鉄加工技術は波及したもの、技術レベルの低さのために地域的様相がより明確になっているのである。鉄劍でも同じ現象があり、短く、薄く、平らな地域独自のものがみられる。また古墳時代後期末には一般的な武器として存在しなくなる鉄劍がこの地域では在地技術とともに継続的に定着している。

鉄器生産の痕跡としては、高杯転用の羽口が大隅・薩摩を含め各地域から確認されており（図4、黒川2012）、とくに中期後半には一般集落でも鉄器生産が行われたと考えられるが、そのほとんどが鐵・刀劍・刀子・小刀などを中心としたもので、技術的にはよりレベルの高い鉄器の生産には至らなかったと考えられる。分布も墓制からみる首長層の有無とは関係なく展開しており、九州南部では、鉄器が有力首長層に掌握され、生産～流通過程の管理によって社会的序列化を促進し、地域首長権の基盤を支えるようなあり方はしていない。むしろ、基盤的な生活用具であるとともに、古墳時代を通じて生産技術の情報更新が不活発で、地域個性が目立つ製品を生みだしている。

すなわち、ほかの古墳時代社会とは生産技術・組織のあり方に違いが生じ、鉄器も古墳時代社会の中で独自の存在として異彩を放ちはじめて行く。結果として古墳時代後期末段階には独自の武装や習俗が外見に表していたであろう。

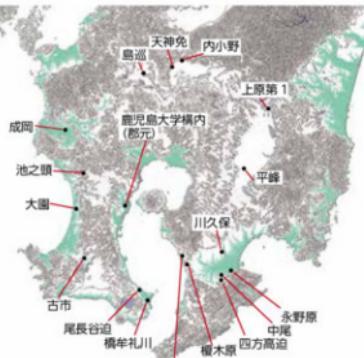


図4 感川式土器様式圓の高杯軒甲羽口出土遺跡

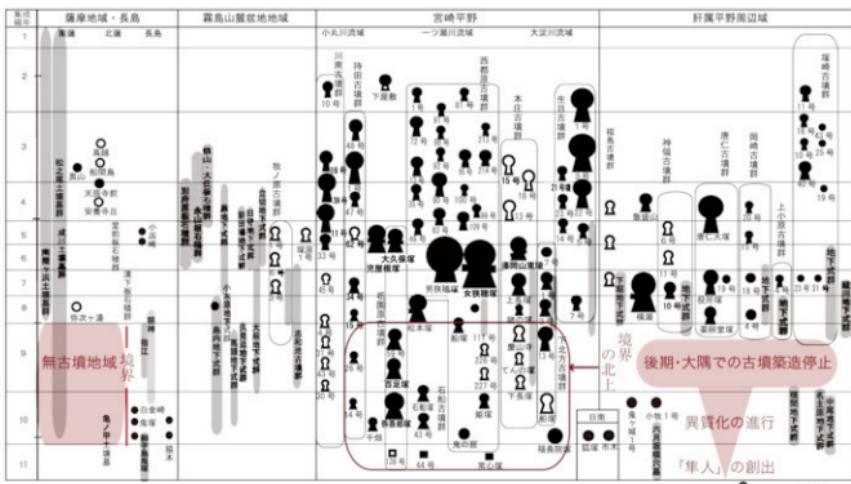


図5 九州南部の古墳墓編年

う。あらたな土器文化に関わる情報の影響が少なく個性化を強める成川式土器のあり方、生産とも通底するものである。

4 古墳時代後期における個性化と隼人への道程

古墳時代後期、近畿中央政権はより強力に、全国的な支配体系を構築はじめる。墓制・生活様式・生産構造の資料から、それまでの中央・地域の関係が各地域首長との同盟的な連合関係から主従関係へと軸を移しはじめたと考えられる。その際に、九州南部では宮崎平野の拠点化がより進行したことが、古墳や出土資料からうかがえるのであるが、逆に大隅・薩摩地域はこの時期以降、古墳時代社会の交流圏から疎外され始めたらしい。

大隅地域では後期前方後円墳、横穴式石室は展開せず、この時期、古墳築造域でなくなっている(図5)。薩摩地域でも天草の一部である長島以外で横穴式石室はみられない。これらは、上にみてきた在来要素が強く残る生活様式の個性化と一連のことと思われる。

本来、多様性の範囲にあった九州南部の諸様相が、後期には他地域の古墳文化と比して個性的様相が顕在化し、その様相は他地域との差が張り続け、7世紀段階には相当に異なった習俗を形成した可能性が高い。すなわち、古墳時代後期以降の政治的関係をもとに、ネットワークの変質、連携の脆弱化・疎外化が進行し、九州南部は新たな文化・情報から乖離し、個性化の道を進んだのである。その結果として、7世紀後半の律令国家の形成に当たっては、化外の民としての位置づけが創出されるのである。すなわち、隼人として捉えられた異質性は、自然環境やこの地域に住む人びとに備わった形質・性質によるものではなく、古墳時代社会の中での政治的動向を背景として、とくに古墳時代後期から飛鳥時代にかけてに形成されたものとみなされる。

なお、隼人の形成を考古学的に研究するには、7世紀資料の検討が不可欠である。ところが、九州南部では7~8世紀の資料がきわめて少なく、具体的な様相はさほど明確でない。現状では、隼人とよばれた大隅・薩摩地域の人びとの活動の痕跡はほんと不明といってよく、今後の資料の増加がまたれるところである。

さいごに

今後、九州南部の古墳時代社会を生活様式の面から検討する上では、成川式土器の編年と併行関係についての再検討が必要な段階にある。これまで成川式土器は、中村直子1987論文の成果に当てはめれば編年的な位置付

	須恵器	大和	河内	九州北部	九州南部 中村 1987案	九州南部 新試案	共伴関係	大隅諸島	奄美諸島	沖縄諸島
弥生時代 終末期	腰向 1 古			後期後半 新相	松木園・高付	松木園・高付		島ノ峯（古）		
	庄内 0 式 庄内 1 式	庄内 I	I A 期		中津野				宇宿港	
	庄内 2 式 庄内 3 式	庄内 II	I B 期							
古墳時代 前期	布留 0 式	庄内 III	II A 期		東原	比惠 91 次		島ノ峯（新）		
	布留 0 式 新相	庄内 IV	II B 期		中津野	広田・北区 2 号墓				
	布留 1 式	布留 I (庄内 V)	II C 期			清水前 中瀬川 芝原				
	布留 2 式	布留 II (古相)	III A 期 古相		東原	城山山頂		本村丸田	泉川	大当原
		布留 II (新相)	III A 期 (新相)	重藤 III A 期	辻堂原	熊大構内				
古墳時代 中期	TG232 ON231 TK73 TK216 TK208 TK23 TK47		重藤 III B 期		辻堂原	上水流・10 住 吹上・小中原・4 住 久宝寺 尾ヶ原・3 住		椎ノ木	スセン當	
			重藤 IV 期		笛貫 古段階	尾ヶ原・4 住				
			重藤 V 期		笛貫 古段階	安良・1・2 建物 上苑 A・3 住		上能野		
					笛貫 新段階	中尾・満・4		鹿野中野 8	兼久	アカジャン ガー フェンサ 下層
古墳時代 後期	MT15 TK10 MT85 TK43									
飛鳥・奈良時代	KT209 TK217									

久住 2010・久住 2014、重藤 2010、中村 1987、新里 2009による

図 6 成川式土器の併行関係試案

けを果たした感があった。しかし、他地域の古墳時代土器研究が進展するなか、土器から地域間比較を行うためには、1型式あたりの時間幅の長さは精査の必要な課題である。また、各型式は様式間の区分の基準や移行過程が明確でないため大枠の把握にとどまり、それぞれに細分が検討されねばならない。

年代観では、成川式土器と他地域土器との併行関係の検討がこれまで十分に意識されてきたとはいがたい。それには搬出入資料の共伴関係の検討が必要であるが、今回、久住猛雄の見解を踏まえて、北部九州土器編年との併行関係を軸にあらたな試案を作ってみた（図6）。これによれば、中津野式土器は從来いわれてきた弥生時代終末期よりも、古墳時代前期を主体とする時期に、東原式は前期後葉から中期前葉に下がり、辻堂原式は短くなるといったようにとらえられる。これは榎佳克が提示している九州古墳時代土器の併行関係といくつかの違いはあるが比較的近い（榎 2011）。中津野式土器は弥生時代終末期の土器であるか、古墳時代前期を主体とするか、この違いは時代史のなかで社会像を描く上には重要な差である。あるいは南島の土器編年、古墳時代の交流觀に与える影響も大きい。九州南部の古代史像を描く上で、成川式土器の研究にはまだまだ基礎的な課題が多く残されているのである。

註

- 1) 従来、南薩地域の代表的墓制として立石土壙墓があげられてきたが、時期の判別できる成川遺跡では弥生時代中期後半のも

のであると再認識されている（中村直 2000）。ただ、その後、指宿市南摺ヶ浜遺跡の調査によって、古墳時代にも長大な石を伴う墓の存在は確認されている。

- 2) 資料分析は不十分ながら 7 世紀に大型の台付壺はなくなる。その容量は土師器壺と共に化していると考えている。

引用文献

- 石川悦雄 1991 「宮崎県における弥生時代堅穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第 5 号 宮崎県
 今垣屋毅行 2004 「南部九州古墳時代の火凧」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会
 小田富士雄 1966 「九州」『日本の考古学Ⅳ 古墳時代（上）』河出書房新社
 乙益重隆 1970 「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本3 九州』角川書店
 久住猛雄 2010 「筑前地方における首長墓系列表の再検討」「九州における首長墓系譜の再検討」第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局
 久住猛雄 2014 「北部九州における古墳時代初頭前後の「土器交流」の実態とその背景」「大交流時代—鹿児島流域遺跡群と古墳時代前夜の土器交流—」安城市歴史博物館
 黒川忠広 2012 「鹿児島県における古墳時代の鐵製関連資料の紹介」「研究紀要 縄文の森から」第 5 号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 斎藤忠・田村晃一 1974 「総括」「成川遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告第 7 文化庁
 佐原 真 1996 「煮るか蒸すか」「食の考古学」東京大学出版（初出 1987 「煮るか蒸すか」「飲食史林」7 飲食史林研究会）
 重藤輝行 2010 「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」「古文化談叢」第 63 集
 新里貴之 2009 「貝塚時代後期文化と弥生文化」「弥生時代の考古学」1 弥生文化の輪郭 同成社
 高木恭二 1982 「主頭斧箭式鉄鏃再考」「肥後考古」2 肥後考古学会
 檜 佳克 2011 「土師器の編年 ①九州」「古墳時代の考古学」1 古墳時代史の枠組み 同成社
 中村直子 1987 「成川式土器再考」「鹿大考古」第 6 号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
 中村直子 1999 「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション—南九州の土器をメディアとして—」「新しい関係性を求めて—コミュニケーションの諸相—」I 鹿児島大学教育研究学内特別経費全学プロジェクト 鹿児島大学1
 中村直子 2000 「先史時代の山川」「山川町史」山川町
 藤井大祐 2012 「大隅・薩摩の諸勢力と対外交渉」「沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉」第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会実行委員会
 北郷泰道 1997 「花弁状間仕切り住居の成立と弥生文化後期の特色」「宮崎県史」通史編原始・古代 I 宮崎県



成川遺跡出土
鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵



成川遺跡 中央の畳が1958年の調査地



現地に立つ成川遺跡の碑 立石



成川式土器ってなんだ?—鹿児島バスの遺跡で出土する土器—

2015年9月30日

編集：橋本達也

発行：鹿児島大学総合研究博物館

890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

099-285-8141

<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/>



